Ⅱ．遺跡調査の概要

調査の理由と工程

1.発掘調査

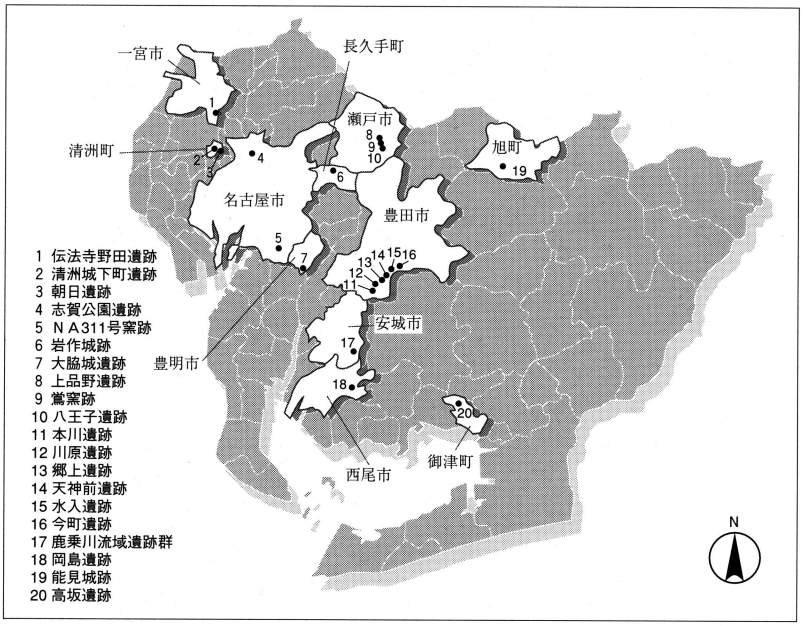
調査委託者	調査の理由	遺跡名	面積（㎡）		調査の期間	調査担当者
建設省（愛知国道）	東海環状自動車道建設	上品野遺跡（6,600㎡）	A	1,600	98.4-98.6	黒田・小澤・川添
			B	2,500	98.7-98.11	黒田・小澤・川添
			C	2,500	98.11-99.1	黒田・小澤・川添
		八王子遺跡		1,400	99.11	黒田・浅井・武部
			範囲確認	20	99.1.12-1.19	黒田・浅井・武部
		鴈窯跡		900	99.1-99.3	黒田・小澤・川添
	国道302号線建設	NA311古窯跡群		100	99.2	福岡・鈴木(正)
日本道路公団（名古屋建設局）	第二東海自動車道建設	本川遺跡（15,500㎡）	A	3,600	99.1-99.3	北村・佐藤・宇佐美・樋上・成瀬
			B	4,400	98.4-98.12	北村・佐藤・宇佐美・樋上・成瀬
			C	3,750	98.4-98.6	北村・樋上・成瀬
			D	3,750	98.6-98.8	北村・樋上・成瀬
		川原遺跡		1,200	98.4-98.5	赤塚・中野・川井・宇佐美・樋上・木川・鈴木(達)・成瀬・永井(邦)
		郷上遺跡（6,650㎡）	A	3,250	98.4-98.9	福岡・春日井・伊藤(太)
			B	2,500	98.4-98.9	福岡・伊藤(秀)・酒井
			C	900	98.4-98.9	福岡・後藤・鈴木(正)
		水入遺跡（11,600㎡）	A	300	98.9-98.11	赤塚・川井・木川
			B	2,700	98.9-98.11	赤塚・川井・木川
			C	1,500	98.9-99.3	赤塚・鈴木(達)・永井(邦)
			D	5,500	98.12-99.3	赤塚・花井・後藤・川井・木川
			範囲確認	1,600	98.7-98.8	赤塚・中野・川井・木川・鈴木(達)・永井(邦)
		今町遺跡（4,400㎡）	A	1,100	98.9-99.2	福岡・鈴木(正)
			B	800	98.9-99.2	福岡・鈴木(正)
			C	500	98.9-99.2	福岡・鈴木(正)
			D	300	98.9-99.2	福岡・鈴木(正)
			E	400	98.9-99.2	福岡・鈴木(正)
			F	1,300	98.9-99.2	福岡・鈴木(正)
		西山古窯跡		184		木下・松田
		天神前遺跡		150		福岡・酒井・伊藤(秀)
		大脇城遺跡		250	99.1	福岡・川添
住宅都市整備公団（市街地開発課）	志賀公園住宅建設	志賀公園遺跡（5,200㎡）	H	600	98.4	服部・小川・魚住
			I	1,460	98.4.-98.7	服部・小川・魚住
			J	1,550	98.8-98.11	服部・小川・魚住
			K	1,590	98.12-99.3	服部・小川・魚住
県土木部（道路建設課）	国道248号線建設	天神前遺跡（8,000㎡）	A	2,500	98.10-99.3	福岡・花井・春日井・後藤・伊藤(太)
			B	3,000	98.4-98.9	福岡・後藤・鈴木(正)
			C	2,500	98.10-99.3	福岡・伊藤(秀)・酒井
	土岐足助線建設	能見城跡		2,400	98.5-98.9	木下・花井・蔭山
	名古屋岡崎線建設	西山古窯跡		166		木下・松田
	蒲郡碧南線建設	岡島遺跡		1,000	98.6-98.9	木下・松田
	大塚国府線建設	高坂遺跡		150	98.4	木下・花井・蔭山
（道路維持課）	田籾名古屋線建設	岩作城跡（1,800㎡）	A	450	98.4-98.5	黒田・浅井・武部
			B	450	98.6-98.7	黒田・浅井・武部
			C	450	98.8-98.11	黒田・浅井・武部
			D	450	98.8-98.11	黒田・浅井・武部

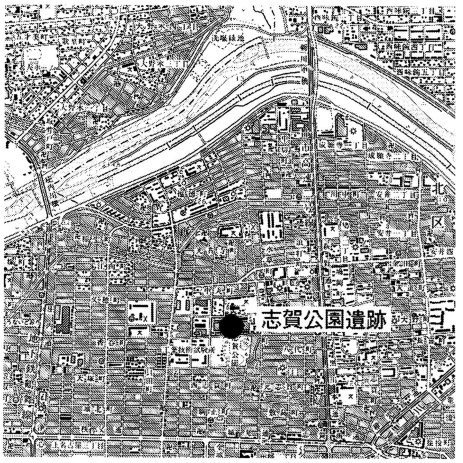
調査委託者	調査の理由	遺跡名	面積（㎡）	調査の期間	調査担当者
（下水道課）	五条川右岸流域下水道建設	伝法寺野田遺跡	2,400	98.4-98.9	服部・加藤・早野
（都市整備課）	西市場助七線建設	清洲城下町遺跡	A 2,700 B C	98.9-99.3	服部・加藤・早野
（河川課）	鹿乗川改修	鹿乗川流域遺跡群	800	98.10-99.3	木下・松田
名古屋高速道路公社	名岐道路建設	朝日遺跡	750	98.11-99.3	服部・春日井・飴谷・藤山

2.整理報告書

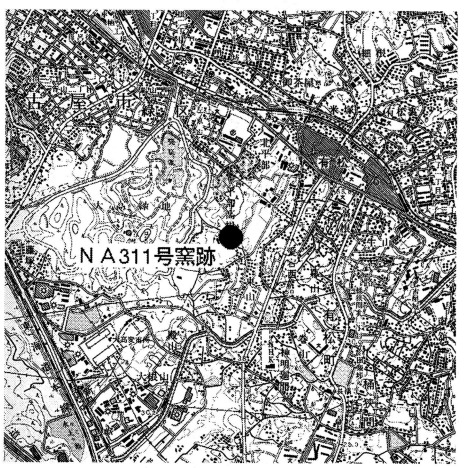
調査委託者	調査の理由	遺跡名	整理・報告書	調査面積（㎡）	調査年度
建設省（愛知国道）	国道302号線建設	高針原１号窯跡	報告書	1,000	平成８年度
		鴻ノ巣古窯	報告書	300	平成８年度
		細口下１号窯跡	報告書	200	平成８年度
日本道路公団（名古屋建設局）	東海北陸自動車道建設	門間沼遺跡	報告書	38,440	平成６・７年度
県土木部（道路建設課）		毛受遺跡	報告書	5,561	平成７・８年度
		馬引横手遺跡	報告書	7,489	平成７・８年度
建設省（名四国道） 日本道路公団（名古屋建設局）	国道23号線栄交差点立体事業化 第二東海自動車道建設	大脇城遺跡	報告書	10,000	平成８・９年度
日本道路公団（名古屋管理局）	名神一宮上りP.A.建設	三ツ井遺跡	報告書	12,100	平成８・９年度
県土木部（都市整備課）	県道健康の森線建設	森岡第１号窯跡群	報告書	350	平成８年度
愛知県教育委員会（文化財課）	新資料館建設	朝日遺跡	整理	5,547	平成７・８年度

平成10年度　調査遺跡位置図





国土地理院１：25,000地図「名古屋北部」



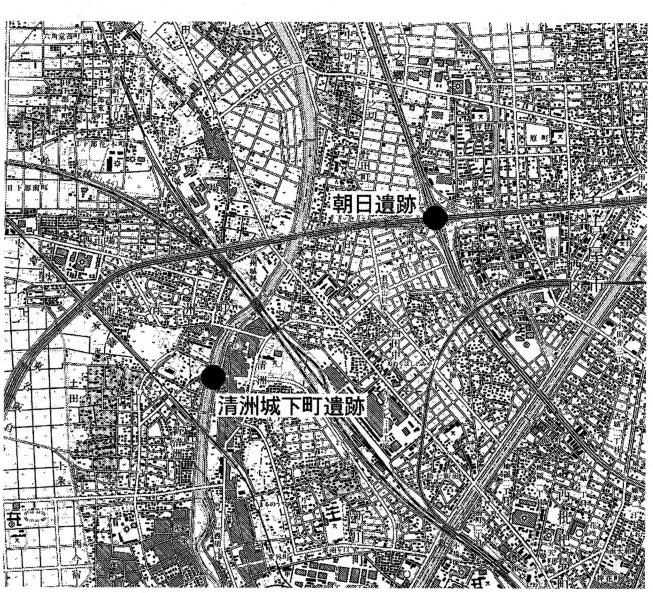
国土地理院１：25,000地図「鳴海」



国土地理院１：25,000地図「一宮」



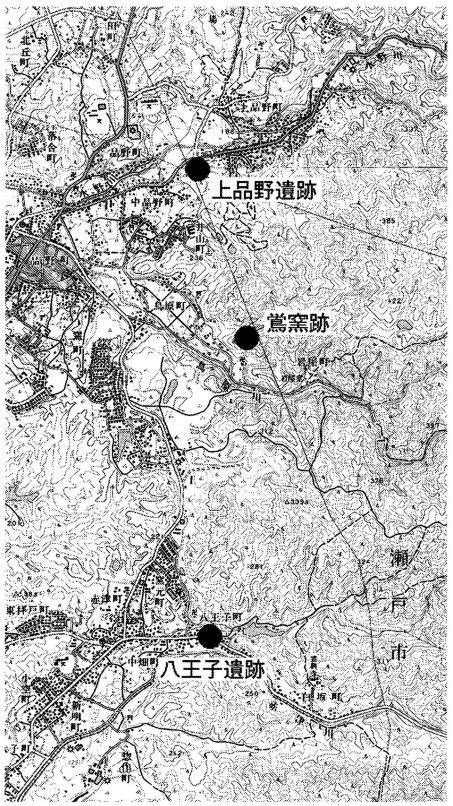
国土地理院１：25,000地図「知立」



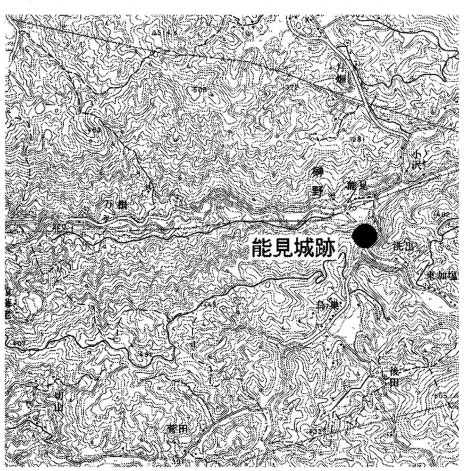
国土地理院１：25,000地図「清洲」



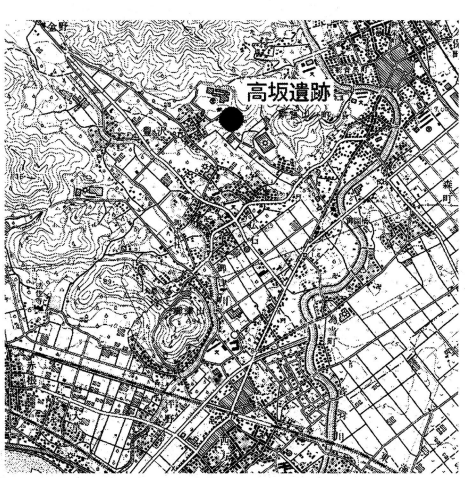
国土地理院１：25,000地図「瀬戸」



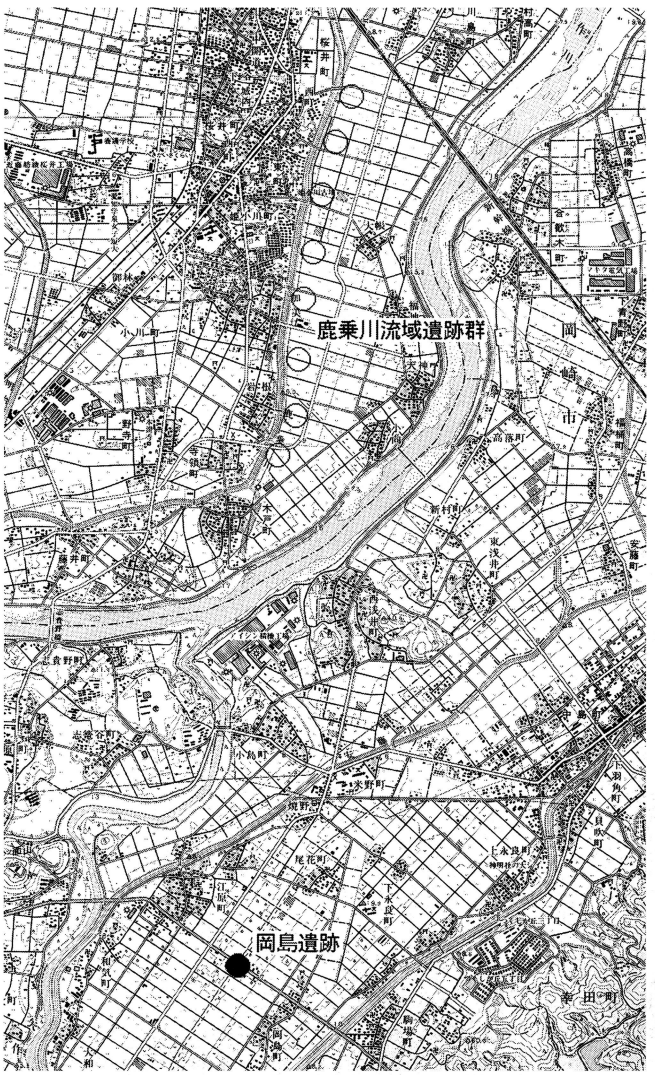
国土地理院１：25,000地図「多治見」「猿投」



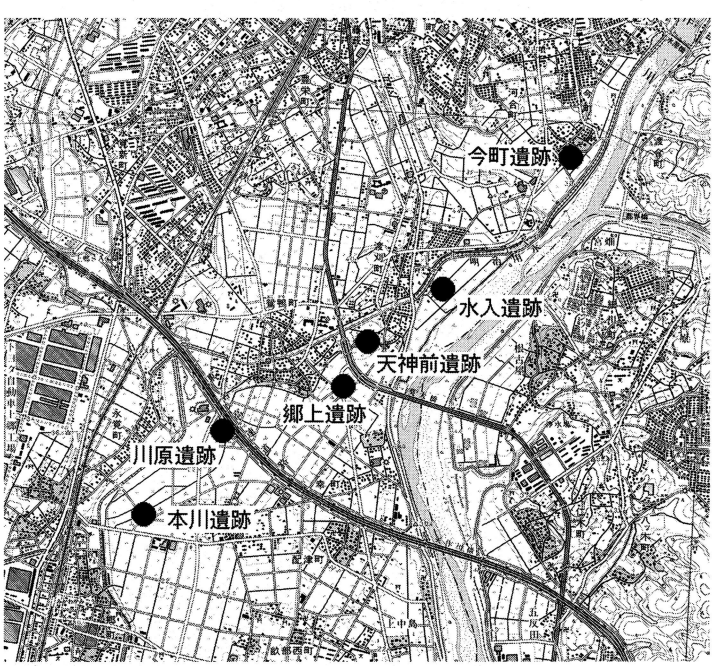
国土地理院１：25,000地図「小渡」



国土地理院１：25,000地図「小坂井」



国土地理院１：25,000地図「安城」「西尾」

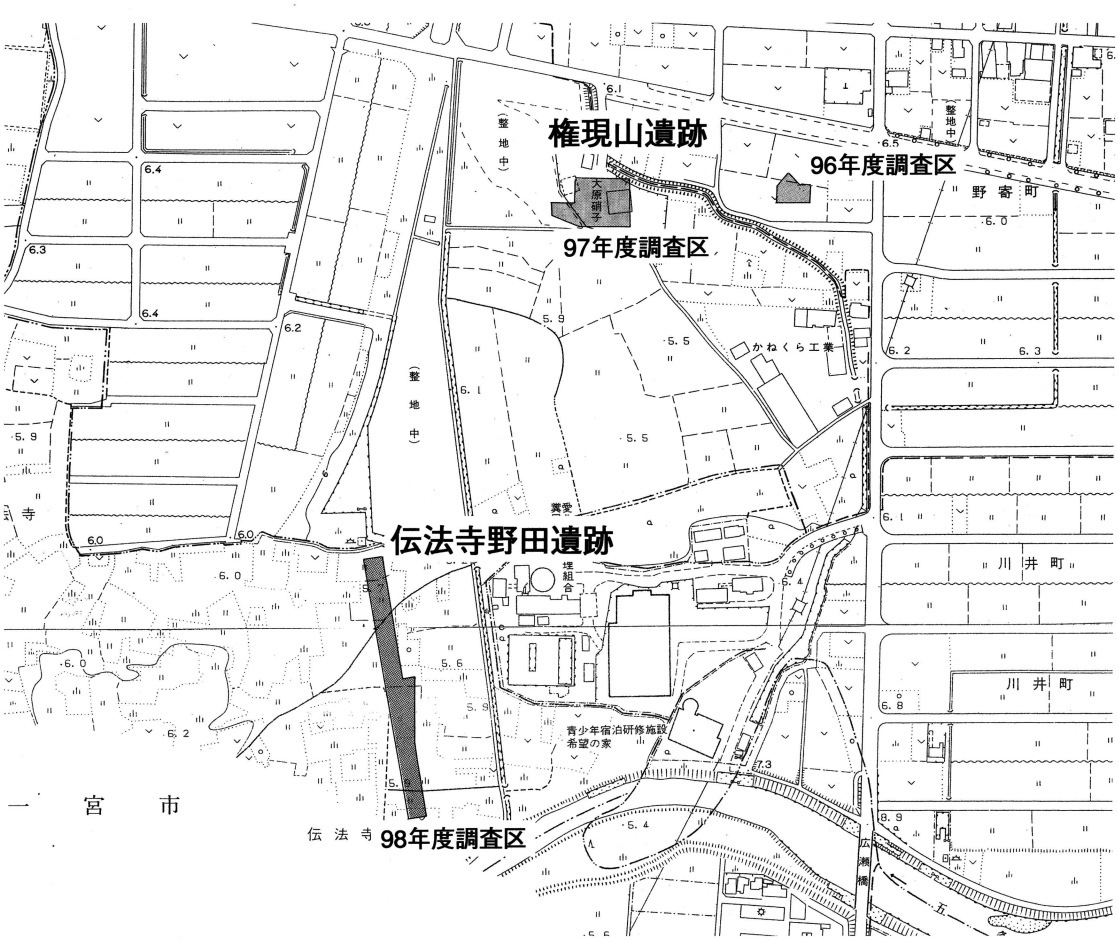


国土地理院１：25,000地図「豊田南部」

伝法寺野田遺跡（でんぽうじのだ）

調査の経過　伝法寺野田遺跡は一宮市の南東端、丹陽町伝法寺地内に所在し、五条川がそのなかほどで大きく蛇行する地点の右岸域に立地する。遺跡の周囲一帯は、縄文時代から弥生時代にかけての遺跡が高い密度で分布する地域として従来から注目されており、本遺跡にも元屋敷遺跡、岩倉市権現山遺跡、岩倉市北島白山遺跡などの遺跡が近接して存在する。発掘調査は五条川右岸流域下水道建設に伴うもので、平成８・９年度の権現山遺跡の調査に引き続いて、今年度は2,400㎡の調査を４月から９月にかけて実施した。

遺跡の概要　今年度に実施した調査の結果、本遺跡が弥生時代から、古墳時代、古代・中世にわたる複合遺跡であることが明らかとなった。なかでも注目すべき成果として、弥生時代中期中葉と考えられる水田を検出したことが挙げられる。これまで県下では、最も時期が遡る水田として一宮市大毛池田遺跡において調査された古墳時代初頭の水田が知られていたが、弥生時代水田の検出は初めてとなる。水稲耕作を実証するうえでの不動産的な証拠となる水田跡が調査されたことにより、当地域の弥生時代における生業の一端が今後明らかにされるものと思われる。



第１図　調査区位置図（１：5,000）

弥生時代中期　弥生時代中期には、東から延びる微高地が調査区のほぼ中央にあたっていることが確認でき、微高地の周囲は緩やかに傾斜する。水田はこの微高地南縁の緩傾斜地を利用して営まれている。また、微高地の北西を幅５～７ｍ、深さ約1.8ｍの小河川が大きく蛇行しながら南流している。

水田を平面的に検出したのは、Ⅶ層・黒褐色粘土層の上面である。Ⅶ層は弥生時代中期中葉の遺物包含層でもある。水田域では、Ⅶ層と上位のⅤ層・暗褐色粘土層の間層としてⅥ層・灰黄色シルト層が存在し、水田面を被覆する。Ⅴ層もⅦ層と同様に、弥生時代中期中葉の遺物包含層となっており、水田の年代を弥生時代中期中葉と推定する拠り所となっている。さらにⅤ層は古墳時代前期に、洪水性の堆積（Ⅳ層・灰黄色細粒砂層）によって覆われる。

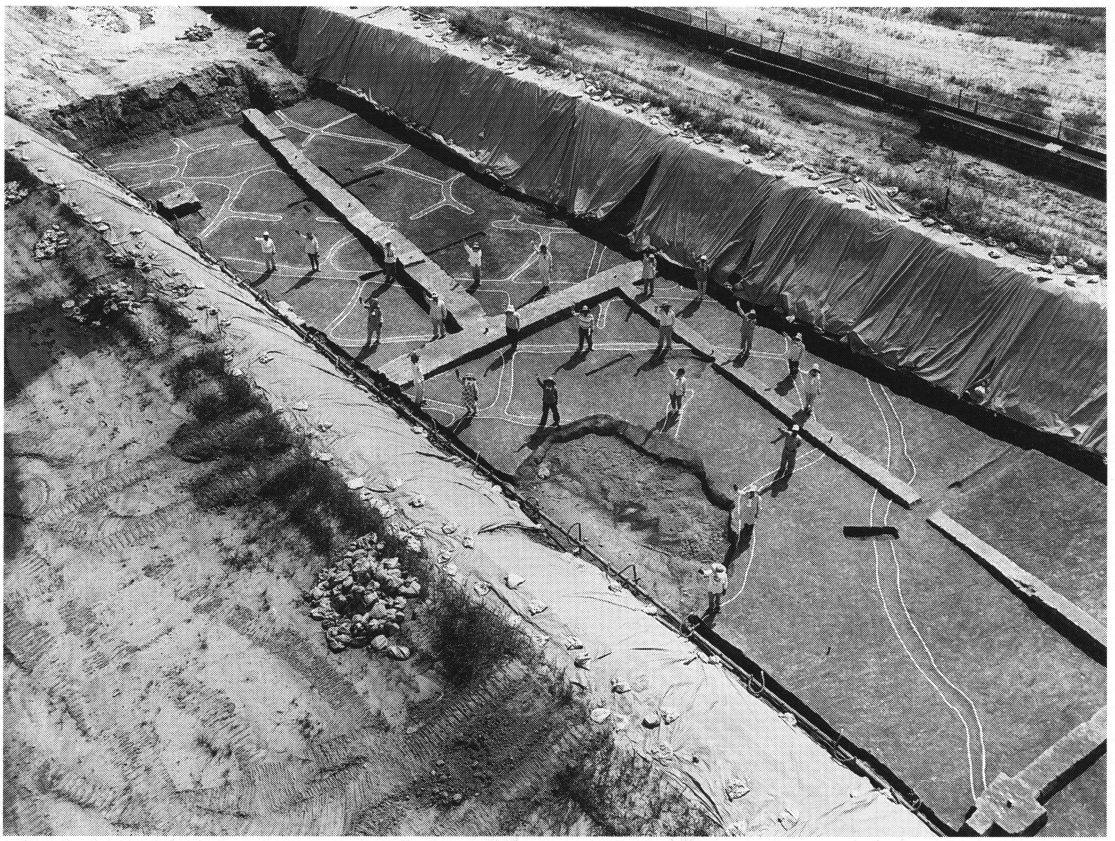
水田区画は、まず北西～南東方向の大畦畔が基軸として設定され、それと平行、あるいは直交する方向に小畦畔を配することによって、典型的なところで長軸が約８ｍ、短軸が約３ｍの小区画を形成するものである。大畦畔の上端幅は約80㎝、下端幅は約120㎝、高さ約10㎝を測り、小畦畔は幅約20㎝、高さは２～３㎝を測る。水田への水配りは、田面の高低差を利用するいわゆる「田越し灌漑」によっていたものと推定される。さらに、北西～南東方向の畔と平行して微高地の最高所と微高地の縁辺に掘削された溝（溝１・溝２）は用水路として機能していた可能性も考えられる。また、水田面の精査によって、稲株痕とみられる径約10㎝の小穴や、耕具痕とみられる半月形、長楕円形を呈する小土坑が確認された。一方、足跡は確認されなかった。

Ⅴ・Ⅶ層の遺物には、弥生時代中期中葉に属する弥生土器の甕、壷などがあり、微高地を中心にして出土した。小河川からも同時期の土器が古墳時代の土器と混在して出土している。他の出土遺物には石鏃等の石器があるが、収穫具等の出土はみられなかった。なお、特筆すべき遺物として、大畦畔の脇から出土した無茎銅鏃がある。

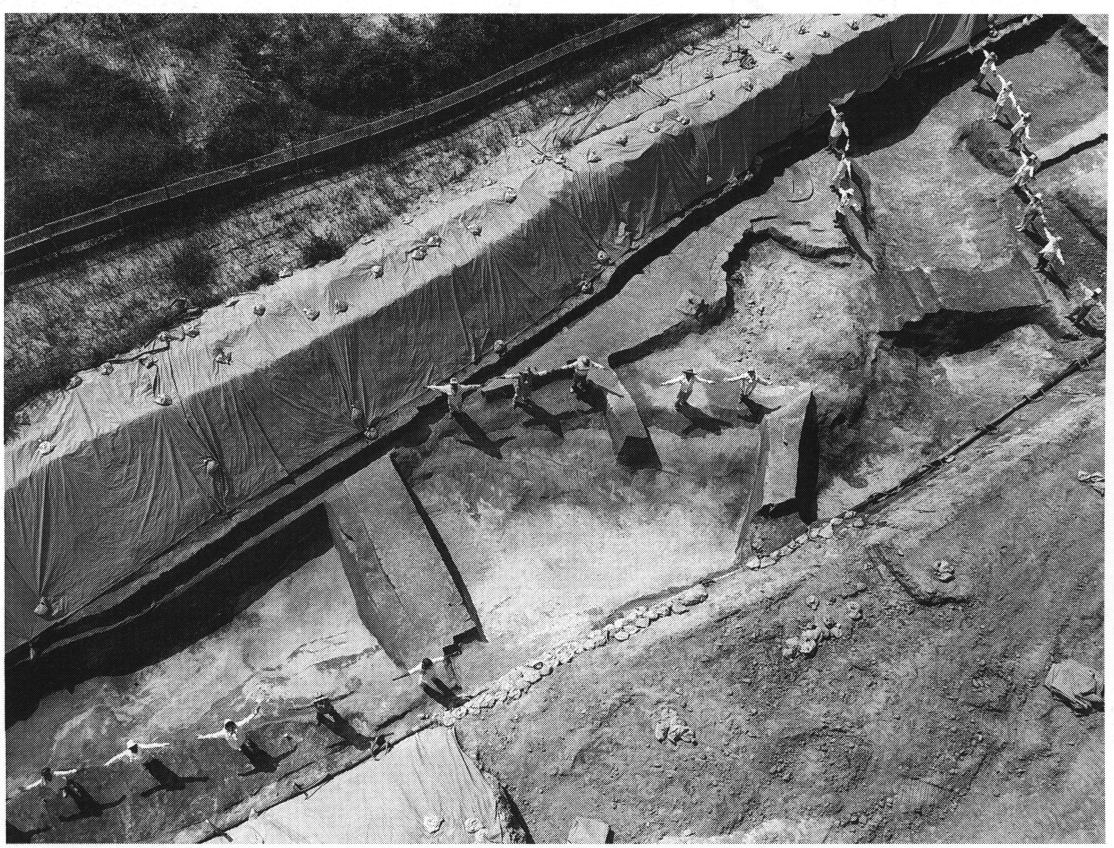
古墳時代　古墳時代前期には洪水によって小河川が一気に埋没し、弥生時代には起伏があった地形もかなり平坦となる。当該期の遺構はほとんど確認されないが、小河川や包含層中からは、土師器の台付甕や高杯などが出土している。

古代・中世　古代・中世にはそれぞれ溝と土坑がわずかに確認できるにすぎず、これらの遺構から須恵器の杯・鉢、灰釉陶器椀、灰釉系陶器椀などの遺物が少量出土した。

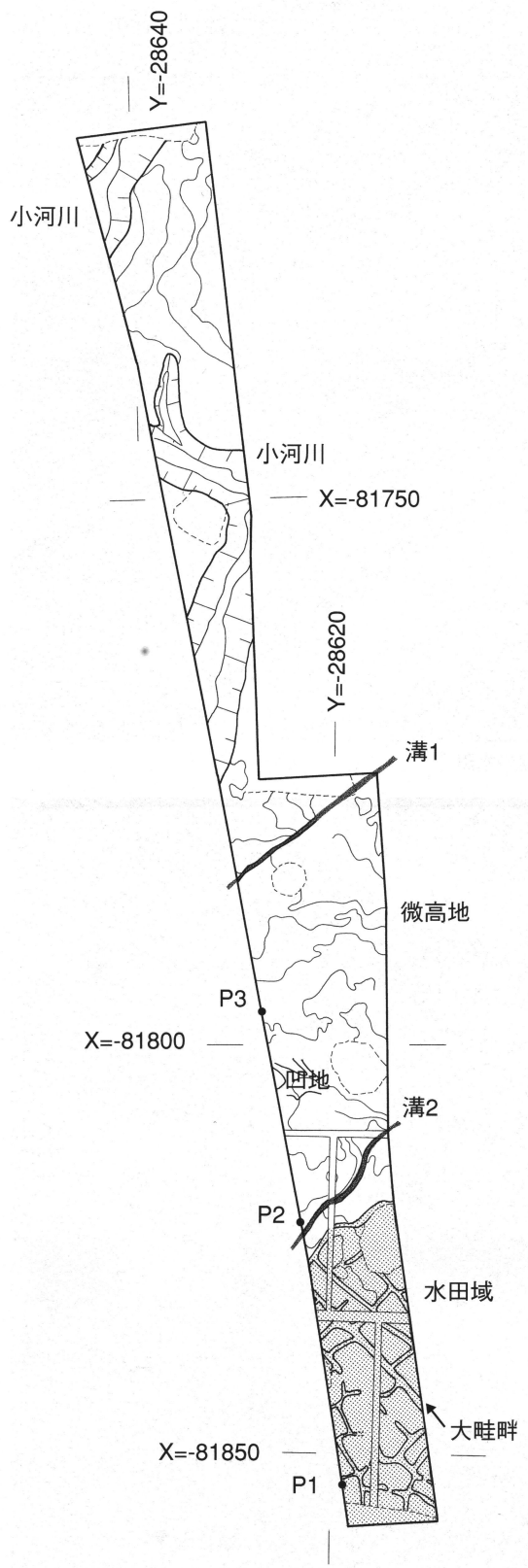
まとめ　弥生時代の水田を周囲の微高地、小河川と一体として捉えることができた点は、生産域をも含めた当時の集落景観を復原するうえで、非常に有意義な成果である。さらに、遺跡の形成過程が明らかとなれば、遺跡の周囲に存在する一連の弥生時代集落の動向と比較することによって、後背湿地において可耕地が獲得されていく過程を、自然環境の変化と対応させながら具体的に描くことも可能となろう。また、水田面で確認された稲株痕や耕具痕は、弥生時代の農業技術体系を推し量るうえで大いに参考となるが、それだけに慎重な扱いが求められる。今後、自然科学分析の成果も十分に活用しながら、これらの課題に取り組むこととしたい。　（早野浩二）



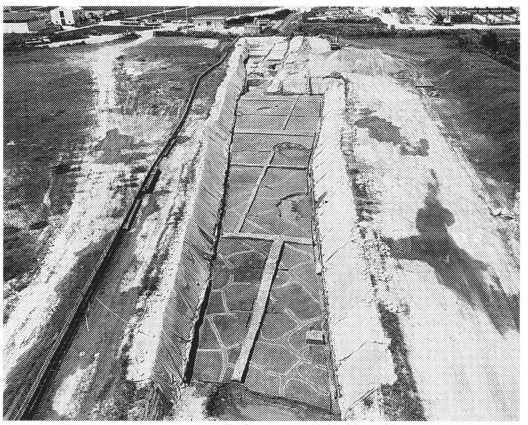
弥生時代中期の水田



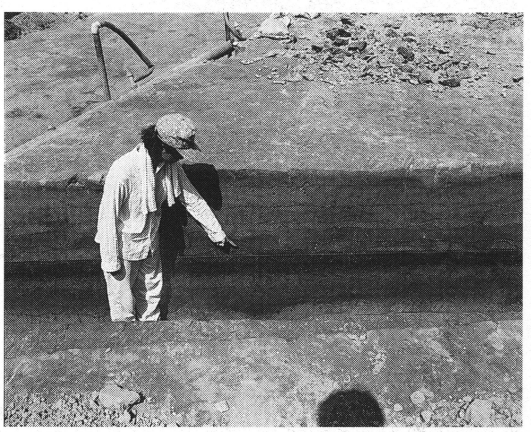
小河川



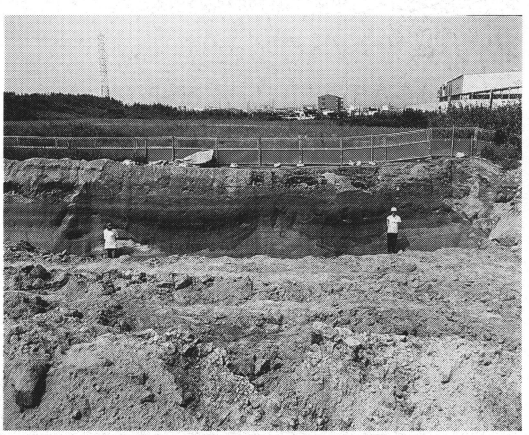
第２図　弥生時代中期の遺構配置図（１：800）



調査区全景



大畦畔の断面



小河川の断面

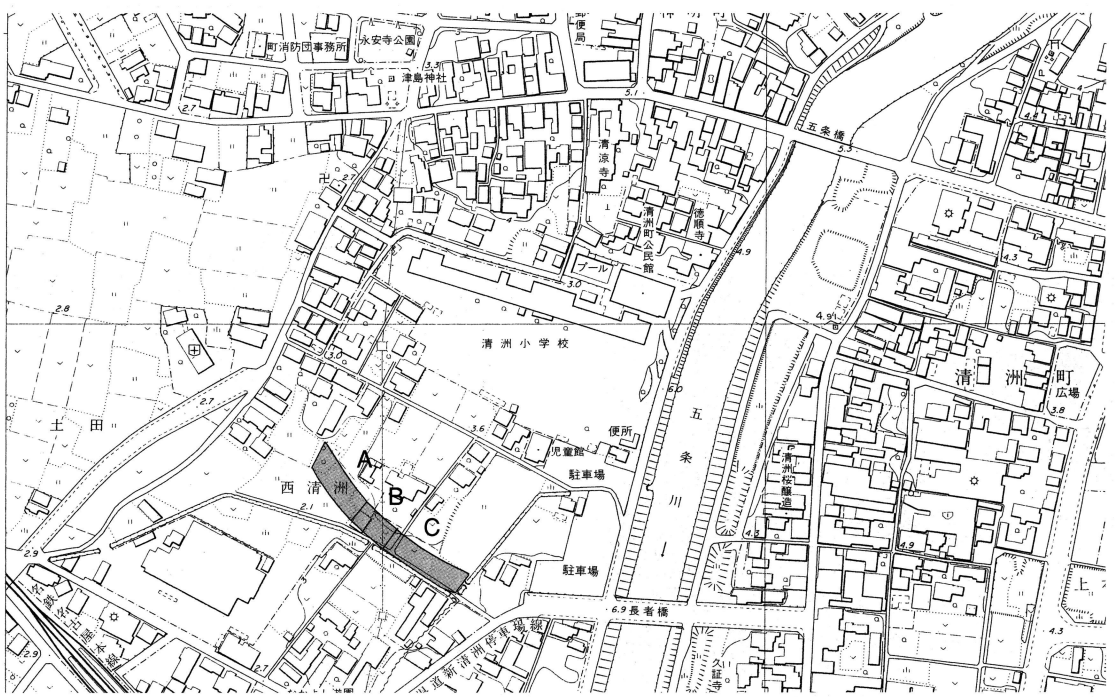
清洲城下町遺跡（きよすじょうかまち）

調査の経過　清洲城下町遺跡は、西春日井郡清洲町に所在する。本遺跡は濃尾平野の中央部を南流する五条川中流域に形成された自然堤防とその後背湿地上に立地する古代から近世にかけての複合遺跡である。発掘調査は昭和59年度から、名古屋環状２号線建設、五条川河川改修などに伴う事前調査として継続的に行われている。今年度は県道助七西市場線建設に伴う事前調査として、平成10年９月から平成11年３月にかけて実施した。調査面積は約2,700㎡である。

今年度の調査区は五条川右岸、大字廻間地内の住宅地と水田・畠地からなる地点に位置する。この地点は以前に五条川河川改修関連で調査が実施されている本町西部地区から西に約１００～２００ｍ隔たった位置にあたり、これまでに隣接する地点で調査は行われていない。調査は廃土処理の問題等を考慮したうえで、Ａ～Ｃ区の３調査区に分割して行った。

調査の概要　検出された遺構は、15世紀後半～16世紀後半の城下町期前期までに相当する時期と、16世紀末～17世紀前半の城下町期後期に相当する時期の２時期に大きく分けられる。

城下町期前期の遺構は、北西―南東方向に走る大溝（ＳＤ101）があり、Ａ・Ｂ区で大溝の南岸を検出した。大溝の北岸は調査区外に当たるため、正確な規模は不明であるが、深さは約1.5ｍ、幅は推定で10ｍ前後を測るものとみられる。大溝はＡ区のほぼ中央で自然堤防状微高地を囲むように北東方向に折れる。Ａ区の西半では、旧五条川に向けて落ち込む谷状地形（ＮＲ01）が確認された。大溝の出土遺物は、下層は15世紀後半～16世紀前半の

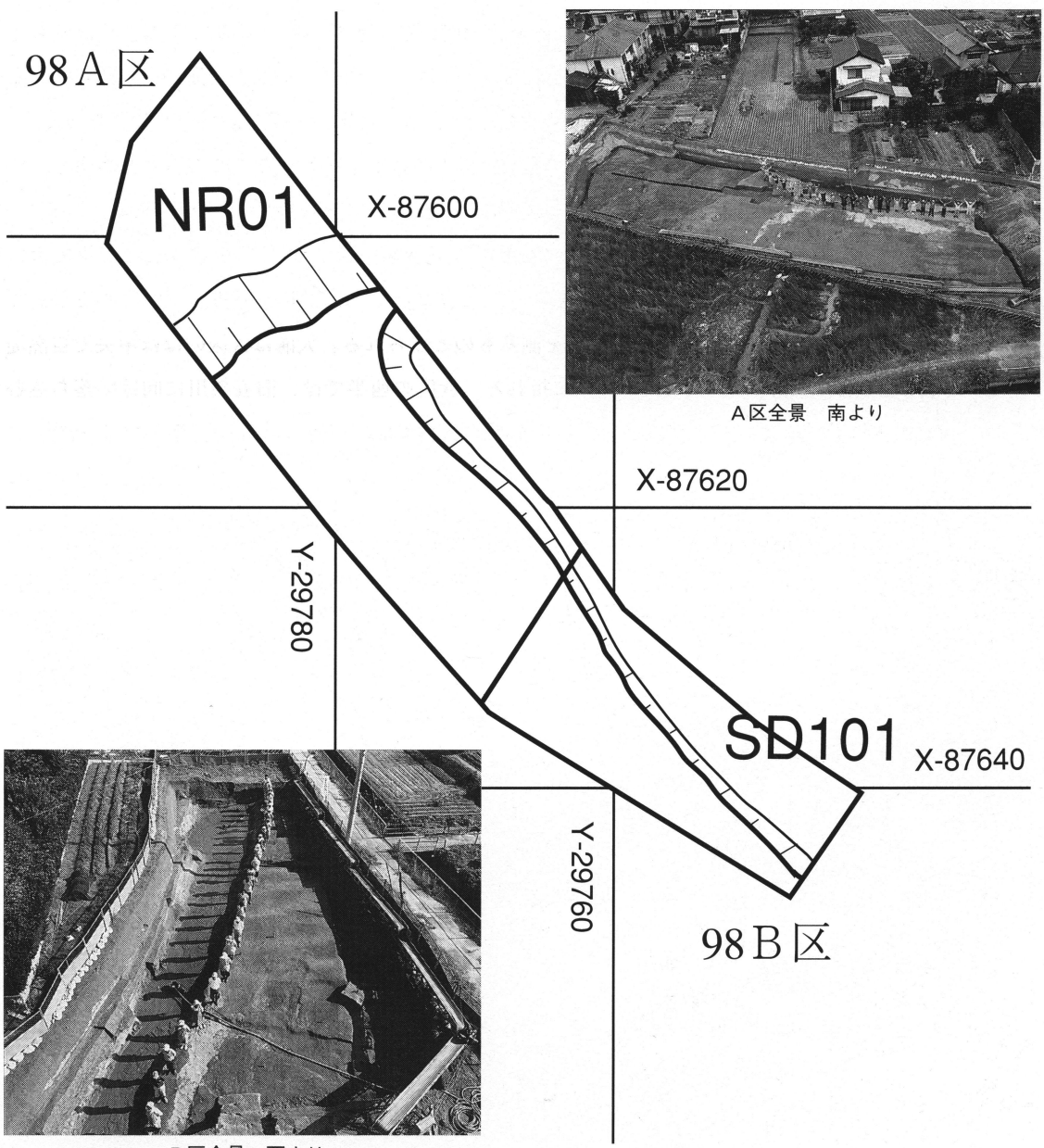


第１図　調査区位置図（１：5,000）

ものが主体で、上層は16世紀後半までのものが含まれる。なお、特筆すべき遺物として、本遺跡では2例目を数える陶製の狛犬がある。

城下町期後期の遺構は溝群と若干の土坑があり、城下町期前期の遺構の地割を踏襲している。そのなかでもSD07からは、志野向付、志野小杯、志野丸皿、漆器椀、左巻三巴文軒丸瓦などの遺物を含む17世紀前半の良好な資料群が得られた。

まとめ　城下町期の南西限付近にあたるとみられる今回の調査地点で、城下町期前期の大溝による大規模な区画が確認されたことは、当時の城郭構造を復原するうえで非常に大きな成果である。出土する遺物には陶製の狛犬など、特殊なものも含まれることから、その位置づけが今後の課題となる。（早野浩二）



A区全景　南より

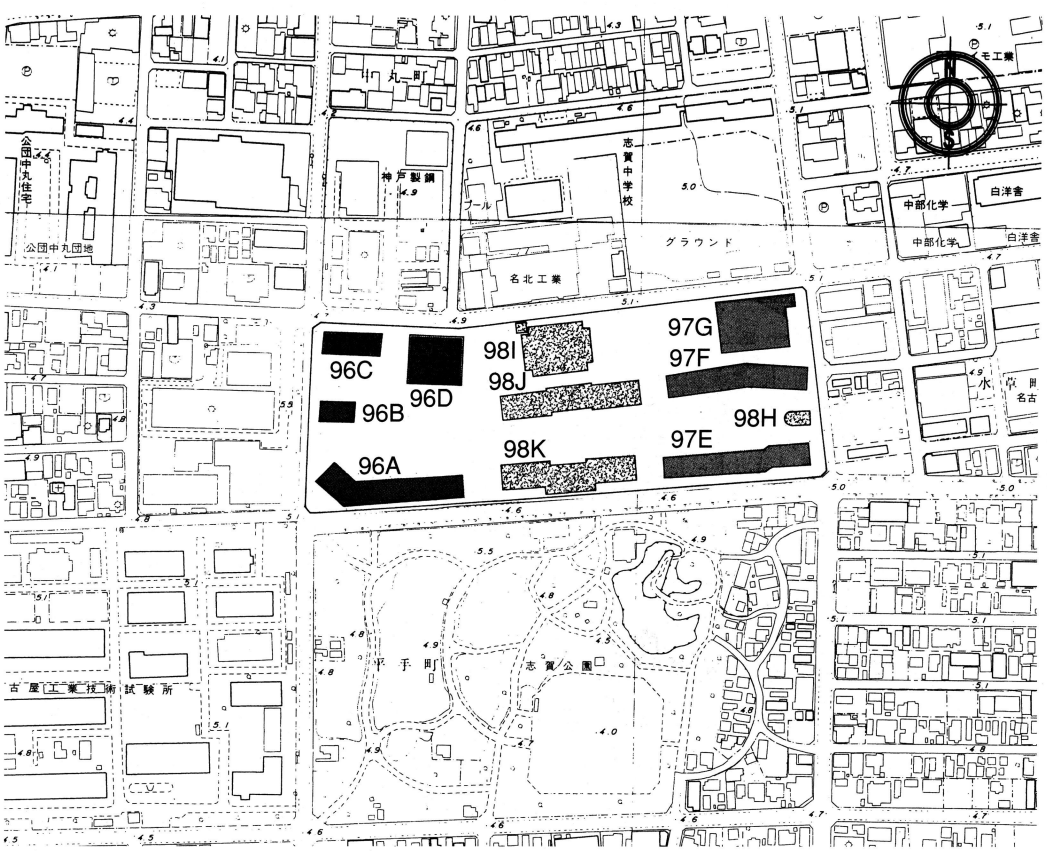
B区全景　西より

第2図　城下町期前期遺構配置図（1：500）

志賀公園遺跡

調査の経過　発掘調査は（神戸製鋼跡地名古屋市北区中丸町）における住宅・都市整備公団による住宅建設に伴う事前調査で、愛知県教育委員会より委託事業として平成８年度から実施している。本年度は３年間の調査最終年度にあたる。隣接する遺跡としては、南に志賀城跡、南西に西志賀遺跡がある。志賀公園遺跡としては今回の調査までに志賀公園内（昭和５年愛知県教育委員会、平成５・６年名古屋市教育委員会）と西区貝田町内（平成７年名古屋市教育委員会）にて、計４回の調査がおこなわれている。

本年度の調査はＨ・Ｉ・Ｊ・Ｋ区の計5,200㎡。ここではそのうちのＩ区・Ｊ区について述べることとする。遺跡の基本層序は、第１層として客土（神戸製鋼撤収に伴う整地層）第２層：灰色砂質シルト（近世以降の耕作土）、第３層：黄褐色シルト（中世）、第４層：黄灰色粘質シルト（飛鳥時代～古代）、第５層：オリーブ灰色細粒砂（河川の氾濫における堆積層）、第６層：黒褐色腐植質粘質シルト、第７層：黄灰色粘質シルト（古墳時代中期）、第８層：灰色粘質シルト、第９層：黒褐色粘土（弥生時代中期）、第10層：暗灰黄色粘質シルト（基盤層）である。検出された遺構・遺物は弥生時代中期、古墳時代中期、飛鳥時代～古代、中世以降の４時期に大きく区分できる。また遺構検出は、弥生時代中期は10層上位、古墳時代中期は７層上位もしくは８層上位、飛鳥時代～古代と中世以降は４層上位もしくは５層上位でおこなった。



第１図　調査区位置図（１：5,000）

調査の概要　本年度の調査の概要は過去２ヵ年の成果を踏まえて、弥生時代中期をＡ期、古墳時代中期をＢ期、飛鳥時代～古代をＣ期、中世以降をＤ期として、以下述べることとする。

Ａ期の遺構と遺物　昨年度方形周溝墓や松菊里型住居が確認された調査区のＥ区から北西方向に延びると思われる微高地上に位置する本年度の調査区Ｉ区・Ｊ区では、方形周溝墓17基、竪穴住居３棟、掘立柱建物４棟などの遺構を確認した。

方形周溝墓は、５ｍ×５ｍ前後の小規模なもの13基、７ｍ×10ｍ前後の中規模なもの３基、一辺20ｍ超の大規模なもの１基を確認した。その景観は、大規模な方形周溝墓（ＳＺ27）に少々間を置いた位置に中規模なもの（ＳＺ11・12・21）と小規模なものが配置している。

周溝は、大規模なもの（ＳＺ27）は幅５ｍ強、深さ１ｍ強であり、中規模なもの（ＳＺ11・12・21）は幅1.5～2.5ｍ、深さ30～50㎝であり、小規模なものは幅60～80㎝、深さ25㎝前後である。一辺20ｍ超の大規模な方形周溝墓（ＳＺ27）は、後に一辺10ｍ前後の２基に造り替えられている。主体部はＳＺ19・ＳＺ27で検出され、それぞれ170×110㎝、230×120㎝程の組み合わせ式木棺の痕跡を確認した。このほか、ＳＤ149は埋土の中位に遺物片を伴う炭化物層が堆積、溝中央部に溝内埋葬を行った可能性がある。

建物は、Ｉ区では両面棟持柱を伴う１×５間の掘立柱建物（ＳＢ19）、Ｊ区では２×４間（ＳＢ21）、１×２間～（ＳＢ23）１×３間（ＳＢ25）の掘立柱建物が確認できた。ＳＢ19は柱穴が径35～45㎝、深さ30㎝の棟持柱と径70～90㎝、深さ45㎝の柱を持つ規模であり、Ｊ区の掘立柱建物の柱穴規模（径20㎝、深さ20㎝程）と較べて特に際だった存在の建物であったと考えられる。このことは、墓域の中に存在する大型建物のＳＢ19が、特異な存在であったことを窺わせる。

遺物は少量であるが、ＳＺ19の周溝から壷、ＳＤ221から壷、ＳＢ22から甕・高杯、ＳＢ26から壷、ＳＺ27の周溝から石鏃が出土、時期はいずれも朝日式末から貝田町式である。

一辺20ｍ超級の大規模な方形周溝墓は、尾張平野ではこれまで朝日遺跡・八王子遺跡で確認されているのみである。これまでの調査成果から考えて弥生時代における志賀公園遺跡は、この地域における拠点的遺跡と考えられる。志賀公園遺跡の景観復元は、隣接する西志賀遺跡を含めた空間内での今後の検討課題の１つと考えられよう。

Ｂ期の遺構と遺物　帆立貝形前方後円墳（ＳＺ09）の推定規模は、墳長50.0ｍ、前方部長16.5ｍ、前方部幅22.0ｍ、後円部径35.0ｍを測る。その周囲には幅約６～８ｍの周濠が二重に巡っていたと考えられる。現状での周濠の深さは0.3ｍと浅い。堆積層は大きく２層よりなり、最下層は黒褐色シルト層により遺物はほとんど見られない。その上位の下層に部分的に、黒褐色シルトの炭化物層が堆積しており遺物が大量に出土している。さらにこの上位には、黒褐色腐植質粘質シルト層が堆積し、遺物はほとんど存在していない。

今回の調査範囲は、墳丘の後円部にあたると想定される部分が範囲外であるためその様相は不明である。しかし、調査によって確認できた前方部はその隅部に遺物集積（ＳＵ12）が検出されたことによれば、前方部は低墳丘を想定できる。この墳丘の構築に関する

問題であるが、前方部断面等の観察によれば、盛土部分の周辺部に断面三角形ないしは台形の高まりを構築し、その内部に土を充填する土盛り手順を踏んで造成している。また、一部幅の広い堤状の部分でもこのような造成を行っていたと思われる。

帆立貝形前方後円墳の周囲には、周濠が二重に巡っていたと考えられる。前方部側の外の周濠は途切れて陸橋状になっており、一括性の高い遺物集積（ＳＵ10・14）が存在する。また、この外側の周濠を区画するとも考えられる堤の存在も窺える。

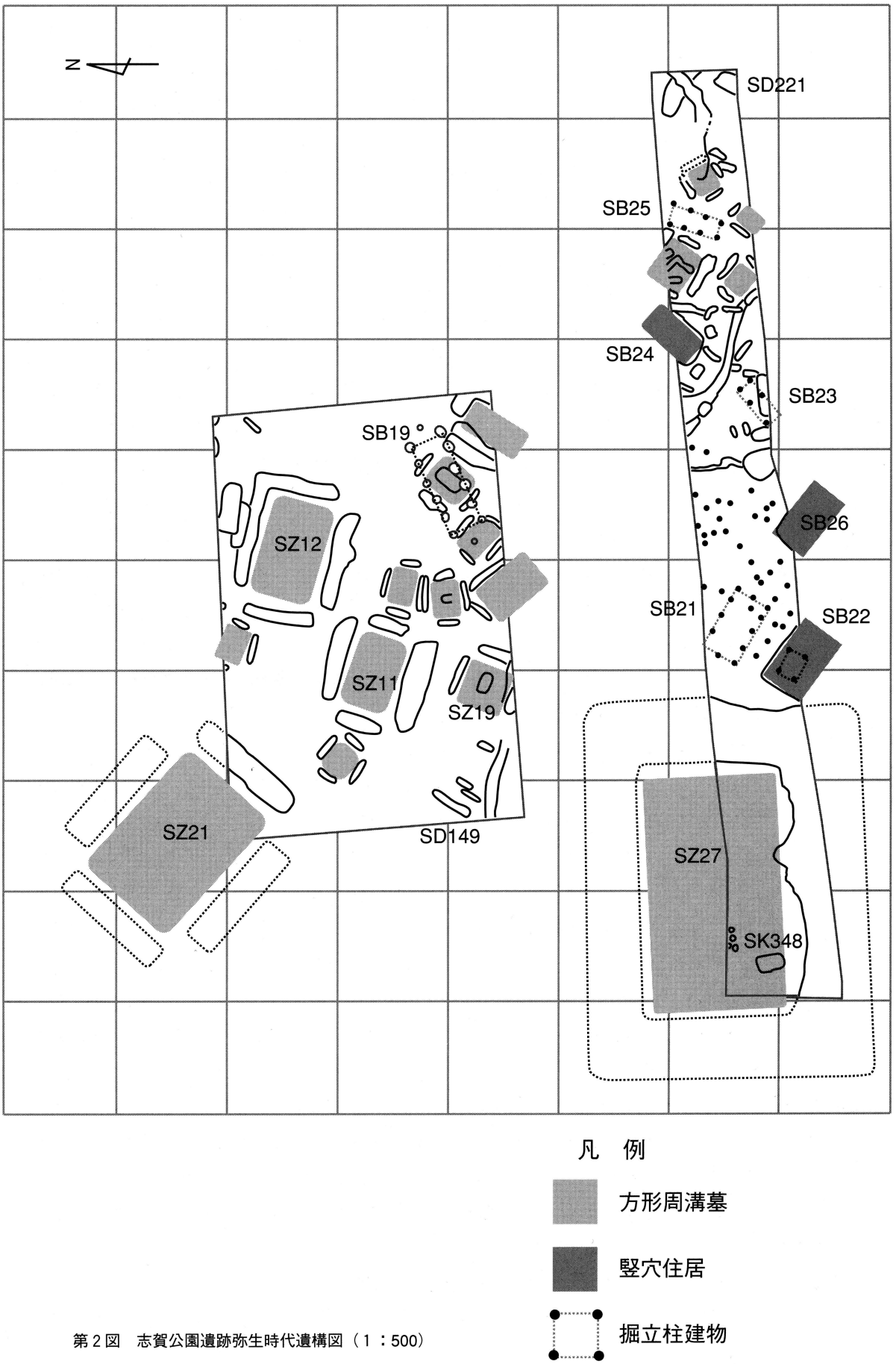
遺物は、墳丘のくびれ部（ＳＵ11）・前方部隅（ＳＵ12）・周堤部（ＳＵ10・13・14）から大量に出土している。なかでもＳＵ１１は遺物とともに炭化物層が広がっており、緑泥片岩の敷き詰められた敷石状の部分が検出された。墳丘のくびれ部に、敷石が施され特異な空間を設けたと思われる。遺物集積の中には、縄蓆紋の施された韓式系土器の壷、須恵器の脚付円窓壷・筒形器台・𤭯・高杯・杯などがあり、これらの時期は東海地方最古段階のＴＫ－７３併行期のものであり、その多くは陶邑古窯群産と思われる。須恵器とともに大量に出土している土師器には、高杯・小型壷・台付甕・杯がある。また、無数の臼玉、有孔円盤、剣形石製品、勾玉形石製品が出土している。遺物集積から出土している土器のなかでは、須恵器の脚付円窓壷が他に例を見ないものであり、また土師器の杯に須恵器の杯が入れ子状態で出土しているものも注目できる。遺物集積地以外からでは、前方部中央先端部より臍穴付鳥形木製品が出土している（＊類品として長野県石川条里遺跡に出土例がある）。また、古墳埋没後の溝からの出土ではあるが、５世紀代のものと思われる鉄刃装着用二又鍬が出土している。

以上のように、５世紀前後から５世紀前葉にかけて、この帆立貝形前方後円墳が造営されていたようである。志賀公園遺跡では、既に円墳が確認されており、円筒埴輪も出土している。こうしたことに加えて、本年度の調査で帆立貝形前方後円墳が確認されたことで、遺跡周辺にこの古墳を中心とした古墳群が展開していたと予測される。さらに、『帆立貝形前方後円墳の採用』・『須恵器』の導入から、この古墳の被葬者は先進技術を駆使できた盟主、つまり庄内川と矢田川合流域に広がる沖積地開発に関与した指導的立場の人物であったと考える。平成８年度から実施してきた志賀公園遺跡の調査成果は、これまで古墳の空白地帯であった庄内川下流域の古墳時代を考えるうえで貴重な資料を提供することができた。今後、庄内川の対岸に位置する白山藪古墳などを視野に入れ、この地域の古墳時代の景観復元が課題と考えられる。

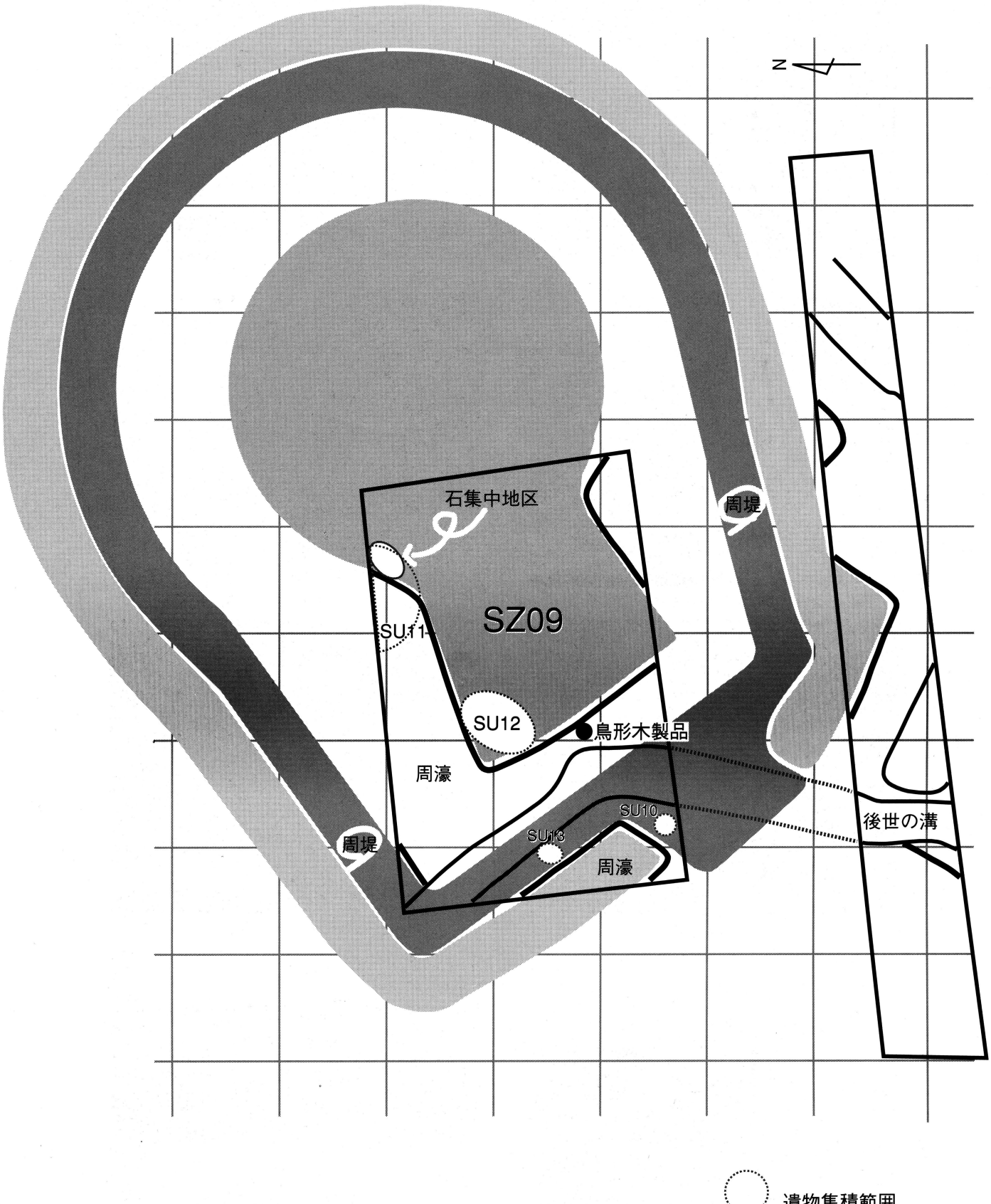
Ｃ期の遺構と遺物　過去２年間の調査成果から、微高地が南東から北西方向へ延びてり、遺構が密に検出されると予測されたが、数条の溝などを検出したにとどまった。また、調査途中ではあるがＫ区では自然流路ＮＲ０７が検出され、その上層の黒色腐植質土から７世紀後半の遺物と共に木簡が出土した。木簡の文字の解釈については、時期も含めて今後の検討課題である。

Ｄ期の遺構と遺物　この時期の遺構・遺物も希薄であり、Ｊ区において屋敷地を区画する溝・井戸などを検出したにとどまった。時期は、14世紀代と思われる。

（小川芳範・魚住英史）



第２図　志賀公園遺跡弥生時代遺構図（１：500）



第３図　志賀公園遺跡古墳時代遺構図（１：500）



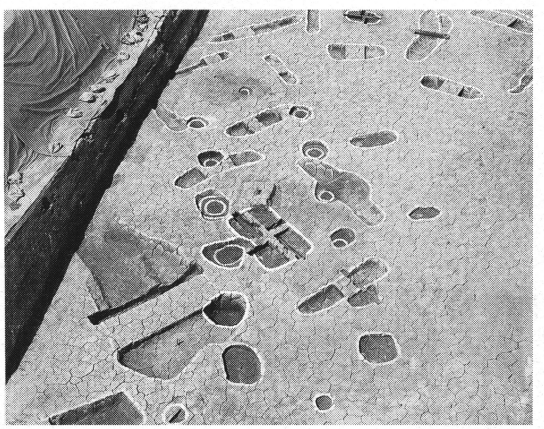
ＳＺ27完掘状況（98Ｊ区）



Ａ期完掘状況（98Ⅰ区）



竪穴住居・掘立柱建物（98Ｊ区）



掘立柱建物検出状況（１×５間、98Ⅰ区）



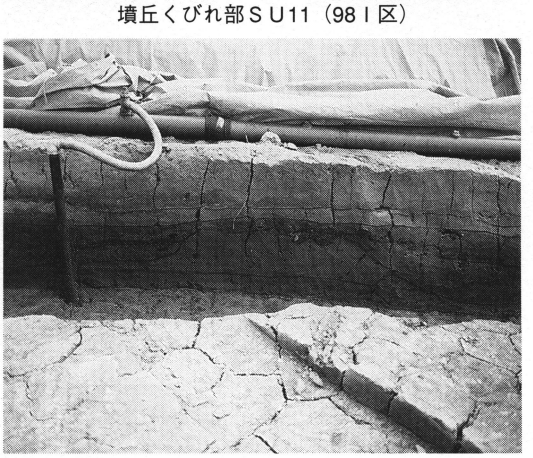
敷石検出状況（98Ⅰ区）



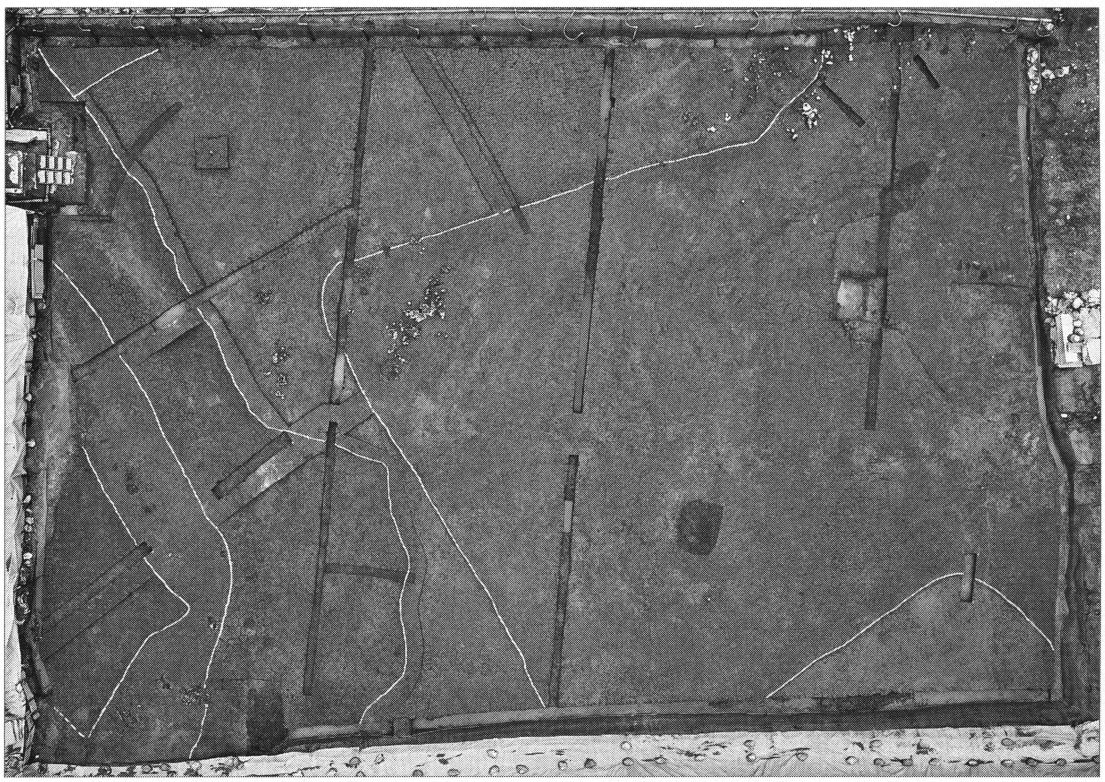
墳丘くびれ部ＳＵ11（98Ⅰ区）



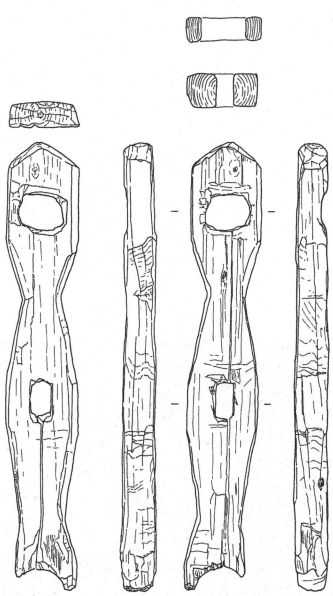
周堤部セクション（98Ⅰ区）



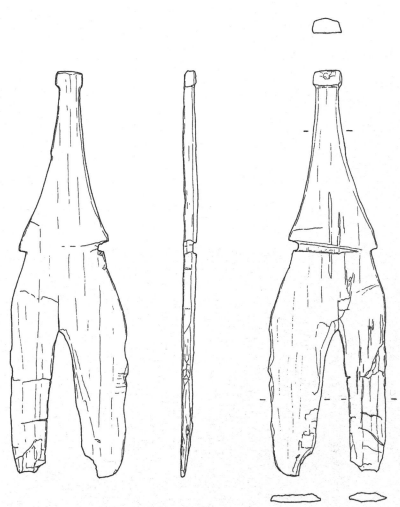
墳丘盛土部セクション（98Ⅰ区）



帆立貝形前方後円墳（ＳＺ09、98Ⅰ区）



第４図　臍穴付鳥形木製品（１：８）



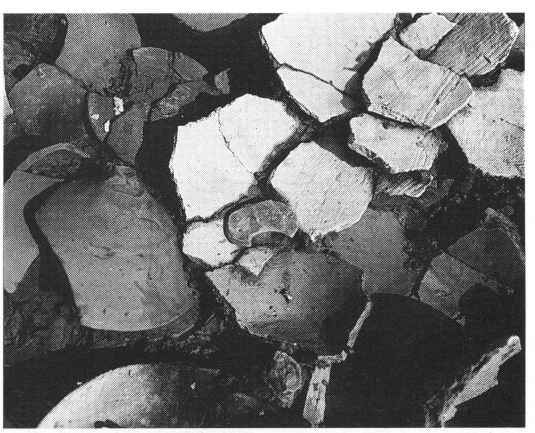
第５図　鉄刃装着用二又鍬（１：８）



ＳＺ09出土遺物



遺物出土状況ＳＵ13（98Ⅰ区）



勾玉形石製品ＳＵ13（98Ⅰ区）

朝日（あさひ）遺跡

調査の経過　朝日遺跡は西春日井郡清洲町を中心に、南北約1.1㎞、東西約800ｍにわたって広がる東海地方屈指の弥生時代集落である。今回の調査は名岐道路建設に伴う事前調査であり、名古屋高速道路公社より愛知県教育委員会を通じた委託事業として、750㎡を平成10年12月～平成11年３月まで実施した。

調査区の表記について　今後の朝日遺跡の調査では、道路の橋脚部分のみの調査が主体となり、100ヶ所近い調査区が設定される。従来の本センターの調査区表記法である調査年度とアルファベットを組み合わせた表記法では、調査区数が上回り対応することができない可能性が考えられる。そこで、今回の名岐道路関連の朝日遺跡の調査に限定して、以下の通り、調査区の表記を行うこととする（第２図）。

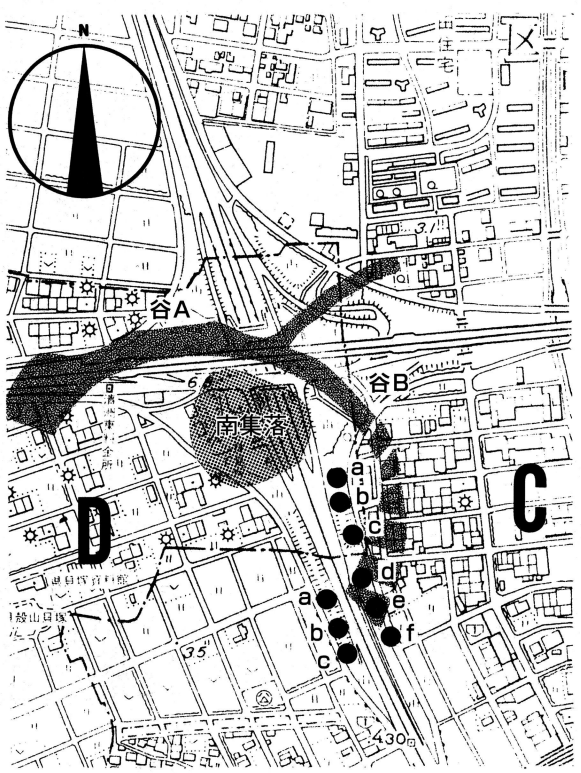
①大調査区の設定…遺跡のほぼ中央を東西・南北に走る国道22号線・東名阪自動車道のセンターラインを利用し、大きくＡ～Ｄの４つの大調査区を設定する。

②小調査区の設定…この調査区が具体的な調査区となる。この小調査区はA～Dの大調査区の中で、調査した順番にアルファベットの小文字をふる。

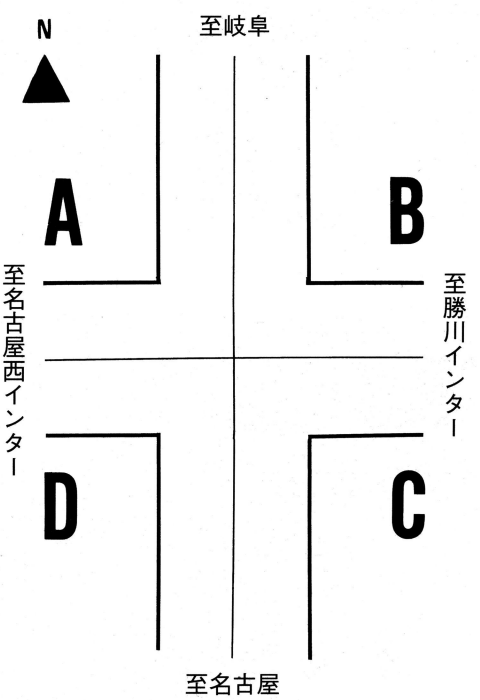
③調査区の表記法…この大調査区と小調査区に従来の年度表記を組み合わせた形で調査区の表記を行う。（例：ＩＡＳ＜遺跡記号＞98＜年度＞Ａ＜大調査区＞ａ＜小調査区＞）

④道路センターライン上に設置される調査区については、アルファベットの早い大調査区に含める。

（服部信博）



第１図　調査区位置図（１：10,000）



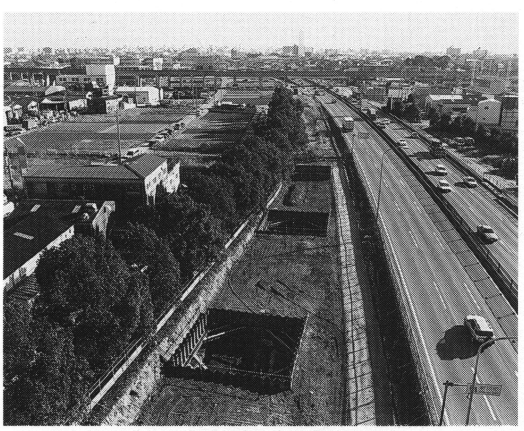
第２図　大調査区割付図

調査の概要　平成１０年度の調査地点は、これまでの朝日遺跡の調査成果により想定されている「南墓域」に南接する地域である。検出した遺構・遺物は稀薄であった。

基本層序は各調査区ともほぼ同じで、国道22号線の盛土下、標高2.9ｍ前後に灰褐色粘土質シルトが堆積しており、以下２０㎝前後の層厚で黄褐色粘土、オリーブ黒色粘土、黒色粘土の各層が見られ、標高2.4ｍ前後で地山層となる灰オリーブ色砂が堆積していた。各層には、腐食質の植物遺体が多く含まれていた。出土した遺物から３層は弥生時代後期～古墳時代、４層は弥生時代中期頃の包含層と考えられる。

Ｃｅ区では、長径約１ｍの楕円形のプランを呈し、斑状の埋土をもった土坑を１基検出した。最下層から加工を施したと思われる板状木材が１点出土した。検出状況から、これまで検出されている朝日遺跡の中世の方形土坑と同様の遺構と考えられる。また黒色粘土層下面から旧河道が検出された。埋土の堆積状況から、この旧河道は、北東から南西方向へやや蛇行しながら流れ、次第に北西方向へと流路を移動していったと考えられる。過去の調査で確認された「谷Ｂ」との関係を考慮しなければいけないであろう。

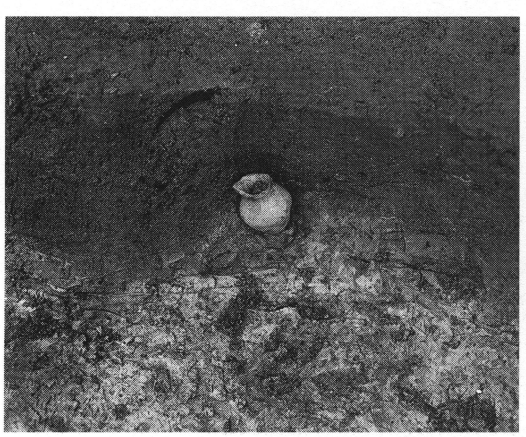
まとめ　Ｃｄ～Ｃｆ区・Ｄａ～Ｄｃ区では、朝日遺跡の南墓域をしめす遺構は検出されなかったので、朝日遺跡の南限もこの付近に想定することができる。また遺跡の南東側には湿地状の景観が展開していたと考えられる。　（春日井毅・飴谷　一・蔭山誠一）



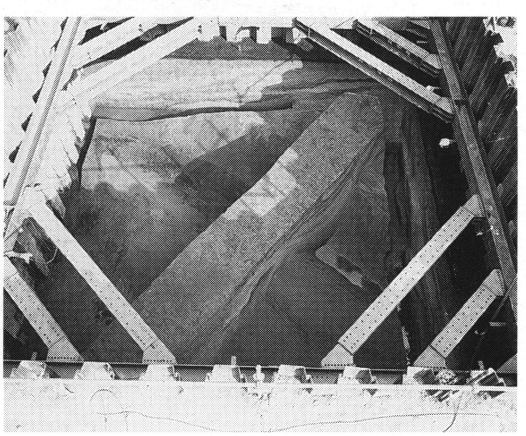
98Cd～Cf区　全景



98Ce区　中世土坑



98Ce区　遺物出土状況



98Ce区　旧河道

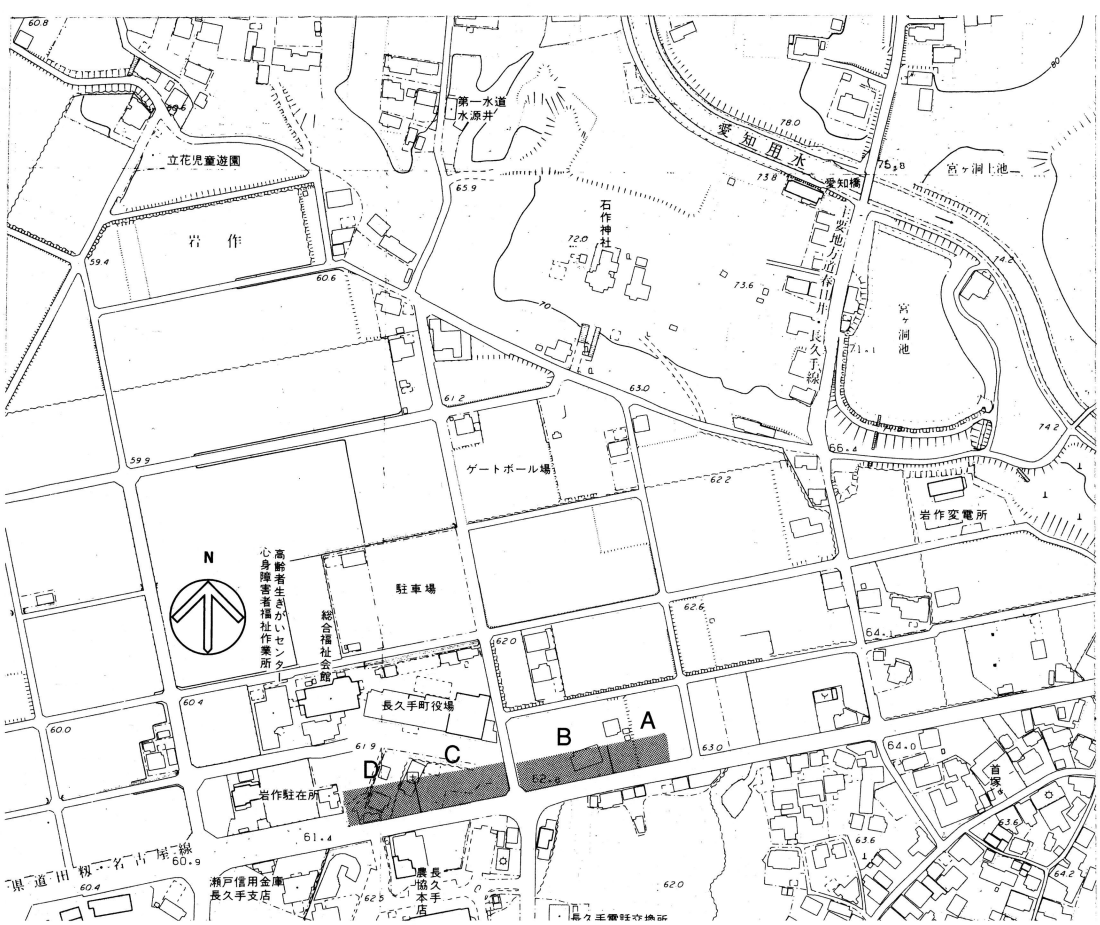
岩作城跡（やざこじょう）

調査の経過　岩作城跡は愛知郡長久手町大字岩作字城之内および早稲田に所在し、長久手町南東に位置する三ケ峰丘陵を水源とする香流川の右岸に形成された標高60mの沖積面に立地する。周辺には天正12年（1584）の小牧長久手の合戦にちなんだ旧跡も多く、遺跡は国史跡の長久手古戦場の北方1.4kmに位置している。

調査は県道田籾名古屋線の改良に伴う事前調査として、愛知県土木部より愛知県教育委員会を通じて委託を受け平成10年４月～11月の期間で行った。調査面積は1,800㎡であり、東側よりＡ～Ｄの４つの調査区を設定した。　（黒田哲生・浅井厚視）

調査の概要　岩作城跡は、1985年に岩作城跡発掘調査会よって一部発掘調査が行われており、その際城館の中核部分の南側にあたる第３次調査地点では、城虎口を構成する土塁、堀、居住区域の一端が確認されている。文献に残る城の規模は東西四十四間、南北三十二間、土居幅二間（『尾張志』）であり、これをもとに明治17年の地籍図をもとに復元される方形区画では、今回の調査範囲は区画北辺から西辺に堀・土塁等を斜めに横切る位置と推定された。

Ａ、Ｂ、Ｄ区では現況より100～120㎝下の水田耕作土および床土層を除去したところで黄色シルト～粘土または礫層のベースに達する。Ｃ区は岩作城に関わる盛土（礫層）の範



第１図　調査区位置図（１：5,000）

囲とみられ、ここにはベース直上に炭化物と土師器の微細片を含む層厚10～25㎝の暗褐色シルトの包含層の残存が認められた。

検出された遺構は古代の土坑２基、掘立柱建物跡１棟、中世では炭化物の集積する土坑、ピットのほか岩作城との関りが推定される15世紀半ば～後半の時期の溝、土塁、また近世の段階の盛土層（ＳＸ08）である。

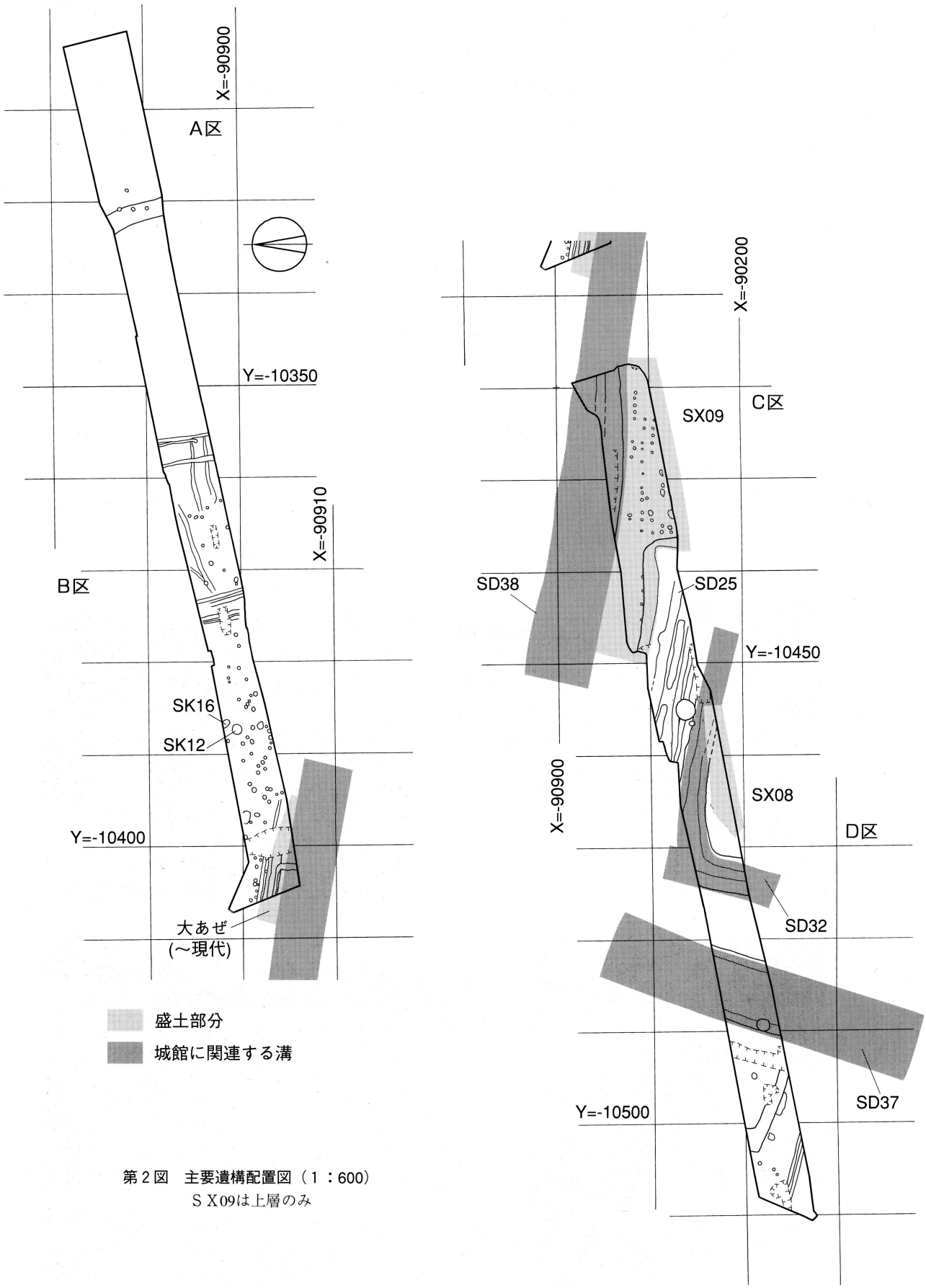
古代の遺構は主にＢ区西辺に分布し、ＳＫ12・16は９世紀代に属する。須恵器杯、蓋と土師器甕を伴い、近接して柱間1.8ｍ前後の掘立柱建物跡１棟がある。須恵器は少量ながらも調査範囲全体に散発的にみられ、Ａ区では８世紀代の須恵器横瓶を検出している。

中世の遺構は土塁と思われる盛土層（ＳＸ09）の構築を境に大きく２時期に分けられる。土塁構築以前の面である暗褐色シルト層上位で検出されたＳＸ10は、一部溝状を呈する不定形の落ち込みであり、炭化物の集積する層と炭化物を多く含む５～20㎝の褐色シルト層からは鉄滓が特に多く検出された。鉄滓は径３～７㎝前後の扁平な塊状を呈し、断面が皿状をなす「椀型」滓も含まれる。焼土や壁面に被熱の痕跡は認められず、14世紀半ば～後半の灰釉系椀皿類と少量の土師器皿をともなう。

Ｃ区ＳＸ09盛土層の上端は、現況地表面より下50㎝前後で達し、盛土部分の高さはおよそ80～90㎝、ベース面からは1.2ｍを測る。ここは古城の土塁跡として付近の水田より一段高くあったことが知られており、地籍図では畑地または原、この北側と南側は水田と記載されている。トレンチ断面ではＳＸ09に接する北側水田耕作土の下に幅４ｍ、ベースを60



遺跡遠景（平成10年５月撮影）



第２図　主要遺構配置図（１：600）
ＳＸ09は上層のみ

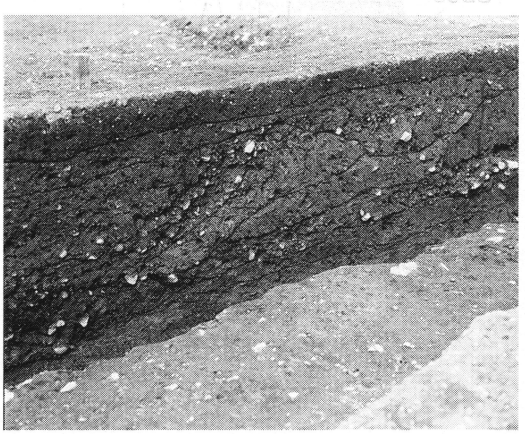
cm掘り込んだ溝（ＳＤ38）が並行してのび、この掘削にともなう土砂がＳＸ09の最下層を形成していることがわかった。ＳＸ09とＳＤ38は城の北辺にあたる土塁と外堀に推定される。ＳＤ38から遺物は検出されず、粘土層の堆積から浅い水堀であった状況が窺われた。ＳＸ09の南には土塁内側を整地、嵩上げしたと思われる平場が続き、この整地層には須恵器、灰釉系陶器椀皿類、鉄滓、灰釉四耳壺、平椀、鉢、瓶子、天目茶椀などが多数混在して含まれ、15世紀半ば～後半を下限とするまとまりが認められる。皿、鍋などの土師器は極く僅かであった。出土遺物の大半はこの土塁および整地層など盛土中に含まれる。Ｄ区ＳＤ37は幅約７ｍ、深さ90cmを測る。断面は浅い皿状を呈し、最下層は粘土、中位から上層までの礫層は人為的な埋積状況を示す。規模や形状はＳＤ38と全く異なるものの、城に関わる施設として西辺の外堀と推定される。

水田であった土塁南側の低位面で検出されたＳＤ32は、幅3.8ｍ、深さ50cmを測り、断面逆台形を呈する。中層以上は礫層が人為的な埋積状況を示し、南北方向は北側調査区外にもさらにのび、東西方向の部分が先に廃絶する。掘削時期など判然としないが、ＳＸ09構築以前の区画溝とも考えられる。

まとめ

岩作城の外堀と土塁で構成される方形区画が構築されたのは15世紀後半以降と考えられる。また、改築以前にも一段階古い城館が存在した可能性もあり、これは前調査時の出土遺物の分布状況とも符合するものである。

（浅井厚視・武部真木）



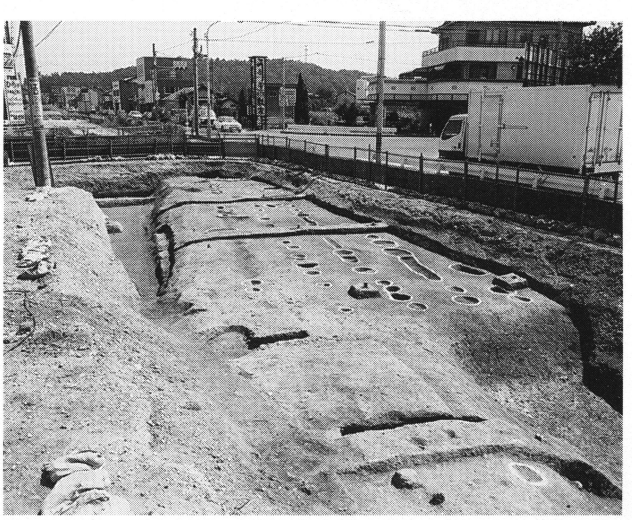
ＳＸ09セクション



Ｄ区全景



Ｃ区全景



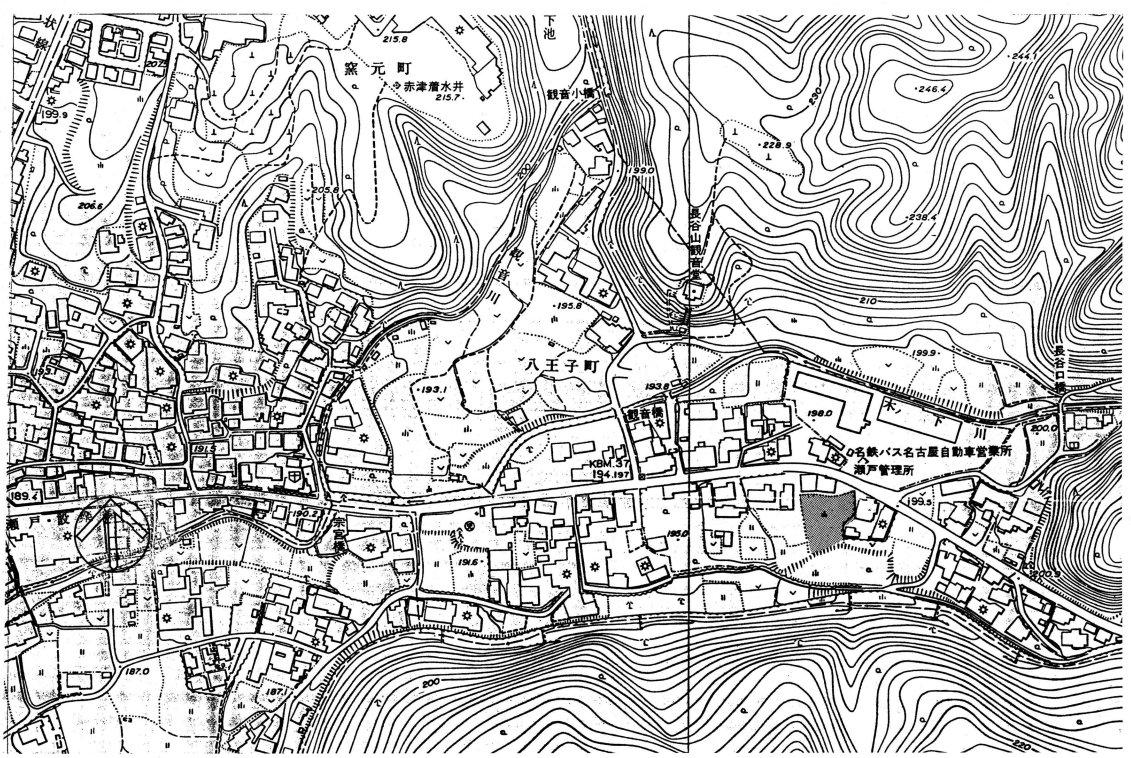
ＳＸ09（盛土）西から

八王子（はちおうじ）遺跡

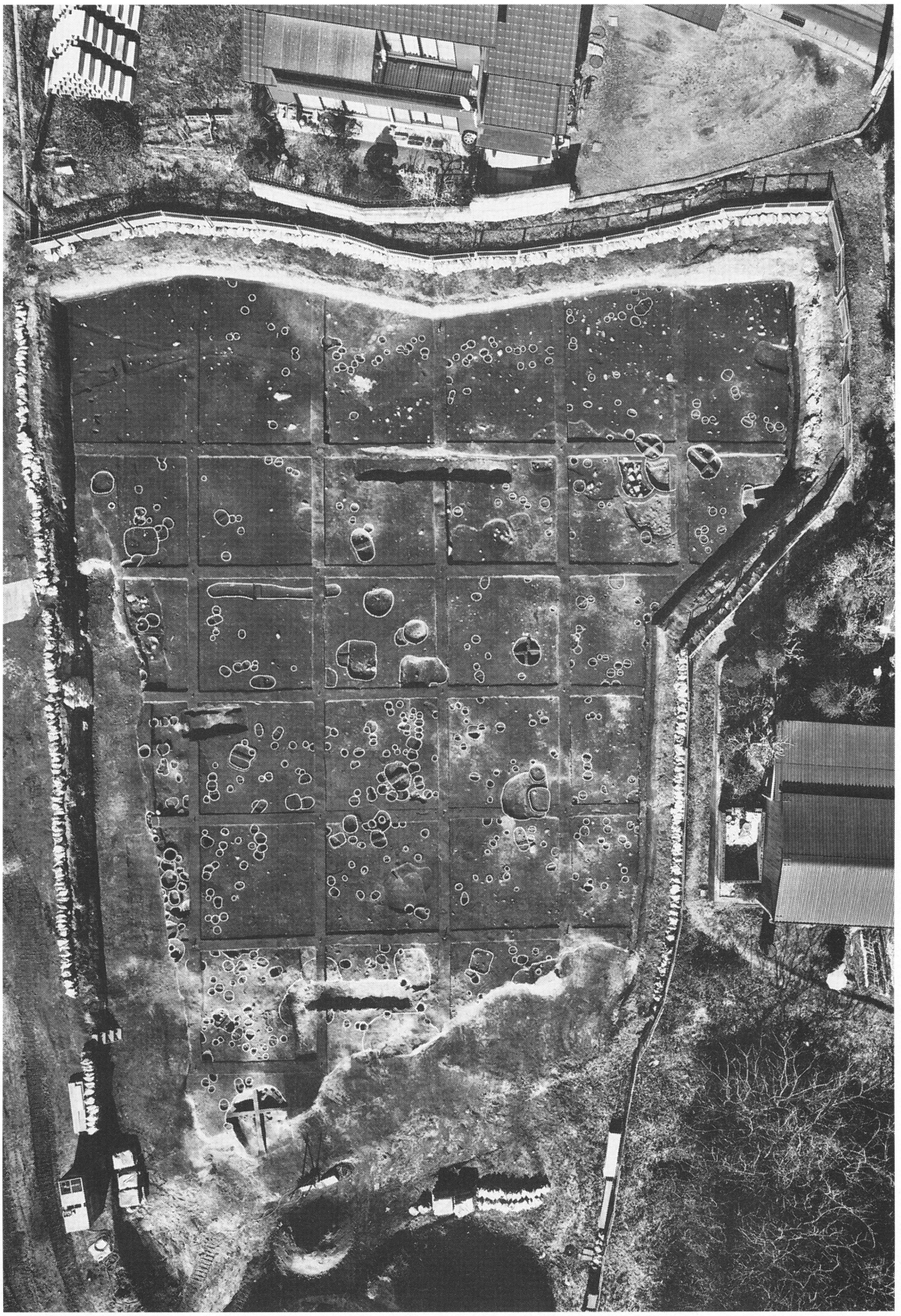
調査の経過　八王子遺跡は瀬戸市八王子町に所在する。ここは矢田川の支流赤津川によって形成された狭小な沖積地となっており、遺跡は標高200m前後の左岸側に立地する。周辺には縄文時代と中世の複合遺跡である白坂雲興寺遺跡をはじめ、古瀬戸を焼成した窯跡が数多く残っている。平成９年度の試掘結果をもとに東海環状自動車道建設に伴う事前調査として平成10年11月～平成11年２月にかけて約1,400㎡の調査を実施した。　（黒田哲生・浅井厚視）

調査の概要　調査区域は北から南へ赤津川に向かって緩やかに傾斜する。上面暗灰褐色シルト層では調査区中央から南辺にかけて14世紀～15世紀半ばの墓域に関連すると思われる土坑、ピットなど多数を検出した。焼土や骨片は検出されなかったが、なかでも３m×1.5mの楕円形土坑は口頸部を打ち欠いた灰釉瓶子、灰釉系陶器椀、灰釉平椀、鉄釉縁釉皿などを伴い、瓶子は不定形ながらも石による区画内部に埋納されていた。また径40㎝規模の円形土坑では窯道具である匣鉢と灰釉平椀を検出し、いずれも蔵骨器としての利用が想定される。

八王子遺跡の主体となる縄文時代については、繊維を含む早期（粕畑式）を中心に中期前半の土器片、石皿、磨石、チャート・石英を利用した石匙や石鏃、フレークが上層の包含層中からも大量に混在し、特に暗灰色～黒色シルト層が厚く堆積する調査区北側は、花崗岩の礫とともに遺物の集中地点が認められる。調査区中央以南では下層黒色土の堆積は不連続であり、集落の中心は調査区北東辺にかけて広がるものと思われる。　（武部真木）



第１図　調査区位置図（１：5,000）



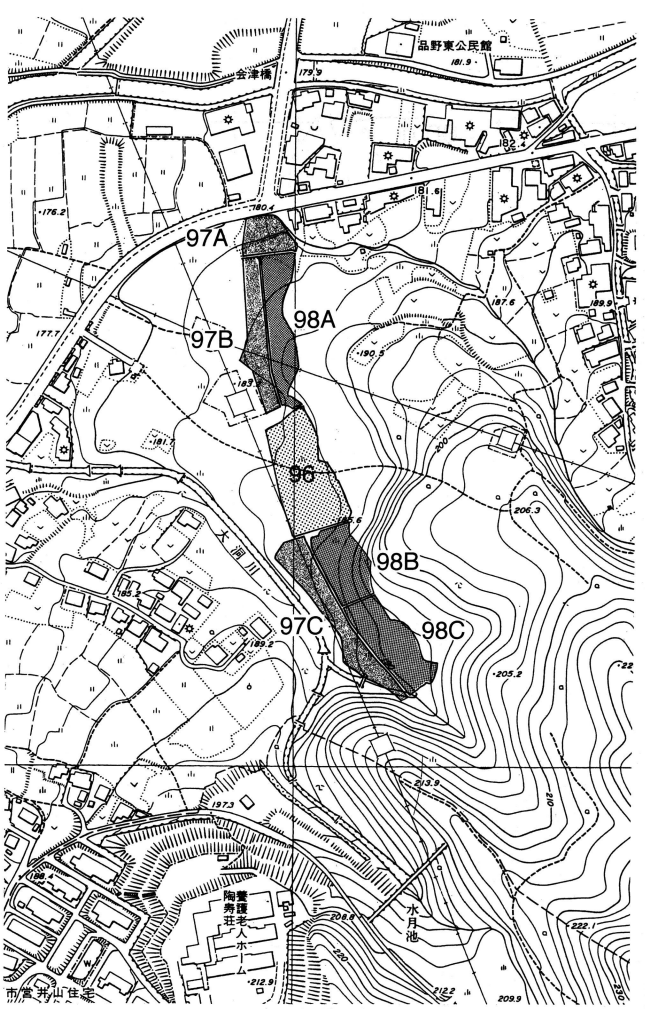
調査区全景（上面）

上品野（かみしなの）遺跡

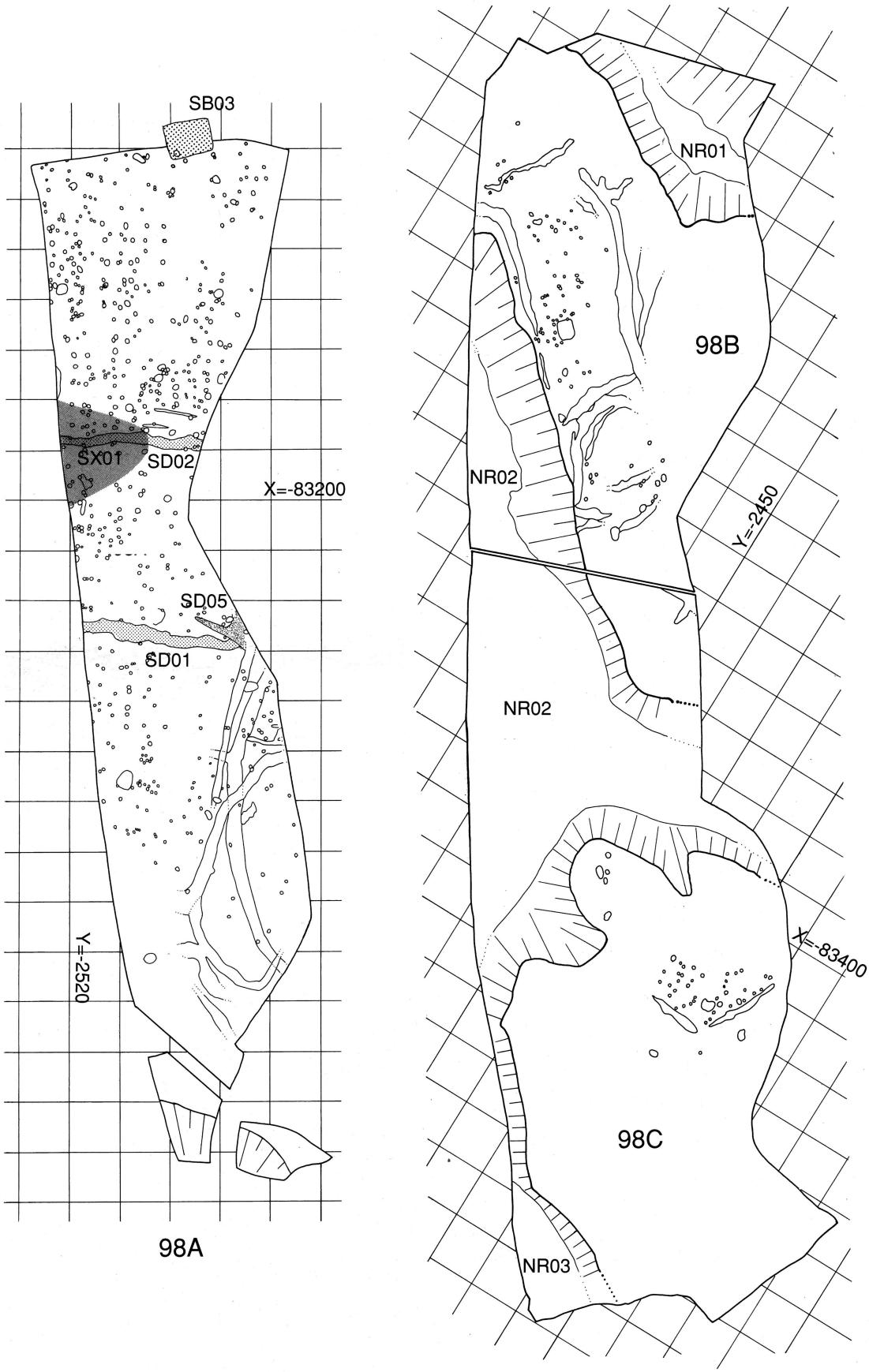
調査の経過　上品野遺跡は、瀬戸市の北東部に位置する品野盆地を北西に望む丘陵斜面から標高180m程の段丘端部に立地する。発掘調査は、東海環状自動車道建設に伴う事前調査として平成８年度より実施し本年度の調査でほぼ終了した。平成８年度の調査では縄文時代後・晩期かと考えられる「ドングリピット」が４基、平成９年度の調査では後期旧石器時代初頭の台形様石器を含む石器集中地点と弥生時代末から古墳時代初頭の住居４棟、奈良時代から平安時代にかけての住居１棟等が検出された。本年度の調査は、建設省より愛知県教育委員会を通じて委託を受け、6,600㎡をＡ～Ｃの３調査区に分けて、平成10年４月より平成11年１月にかけて実施した

Ａ区の概要　Ａ区は北側を97Ａ区、西側を97Ｂ区、南側を96年度調査区にそれぞれ接し、調査区内は段丘端部の斜面の部分とやや平坦な部分とにわかれ、遺構はやや平坦な部分に多い。検出した遺構は、住居、土坑、溝、柱穴等である。主な遺構として後期旧石器時代の石器と剥片が出土したＳＸ01、弥生時代末から古墳時代初頭の住居（ＳＢ03）１棟、平安時代の溝２条（ＳＤ01・02）、鎌倉時代の溝１条（ＳＤ05）等を検出した。

後期旧石器時代の石器と剥片が出土したＳＸ01は97Ｂ区ＳＸ01の東側になり、石器集中地点の東端を確認できた。埋土は褐色粘質土、明黄褐色土で下層の明黄褐色土層よりナイフ形石器１点、石刃１点、剥片30点程の遺物が出土した。ナイフ形石器は、先端部が欠損しており、現存長２cm１㎜、幅７㎜、厚さ３㎜、重さ1.1ｇを測り両側面にはリタッチが見られ、裏面はバルブ部分を調整し基部としている。石刃は、長さ５cm６㎜、幅２cm１㎜、厚さ８㎜、重さ8.5ｇを測る。縦方向に剥離された剥片を利用し、側面にはリタッチが認められ



第１図　調査区位置図（１：5,000）



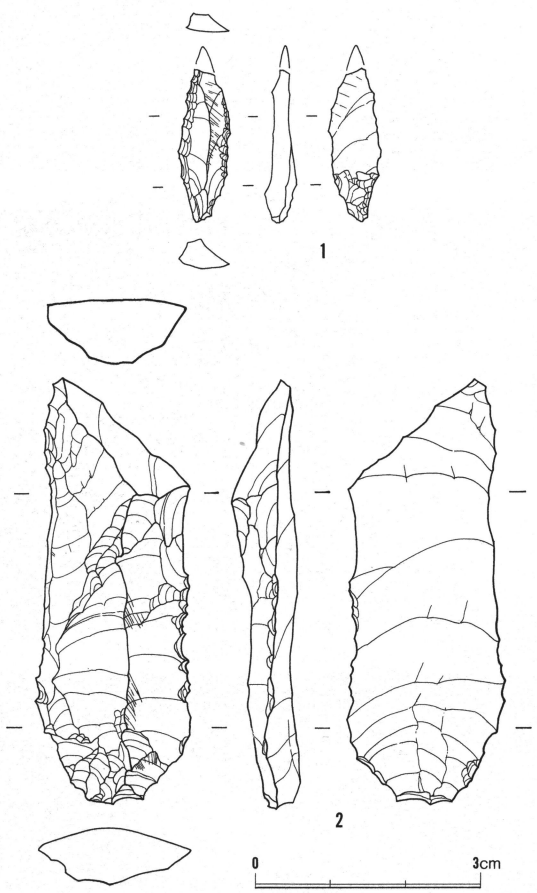
第２図　98Ａ・Ｂ・Ｃ区遺構図（１：600）

る。97Ｂ区と今回の98Ａ区の調査結果から、ＳＸ01は現地表下１m20㎝から１m50㎝、南北幅５m、東西15mを測り、西側に傾斜した浅い凹地状を呈しており、西側については調査区外のため範囲を確認することができなかったが遺物の出土状況から西側へ広がっていくものと思われる。

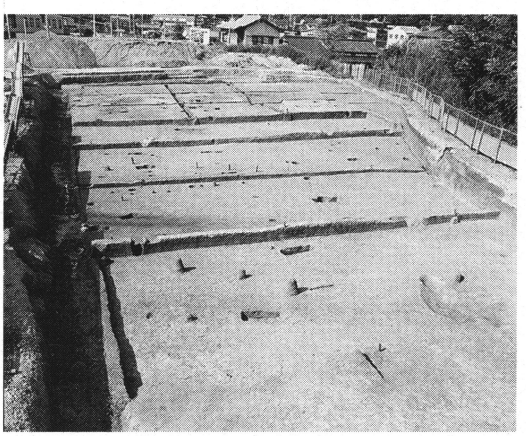
弥生時代末から古墳時代初頭の竪穴住居ＳＢ03は97Ａ区の調査時に全体の2/3が調査され、今回の調査で完掘となり南西隅のピットより台付甕の脚部が出土した。

平安時代の溝ＳＤ01・02は調査区のほぼ中央を東西方向に平行に掘削されておりＳＤ01は97Ｂ区のＳＤ01の東部分で溝の埋土は暗褐色土で、折戸53号窯式の時期と思われる椀、皿や鞴(ふいご)の羽口、砥石などが出土した。ＳＤ02は調査区北側の溝で、97Ｂ区の調査では開墾による削平によって検出できなかった溝で、暗褐色土の埋土で、折戸53号窯式の椀、皿の他、緑釉椀等も出土した。

平安時代末から鎌倉時代の遺構として、斜面から平坦面にかけて、北西方向のＳＤ05がＳＤ01を切って検出された。ＳＤ05からは椀・皿・陶丸等が出土している。なお斜面縁辺の三条の溝は、最近まで耕作されていた水田に伴う溝である。



第３図　98Ａ区ＳＸ01出土遺物実測図（１：１）
１．ナイフ型石器　２．石刃



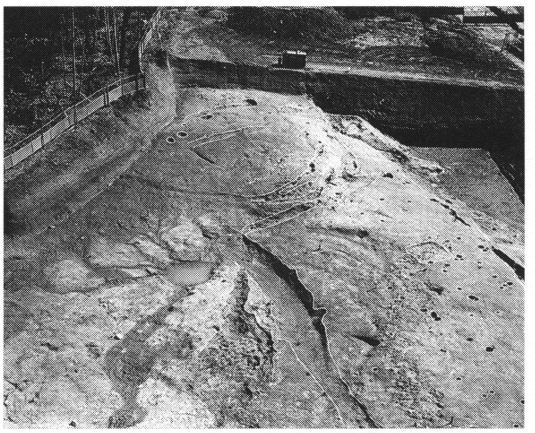
Ａ区ＳＸ01全景（南より）



Ａ区ＳＸ01完掘状況（北より）



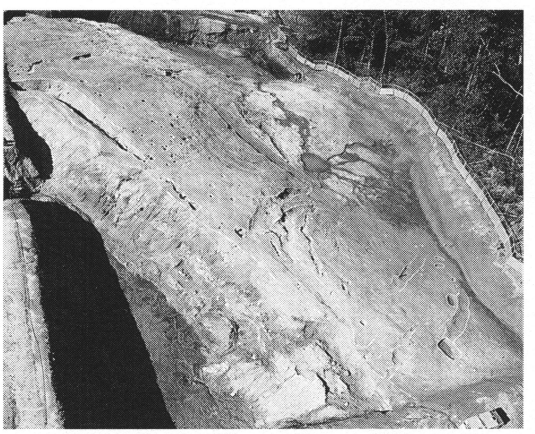
A区南側全景



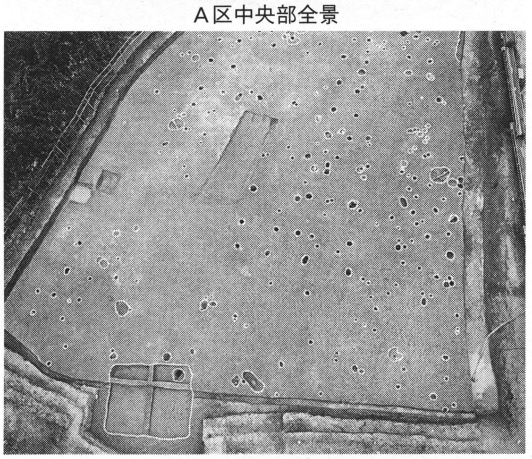
B区全景（北より）



A区中央部全景



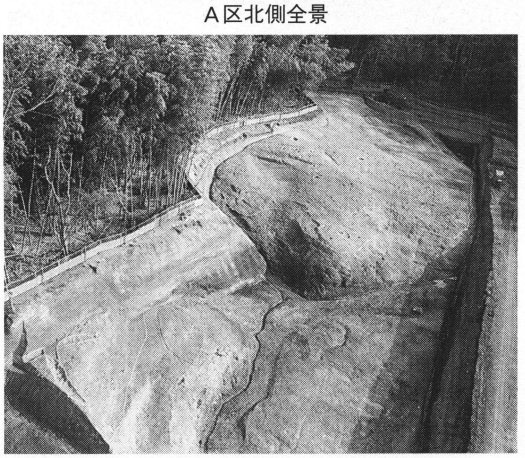
B区全景（南より）



A区北側全景



B区ＳＤ01遺物出土状況



C区全景（北より）



C区南側全景

B区の概要　B区は西側を97C区に接し、96年度調査区の南側に位置する。丘陵斜面の一部、馬の背状になった部分を挟んで北側と南側の谷にわかれる。溝、柱穴などの遺構は馬の背状になった部分のやや平らな場所に多い。

NR01（北側谷）は96年度調査時にドングリピットを検出した谷と同一の谷で98B区は対面側となる。全長約20m、最大幅約15m、深さ約3m50cmを測る。埋土は、上層から褐灰色土、自然流木を多く含む黒色泥炭層、一部砂層を含む。なお黒色泥炭層の下層から、松河戸火山灰の層が確認できた。褐灰色土からは鎌倉時代の椀が、谷の中程部分黒色泥炭層の上層からは弥生時代末から古墳時代初頭の台付甕・高杯などが集中して出土した。

NR02（南側谷）は98C区に続き、埋土は上層が灰黄褐色粘質土、下層が黒色泥炭層で一部砂層を含む。上層から鎌倉時代の椀が、また谷の斜面より蔵骨器に使用された古瀬戸前期の瓶子が流れ込んだ状態で出土した。

馬の背状になった部分からは南北に横切る溝、斜面に添って縁辺部を巡る溝、柱穴を検出した。南北に横切る溝SD01・02からは椀、皿、水注、陶丸など鎌倉時代の遺物がまとまって出土したが他の溝から遺物の出土はない。溝の埋土は褐色土と灰黄褐色土にわけられるが両者に時期差は認められなかった。柱穴の埋土も溝と同様で、褐色土と灰黄褐色土があり、P11より古瀬戸中期の小壺と陶丸が出土した。（川添和暁）

C区の概要　C区は西側を97C区に接し、北側を本年度の98B区に接している。調査区南半部は丘陵斜面で北側と西側は谷となる。調査区の北側はB区の延長で、馬の背状になった部分の南側の一部が続き、谷もNR02の続きである。調査区南西端には別の谷NR03があり、97C区のNR01と98C区中央のNR02に続くものと思われる。南側の丘陵斜面からは柱穴と溝を検出した。

NR02は98B区からの全長約55m、谷の最深部の幅約10mを測る。埋土は98B区と同様で、上層より灰黄褐色粘質土、黒色泥炭層、青灰色粘質土となり、一部で黒色泥炭層の下から極粗粒砂の砂層の堆積が認められた。灰黄褐色粘質土からは鎌倉時代の椀・皿が黒色泥炭層下の砂層からは弥生時代末から古墳時代初頭の台付甕が、谷底付近の青灰色粘質土からはチャート製の掻器が出土した。

NR03は97C区南側のNR01池の一部と思われ、埋土は基本的にはNR02と同様で概して礫が多い。灰黄褐色粘質土より「宝」と書かれた鎌倉時代の墨書椀が出土している。

まとめ　平成8年度より始まった上品野遺跡の調査は本年度の98C区の調査でほぼ終了した。今年度の調査では、昨年度の97A区で検出した旧石器時代の台形様石器を含む石器集中地点の東限を98A区内で確認でき、ナイフ形石器と石刃、剥片などが新たに出土した。石器集中地点からは、台形様石器、ナイフ形石器、掻器、石刃、局部磨製石器といった製品と剥片も200点程出土している。剥片は横長剥片が多く今後石器制作過程が解明できるものと思われる。また97A区石器集中地点の西側面の土層による火山灰分析の結果、石器包含層の上層からはAT火山灰を、下層からはK－TZ火山灰およびDNP火山灰が確認された。

（小澤一弘）

鶯窯跡（うぐいす）

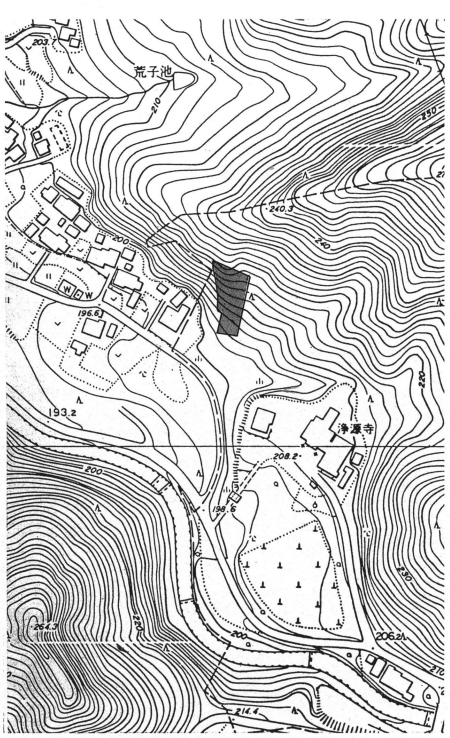
調査の経過　鶯窯跡は、瀬戸市岩屋町・鳥原町に所在する。水野川流域に広がる品野盆地中央部から南東方向へ細長く伸びる谷状の奥部分に位置し、三方を標高 300m前後の丘陵に囲まれ、南側の丘陵裾部に沿って、水野川の支流鳥原川が東から西へ流れている。鳥原川と狭小な沖積地を見下ろす標高200 m～237 mの南側斜面に鶯窯跡は立地している。

鶯窯跡は、これまでの遺跡分布調査などから14世紀から15世紀にかけての施釉陶器（古瀬戸後期）を焼成した窖窯で窯体は尾根直下に３基程度存在するものと考えられており、窯体より下方の斜面には灰原が斜面末端まで広範囲に広がっている。

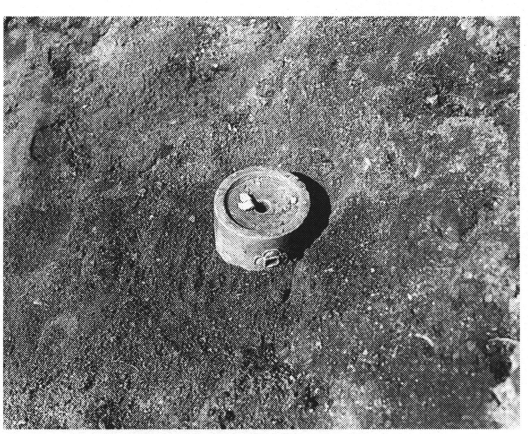
調査の概要　本年度の調査は、建設省より愛知県教育委員会を通じて委託を受け、900㎡を平成11年１月より３月にかけて実施した。

調査は窯体下方の斜面の灰原部分と斜面直下の平坦部分について実施した。本来ならば平面直角座標第Ⅶ系に準拠したグリットを設定すべきであるが、真北が斜面に対し約45度程西に振れていたことと、灰層の堆積状況を検討するためには斜面に沿ったグリットを設定する必要があることから平面直角座標系に準拠しないグリット設定となった。

調査区の上端の灰原は現地表下２m40㎝を測るなど灰原は予想以上に厚く広く堆積していた。上段の灰原を概観すると西斜面は黒色灰層が、真中部分から東斜面部分は焼台を多く含んだ灰層が堆積している。灰原からは膨大な量の焼台とともに碗・皿・鉢・瓶・壺類・燭台などの器種の他に狛犬・陶製の茶臼などが出土した。出土遺物は古瀬戸後期の製品が多いが、古瀬戸中期に遡るのではと思われる製品も出土している。　（小澤一弘）



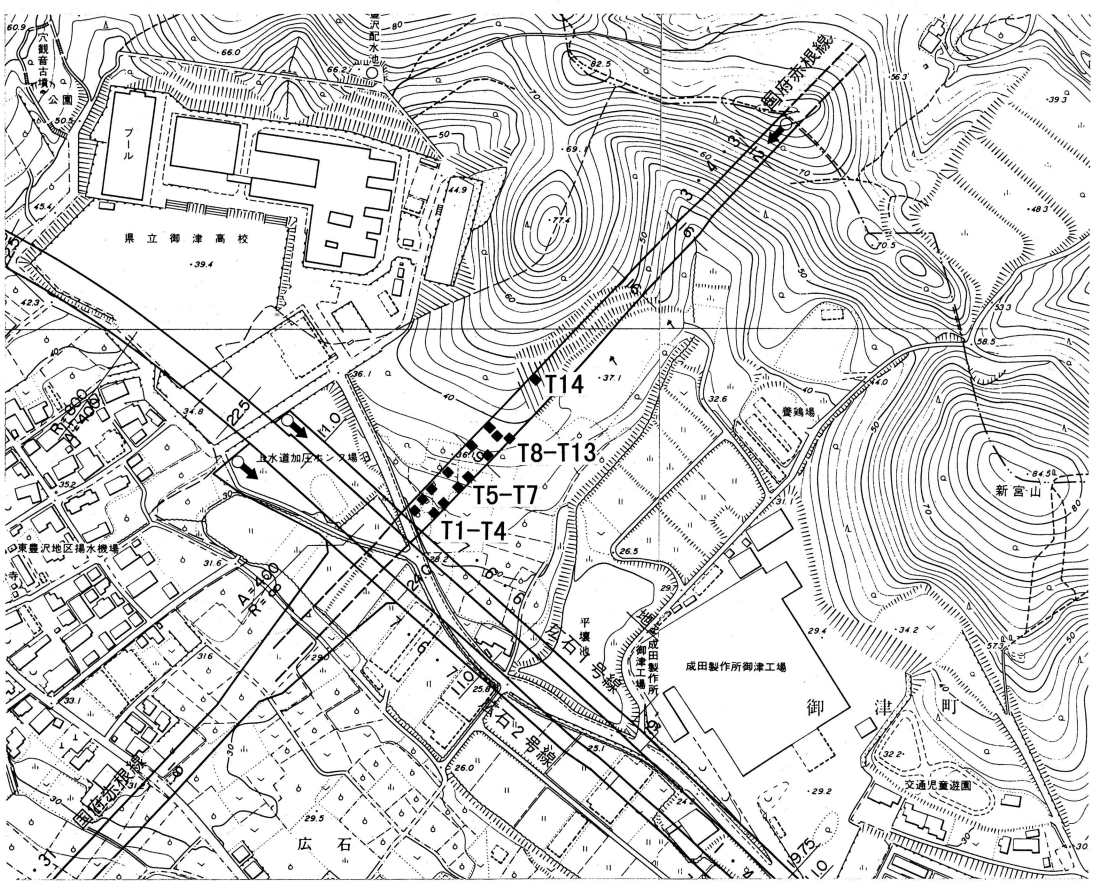
第１図　調査区位置図（１：5,000）


灰原遺物出土状況（茶臼）

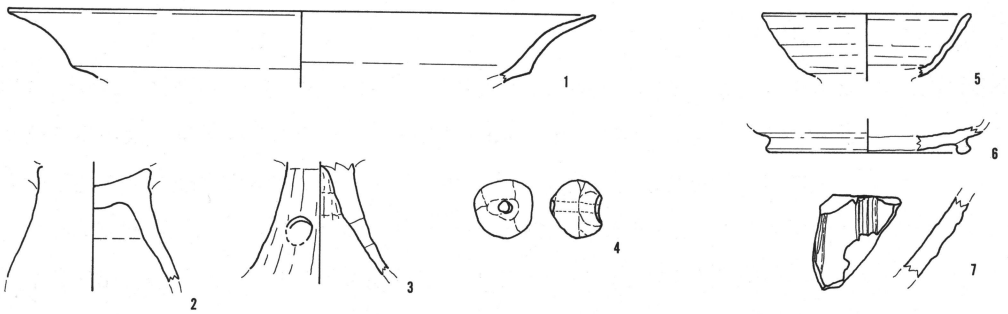
高坂（こうさか）遺跡範囲確認調査

調査の経過　高坂遺跡は宝飯郡御津町大字広石字新宮山に所在する遺跡で、今回の調査地は昭和60年度に調査された「高坂遺跡」と同一遺跡である。今回の調査は、県道大塚国府線改良工事予定地内における範囲確認調査で、愛知県土木部より愛知県教育委員会を通じた委託事業として平成10年４月13日から４月24日にかけて、約150㎡を調査した。調査対象地内には試掘トレンチを14カ所設定し（T.１～T.14）、土層断面観察および遺構検出作業を行い、遺構・遺物出土の有無を確認し、遺跡の範囲・時期などを検討した。

調査の概要　各トレンチとも耕作土（表土）直下は洪積台地特有の赤褐色細粒砂からなる地山になり、各時代の遺構が同一面において確認できた。遺構遺物は調査地東山際にあるT.14を除いて全てのトレンチにおいて確認でき、遺構では弥生時代後期～古墳時代前期の土坑（竪穴住居を含む）・奈良時代の柱穴・戦国時代の溝を確認した。遺物は弥生時代後期～古墳時代前期の土器（壺・甕・高杯・紡錘車）、奈良・平安時代の須恵器（杯）・灰釉陶器（椀）、戦国時代の瀬戸・美濃産陶器（擂鉢）が出土した。遺跡の範囲はT.14付近の削平部分を除く対象地全域に広がるものと思われる。　（木下　一・花井　伸・蔭山誠一）



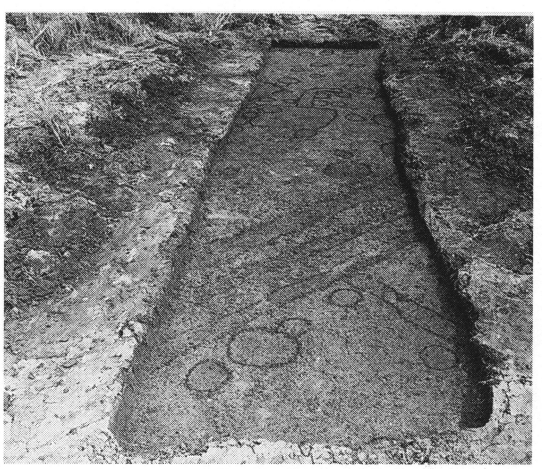
第１図　調査区位置図（１：5,000）



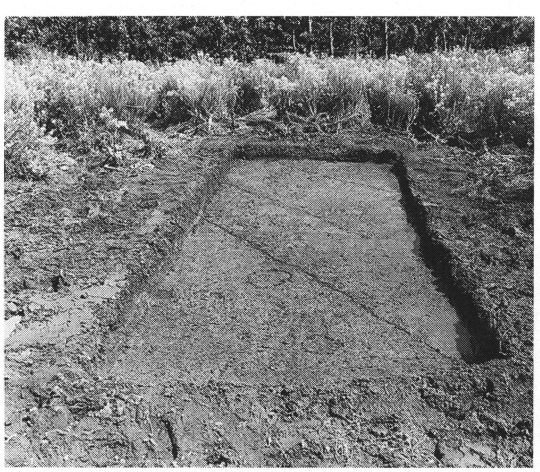
第２図　遺構検出時出土遺物（１：２）
１～４は弥生後期～古墳前期、５・６は古代、７は戦国時代



T.2　西より



T.4　北より



T.6　西より



T.11　北より

能見城跡（のうみじょう）

調査の経過　能見城跡は、東加茂郡旭町大字榊野に所在し、矢作川の支流である阿摺川の上流左岸にある丘陵部先端に築かれた戦国時代の中世城館跡である。発掘調査は、愛知県土木部による県道土岐足助線改良に伴い、平成10年５月より９月にかけて行った。調査面積は2,400㎡である。

調査の概要　今回の調査により、能見城跡は次の３時期の変遷があったことが確認された。

（１）能見城の時代（15世紀後半～16世紀初頭）

本丸跡にある物見櫓痕跡と２つの曲輪跡、南側から本丸への上り口と見られる階段跡を検出した。それに伴って、城の営まれた際使われた土師器小皿・皿、瀬戸美濃産天目茶椀・鉢・壺、常滑産甕が出土し、宋銭の「元祐通寶」、青磁椀も見られた。物見櫓跡の大部分は、江戸時代における開墾により削平されたものと思われる。

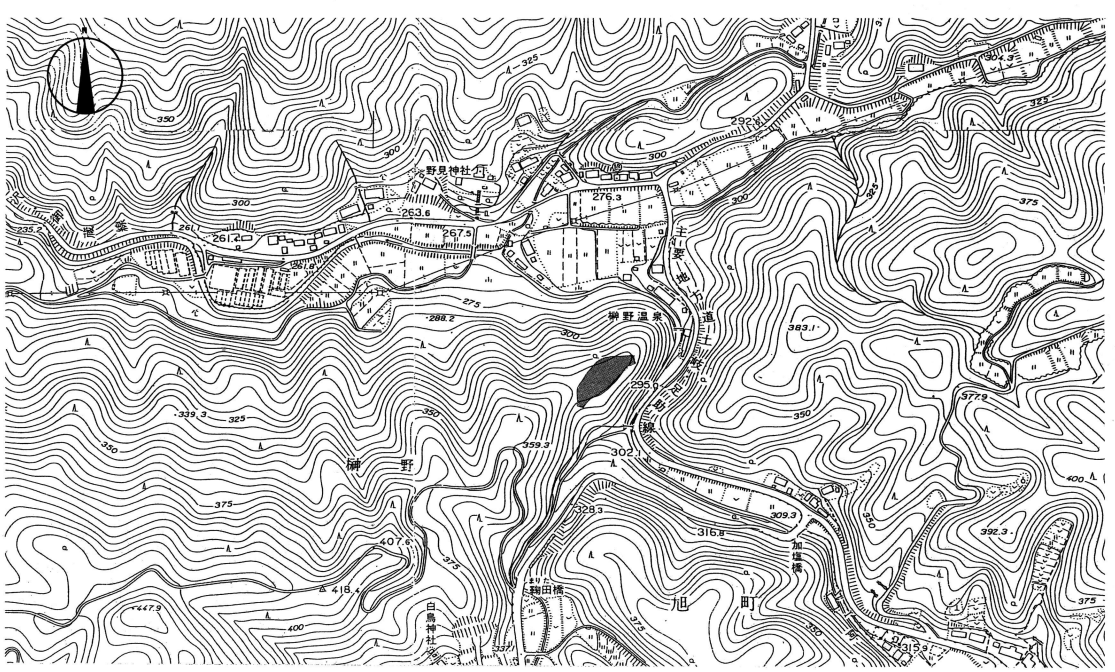
（２）墓地の時代（16世紀～江戸時代）

南西曲輪の南側斜面から、３基の土抗墓を検出した。ＳＺ01からは人骨が１体出土した。

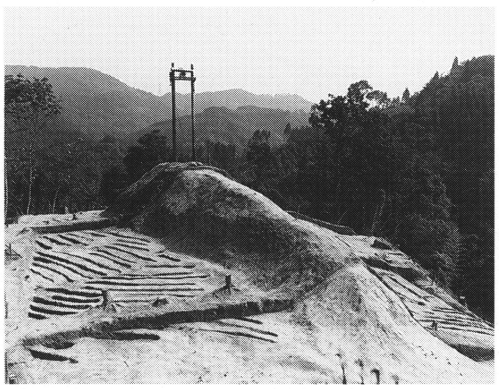
（３）畑地の時代（江戸時代・昭和前半）

江戸時代の畑の畝痕と思われる溝を検出した。溝からは、江戸時代の銅銭「寛永通寶」、瀬戸美濃産陶器も少量出土した。昭和前半の畑は現地形で残存しており、物見櫓跡の西側が桑畑、東側がサツマイモ畑であった。本城跡のような小規模な城跡で、生活に伴う多数の遺物が出土するのは明らかな活動の痕と当時における能見城の営みを特徴づけるものであり、この地域の戦国時代を考える上で貴重な資料になった。

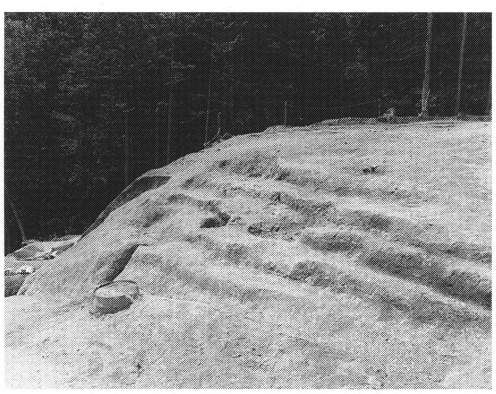
（木下　一・花井　伸・蔭山誠一）



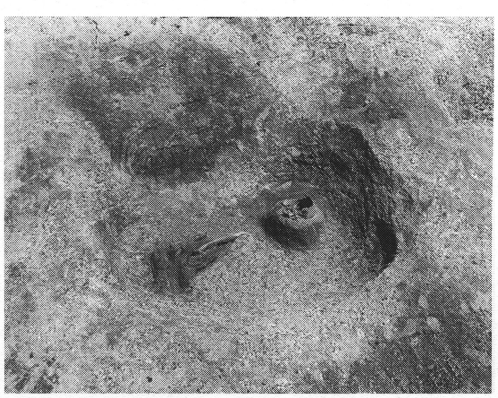
第１図　調査区位置図（１：10,000）



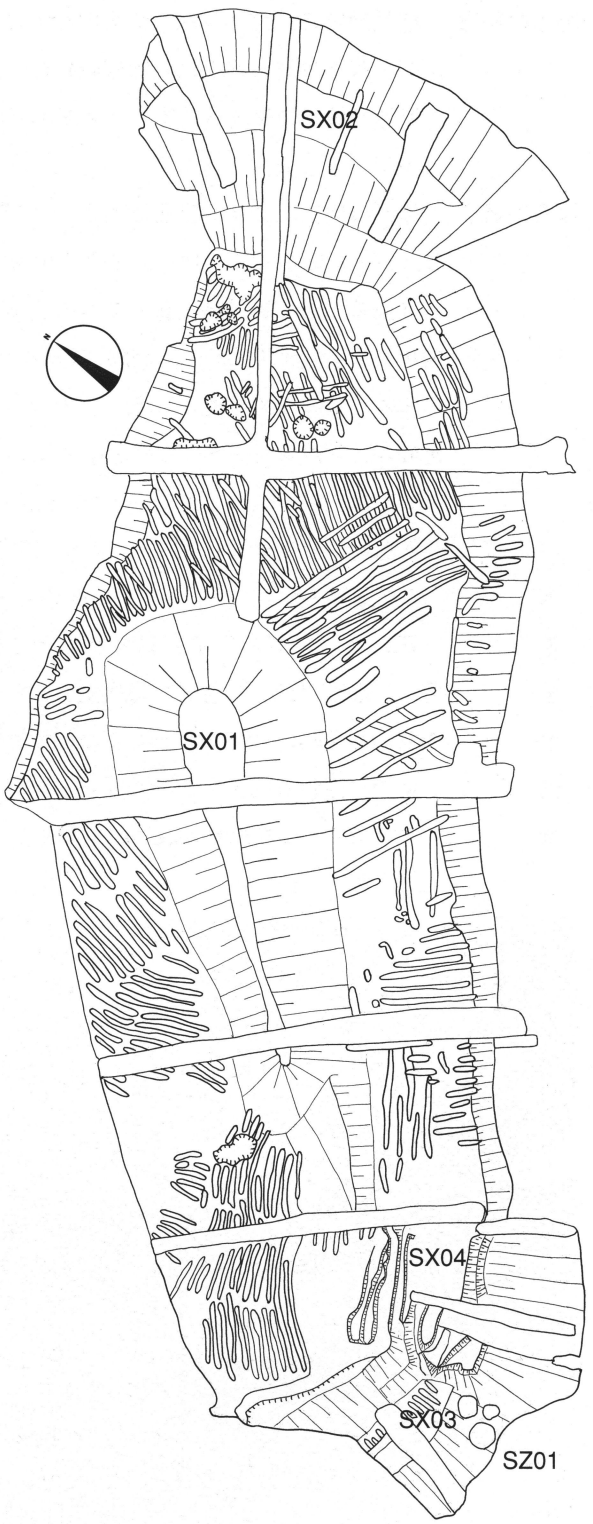
物見櫓痕跡と江戸時代の畑の畝痕跡



本丸への上り口の階段の跡



土坑墓（ＳＺ01）から出土した人骨



第２図　遺構図（１：400）

岡島（おかじま）遺跡

調査の経過　岡島遺跡は、西尾市岡島町及び江原町にかけて位置する。本遺跡は、矢作古川及び広田川などによって形成された沖積低地に立地しており、遺跡及びその周辺は、氾濫や上流からの土砂の堆積、海岸線の変化などによって形成された微高地が点在している。現況は水田として利用されており、この中に果樹園を含む畑地が点在し、自然堤防上の微高地には小規模な集落が形成されている。この沖積平野部を通過する県道蒲郡碧南線に、愛知県土木部によって歩道建設工事が行われることとなった。工事予定地周辺は、昭和52年に西尾市教育委員会、昭和63～平成2年には、本センターが発掘調査を実施しており、過去の調査事例から弥生時代中・後期を主体とした遺跡が大規模に広がる場所であることが確認されている。今回の工事予定地は、過去に確認された遺跡範囲内にあたるため、（財）愛知県埋蔵文化財センターでは、県教育委員会の委託を受け、歩道建設工事に先立つ事前調査として、発掘調査を行うこととなった。発掘調査は平成10年6～9月まで行い、調査面積は1000m²である。

調査の概要　今回の調査区は、江原町東の交差点を中心として、南北及び東西にL字状に設定された。調査区全域は、コンクリート工場の跡地であったため、客土が入れられた上にコンクリート舗装がなされており、一部には工場設備の基礎が遺物包含層以下まで達していた。地表高は、標高約6.3mである。調査区の基本層序は、この客土の下に、近・現代の耕作土があり、その下には近世以前の耕作土及び無遺物の自然堆積層がある。これらの下には、標高3.5～4.0m付近に灰・緑灰色シルトが堆積しており、これらの層において弥生時代中期末葉～古墳時代前葉にかけての遺物、遺構が検出され、この下部の基盤層は緑灰色シルト・細粒砂であった。検出された遺構は、土坑52基、溝18条、不定形土坑8基である。このうち土坑では、土器棺墓の可能性が考えられるもの、溝では方形周溝状にめぐるものなども認められ、時期の前後関係を含めて現在その性格を検討中である。検出された遺物は、弥生時代中期末葉から古墳時代前葉の時期を主体とし、土器は壺、甕片が圧倒的な比率を占め、わずかに出土した石器の中には、石包丁片と思われるものを含む。

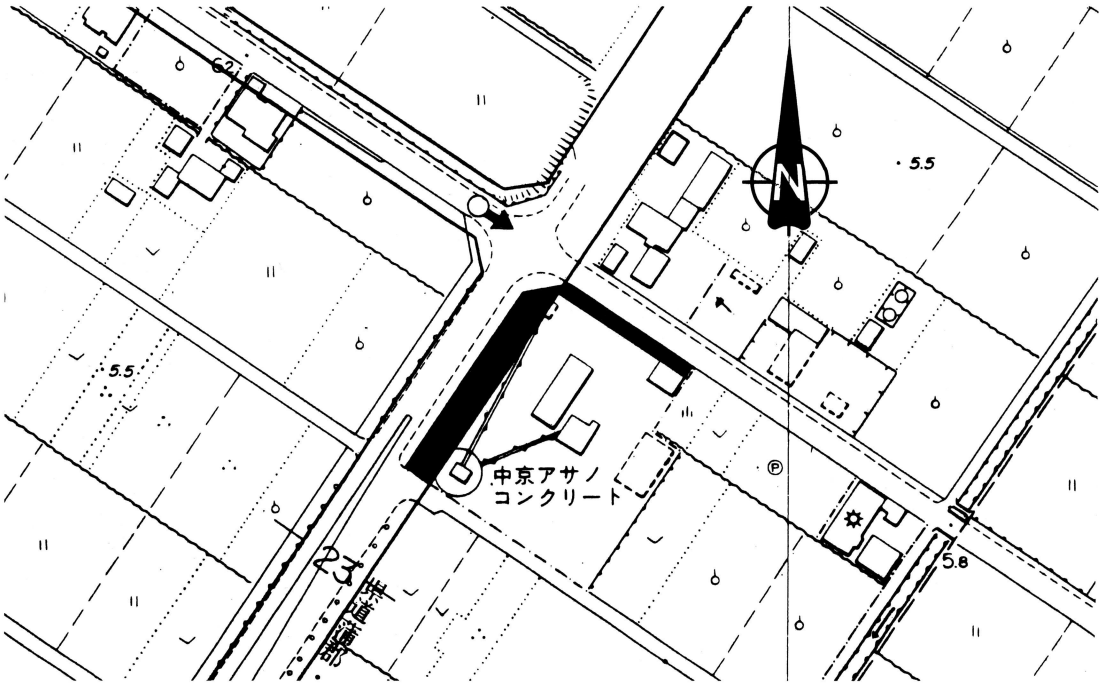
（松田　訓）



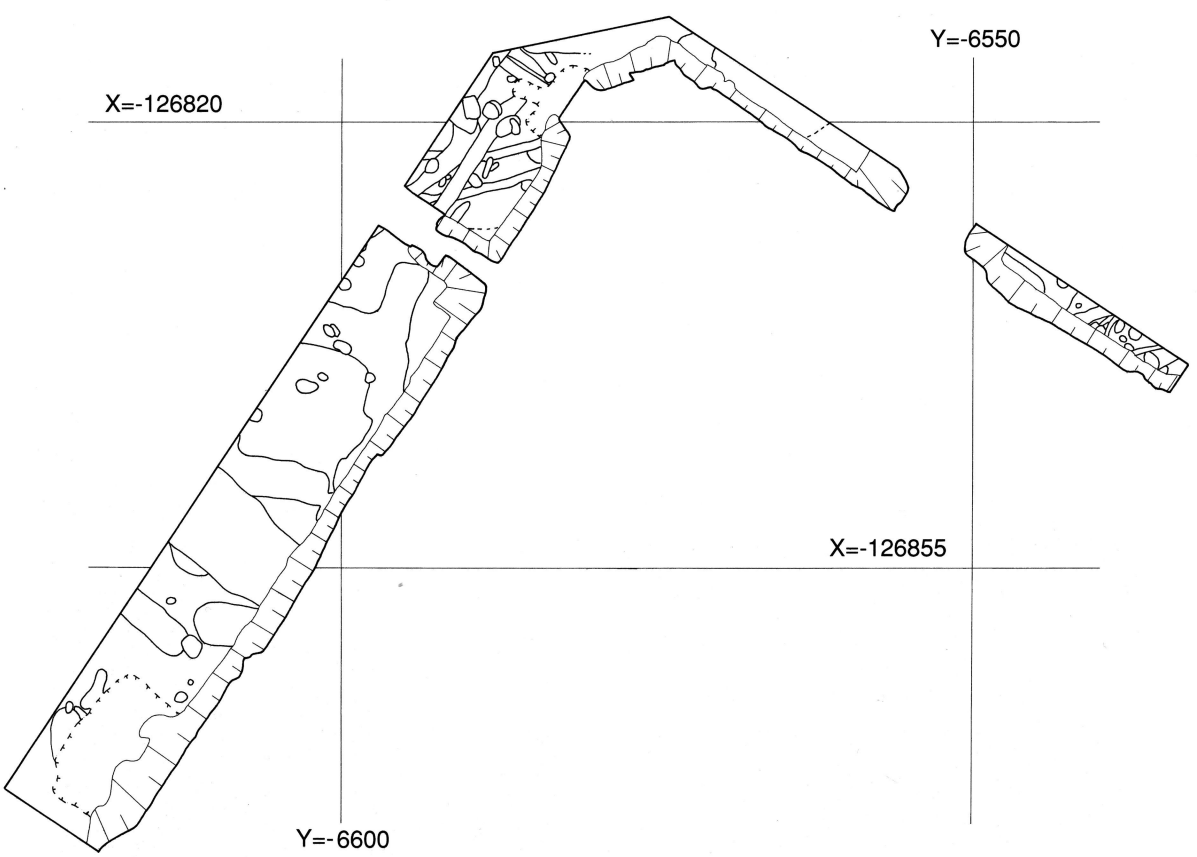
調査区（北東より）



調査区（南西より）



第１図　調査区位置図（１：2,500）



第２図　遺構図（１：600）

鹿乗川（かのりがわ）流域遺跡群

調査の経過　二級河川鹿乗川は、安城市東部では碧海台地東端に沿って南北に流れている。この流域は台地の縁にあたり、鹿乗川及び矢作川などによって形成された沖積低地と洪積台地との境界に位置している。この沖積低地側では、氾濫や上流からの土砂の堆積、海岸線の変化などによって形成された微高地が点在しており、現況は水田として利用されていて、この中に畑地が点在し、自然堤防上の微高地には小規模な集落が形成されている。この鹿乗川において、愛知県土木部による広域河川改修工事が行われることとなった。工事予定地周辺では、安城市教育委員会による数例の調査や、昭和63年に本センターが実施した加美遺跡の発掘調査が行われており、過去の調査事例から弥生～古墳時代を主体とした遺跡が広がる可能性が考えられた。（財）愛知県埋蔵文化財センターでは、県教育委員会の委託を受け、改修工事に伴う鉄塔移設予定地において、範囲確認を兼ねた事前調査として、発掘調査を行うこととなった。発掘調査は平成10年10月～11年3月まで行い、調査面積は800m²である。

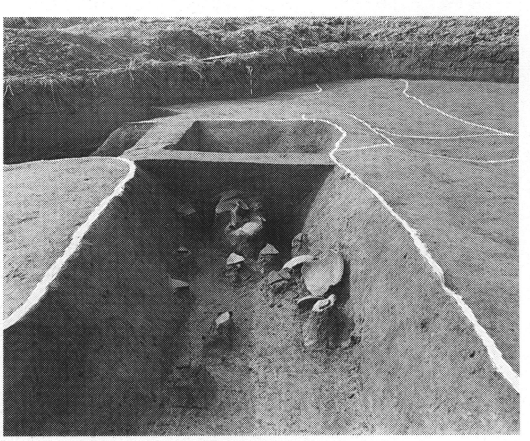
調査の概要　今回の調査区は、河川の拡幅工事に先立ち、現在設置されている送電用鉄塔を移設する工事が行われるため、現存する移設予定の鉄塔8基の東側にそれぞれ一辺10mの正方形で設定された。全調査区は、旧態が水田であり、耕作面の標高は最上流のA区で8.2m、最下流のH区で7.5mを測る。各調査区では、現在の水田耕作土が約0.2m入れられており、この下にオリーブ灰色、浅黄色シルトの堆積が多くの調査区で認められた。これらの下には、灰・緑灰色シルトが堆積しており、これらの層において弥生時代中期末葉～古墳時代前葉にかけての遺物、遺構が検出され、この下部の基盤層は緑灰色シルト・細粒砂であった。

検出された遺構は、土坑、溝、不定形土坑、柱穴などである。このうち土坑では、土器棺墓の可能性が考えられるもの、溝では方形周溝状にめぐるものなども認められ、時期の前後関係を含めて現在その性格を検討中である。

検出された遺物は、弥生時代中期末葉から古墳時代前葉の時期を主体とし、土器は壺、甕、高杯片が圧倒的な比率を占めている。　（松田　訓）



B区全景（南西より）



A区遺物出土状態



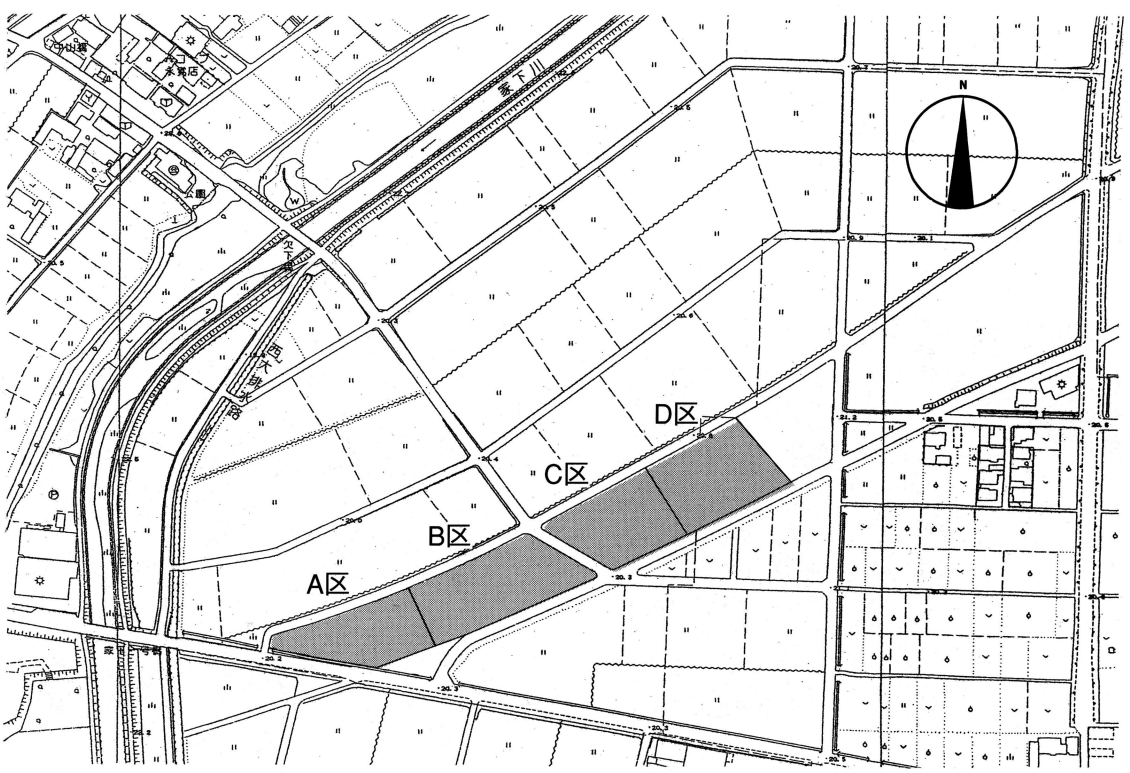
第１図　調査区位置図（１：20,000）

本川（ほんがわ）遺跡

調査の経過　本川遺跡は豊田市南部、永覚町大正及び本川に所在し、矢作川中流域に形成された沖積地に立地する。この遺跡は平成７年度の県調査センター及び豊田市教育委員会による遺跡の有無確認調査により、古墳時代と戦国時代の遺跡の所在が明らかになった。その結果を受け、第二東海自動車道建設に伴う事前調査として日本道路公団より県教育委員会を通じ発掘調査を委託され、平成10年４月から調査を開始した。調査面積は15,500㎡で、Ａ区からＤ区の４つの調査区を設定した。

調査の概要　今回の調査で新たに弥生時代の遺構を確認している。以下にＢ区からＤ区を中心に各時代を記述する。

中世～近世　中世の遺構は、溝・土坑などをＢ・Ｃ区で検出した。溝は、Ｄ区で検出した旧矢作川の可能性を持つ旧河道の西岸に並行し、真北より約２０度東に振れて走るものと、屋敷地に相当する方形区画を構成するものがある。方形区画については確認できるものは４～５区画で、このうち規模のわかるものは１区画のみで、東西約30ｍ、南北約50ｍを測る。近世の遺構は、溝・土坑などをＣ区東端からＤ区にかけて検出した。溝は、中世の溝とは方向が異なっており、ほぼ真北を向いて走る。その他の遺構としては、Ｄ区東端で旧矢作川の流路の一部と思われる河道を検出した。これらの遺構は１８世紀中頃に頻発した矢作川の大洪水による多量の土砂によって埋没した可能性が高い。　（成瀬友弘）



第１図　調査区位置図（１：5,000）

古墳時代　古墳時代中期の遺構はＡ区からＢ区にかけて展開している。Ｂ区の東端約４分の１とＣ区は谷状の地形で流木が多く、古墳時代の土師器も若干出土している。この谷より西側の、北西から南東にのびる幅の狭い標高約19ｍの微高地上で、複雑に重複した約70棟の竪穴住居、溝・土坑を確認した。竪穴住居の規模は一辺が３～７ｍ程度の正方形ないしは長方形で、遺構検出面から床面までの深さは、浅いもので５㎝程度、深いものになると40㎝近くあり、なかには床面と思われる薄い炭化物層が３～４面認められるものもある。住居の主軸の方向はほぼ真北を向くもののほか、北東や北北西を向くものもあり、３～４回の建て替えがあったものと考えられる。

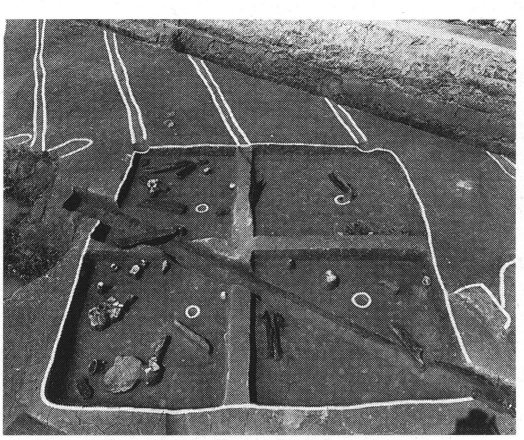
ＳＢ01は一辺約５ｍの焼失住居で、住居の上屋構造である柱や梁などの建築材が完全に燃えきらずに、いわゆる「生焼け」の状態で残っていた。焼失住居の検出例は全国的に多数みられるが、このように「生焼け」で残っていた例はきわめてまれで、今後、古墳時代の竪穴住居の構造を考えるうえで、貴重な資料となろう。

ＳＢ04とＳＢ41ではカマドを検出した。うち、ＳＢ04のカマドは一辺約5.5ｍの竪穴住居の東壁やや南寄りにきわめて良好な状況で遺存していた。その平面形は住居の壁面からの長さが約1.4mで、最大幅が約１ｍの長細い台形状で、現況での高さは床面から約13㎝あり、天井部まで残存していた。煙道部は内部に炭化物と焼土が詰まった状態で住居外までのびており、壁面から約25㎝離れて直径約15㎝の煙出部を検出した。燃焼部には支脚用の完形の高杯が伏せた状態で出土しており、その約10㎝内側の焚口部では基盤の土が焼けて赤変していた。一方、住居のほぼ中央には地床炉と思われる焼土のひろがりを確認していることから、カマドと地床炉を併用していた可能性がある。出土した支脚用の高杯からこの住居の所属時期は５世紀の中葉頃とみられる。

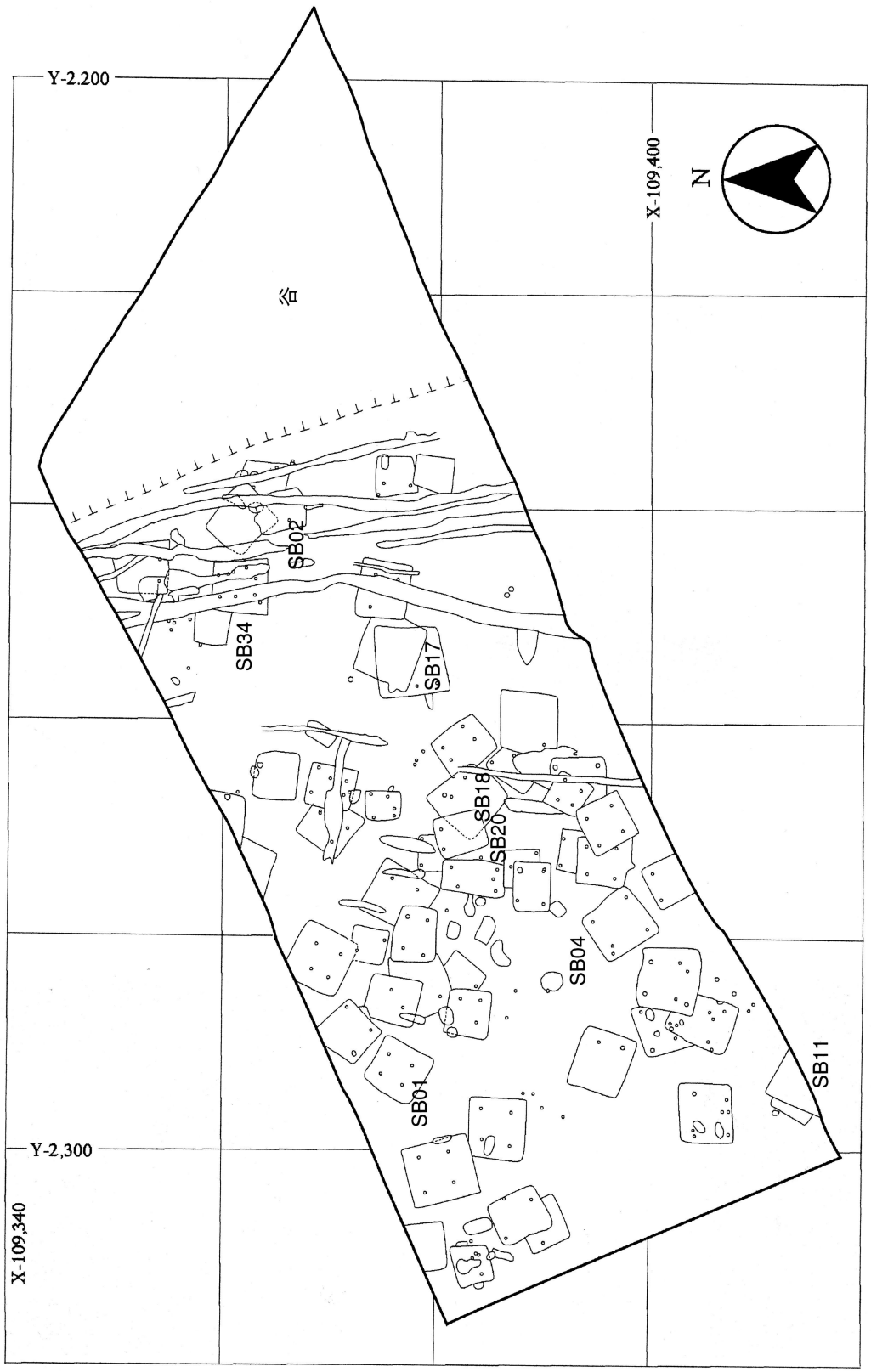
このほかには、ＳＢ02・11・17・18・20・34などから比較的まとまって土師器が出土している。時期はおおむね５世紀の前半から中葉に属する。　（樋上　昇）



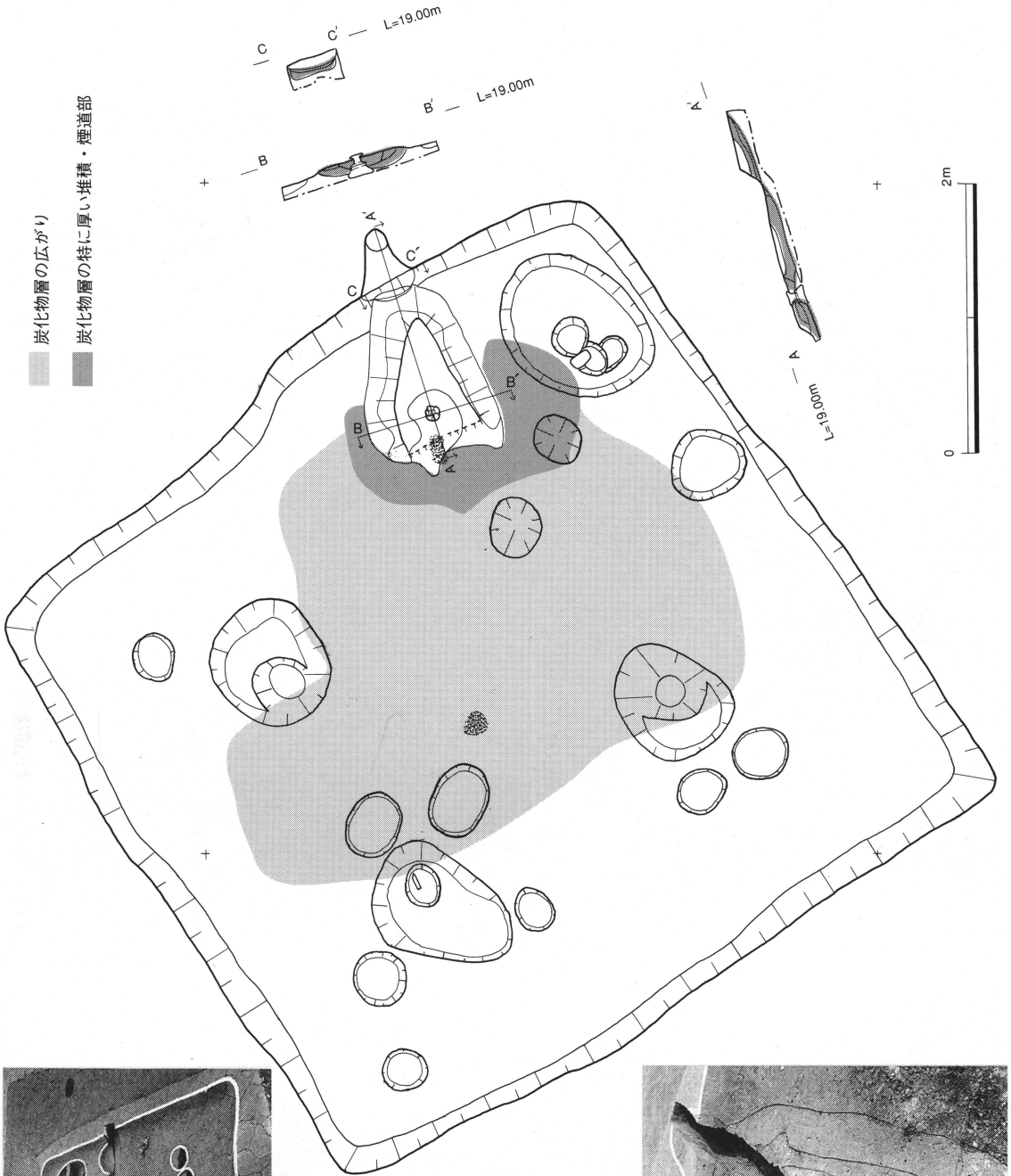
Ｂ区古墳時代全景



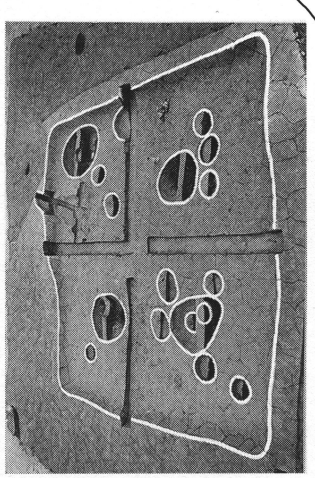
ＳＢ０１検出状況



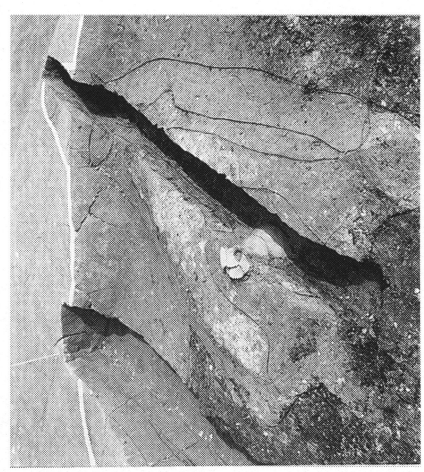
第２図　B区古墳時代遺構図（１：600）



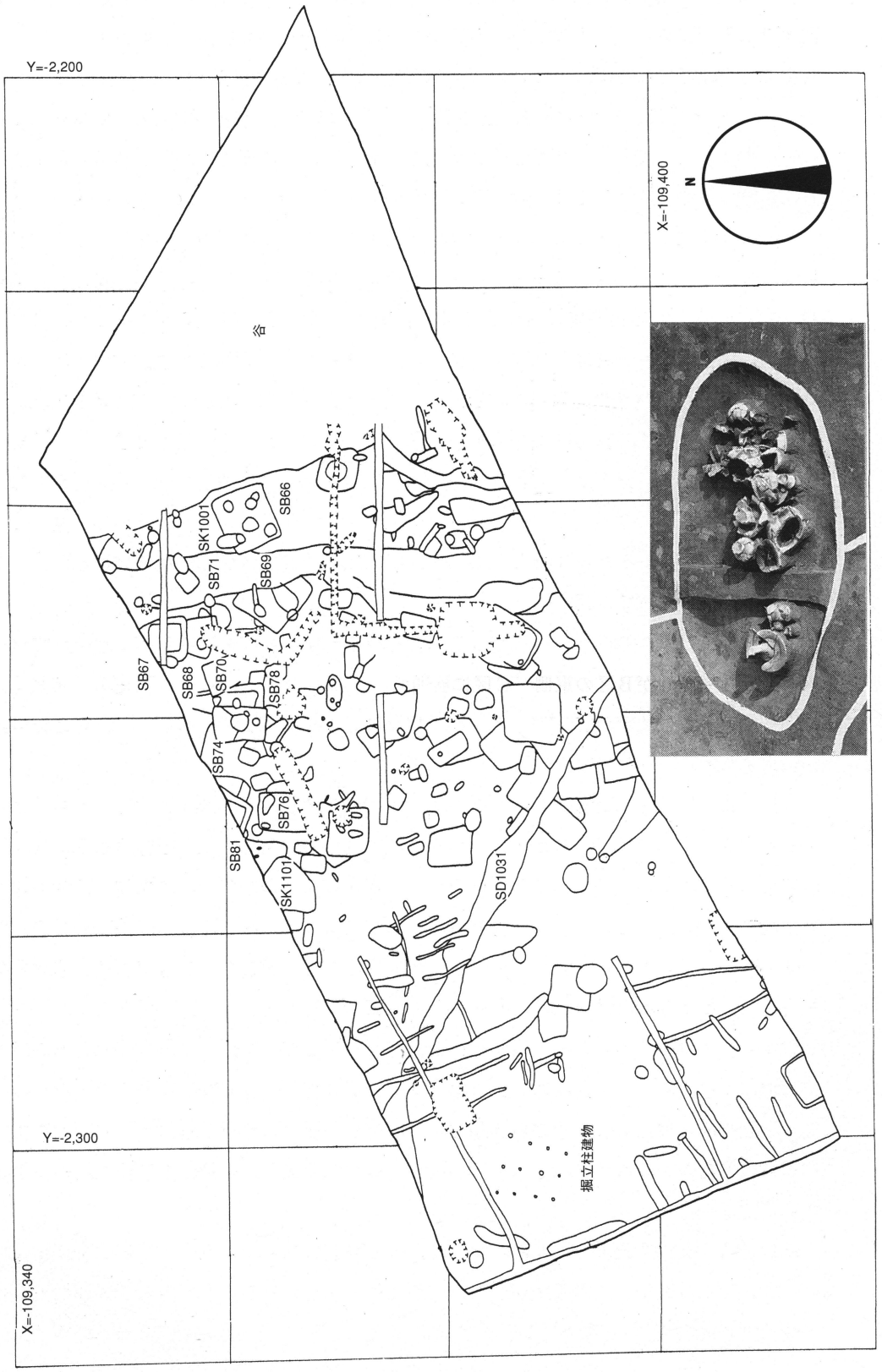
第３図　ＳＢ04平面図およびカマド断面図（１：50）



ＳＢ04完掘状況



カマド断ち割り状況



SK1001遺物出土状況

第4図　B区弥生時代遺構図（1：600）

弥生時代　弥生時代の遺構をＢ区東部分の谷状の地形より西側で検出した。前期の明確な遺構は確認することができなかったが、谷より西側のほぼ全域から条痕文土器片が出土している。中期の主な遺構としては、Ｂ区中央部分の微高地で竪穴住居（ＳＢ76・81）・土坑（ＳＫ1101）を検出した。ＳＫ1101は不定形をした大型土坑で、中から古井式の甕が東西に４点並んで出土した。そのうち両端２点は倒立しており、西側の甕の中から磨製石斧が出土した。後期の主な遺構としては、同じく微高地で竪穴住居（ＳＢ66～71・74・78）・土坑（ＳＫ1001）を検出した。ＳＫ1001は南北に長い楕円形をした土坑で、中から山中式併行期の壺４点・甕３点・高杯３点・器台１点がほぼ完形で出土し、この時期の良好な一括資料が得られた。谷の落ち際に近く、土坑の長軸の方向が谷の落ち際の方向と一致している。調査区を北西から南東方向にのびる溝（ＳＤ1031）から西側では竪穴住居はほとんど検出されず、中・後期の居住域は調査区中央北よりから北方へ広がるものと考えられる。他の遺構としては、Ｂ区北西部分で掘立柱建物群を検出した。そのうち規模がわかるものは、２×３間の総柱の建物１棟で、柱掘形は直径30㎝前後を測り、５ケ所から柱根を確認した。（宇佐見　守）

まとめ　今回の調査で戦国時代・古墳時代中期・弥生時代の遺構を良好な状態で確認した。以下に各時代の様相と今後の課題をまとめる。

戦国時代には、現集落がのる微高地と旧矢作川の流路の一部を挟み、西に対峙して溝に区画された屋敷地がＢ区の東側・Ｃ区に展開する。遺構の存続期間は16世紀前半と短く、周辺には鴛鴨城・上野城や三河一向一揆の拠点にもなった隣松寺があり、それらとの関連が注目される。

古墳時代中期の遺構はＢ区の微高地上に約70棟の竪穴住居を検出している。うち、カマドを有するものは２棟であるが、検出した全住居内の出土遺物中には須恵器はみられず、土師器のみである。遺構の遺存状態及び出土遺物から、この集落の存続期間は比較的短く５世紀前半から中葉であり、西三河地方のカマドの出現期を考えるのに良好な資料を得ている。また、近接して同時期の集落である神明遺跡・川原遺跡や三味線塚古墳・車塚古墳等があり、これらの遺跡との関係も考えなければならない。

弥生時代は前期とみられる遺物がＢ区西側を中心に散在するが、現時点では遺構の広がりは明確ではない。中・後期はＢ区の微高地上に竪穴住居が、やや標高の下がったその縁辺に土坑や溝が展開し、集落端の様相を示す。同じ沖積地に位置し近接する川原遺跡では中期には集落が営まれ、後期には方形周溝墓が築かれており、当遺跡との関連の検討を要する。

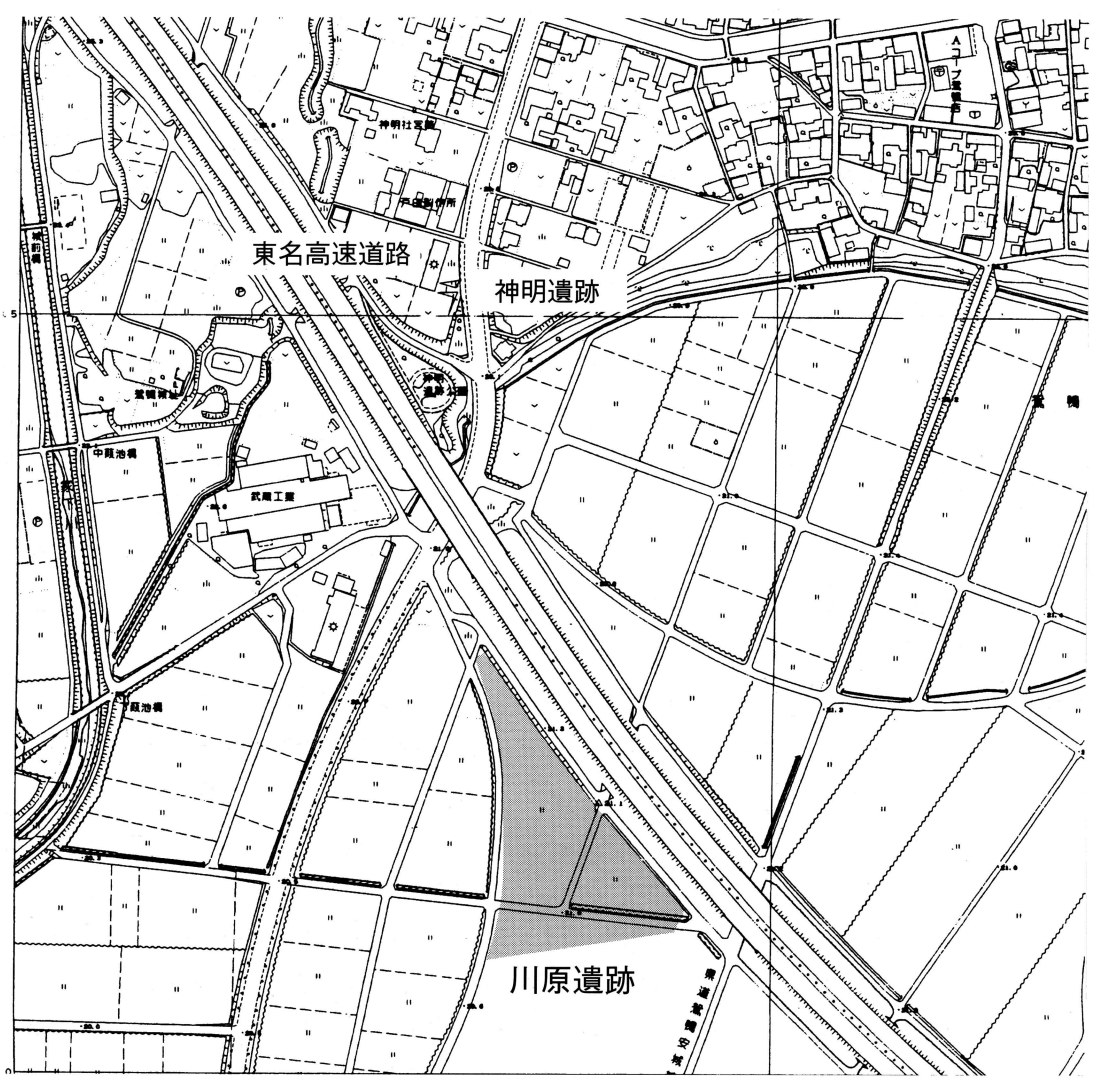
本川遺跡、また周辺の郷上遺跡・川原遺跡等の調査成果から、豊田市南部の矢作川流域の沖積地下に良好な状態で遺跡が遺存している例が明らかになった。今後、矢作川流域の沖積地での遺跡の分布・広がりが注目される。（佐藤公保）

川原（かわはら）遺跡

調査の経過　川原遺跡は、豊田市の南部、鴛鴨町川原に所在する。本遺跡は、矢作川によって形成された標高20ｍ前後の自然堤防上に立地する弥生時代から戦国時代にかけての複合遺跡である。

発掘調査は、第二東海自動車道の豊田ＪＣＴ建設に伴う事前調査で、日本道路公団から愛知県教育委員会を通じた委託事業として昨年度から継続して行なっている。今年度は、97Ｂ・Ｃ・Ｄ区の最下層を４月から５月にかけて実施した。

調査の概要　昨年度の発掘調査の結果大きく４時期に区分できることが判明した。Ⅰ期は縄文時代晩期から弥生時代中期にかけて、Ⅱ期は弥生時代後期から古墳時代にかけて、Ⅲ期は奈良・平安時代、Ⅳ期は中世・戦国時代である。特に注目すべき遺構として、焼失家屋を含む300棟以上の竪穴住居（弥生時代中期）や墳長約26ｍ×約35ｍ、周溝幅約10ｍを測る全国最大級の墳丘墓を含む大型墳丘墓４基（弥生時代後期～古墳時代初頭）があげられる。



第１図　調査区位置図（１：5,000）

今年度は、弥生時代中期の竪穴住居群のさらに下層に展開する遺構を調査した。検出されたのは、多数の竪穴住居と若干の方形周溝墓、さらに竪穴住居に切られるかたちで検出された溝や土坑などである。調査を進めていくと、当初検出された溝の多くは方形周溝墓の周溝であることが判明した。また、土器棺墓も確認された。このことから、今年度の調査で検出されたれた遺構は、大きく二つに区分される。つまり、方形周溝墓や土坑墓が展開する墓域と、竪穴住居が展開する居住域である。さらに、この墓域と居住域とは時期的に新旧関係にある。以下にその調査成果の概要を報告する。

墓域の時期に確認された主な遺構は、方形周溝墓13基、土器棺墓14基、溝１条、土坑などである。方形周溝墓は、最小のもので約3.6ｍ×約3.2ｍ（ＳＺ507）、最大のもので約11.3m×9.7m（ＳＺ504）を測る。なお、主体部は全く検出されなかった。土器棺墓は、ほとんどが壷を用いた単棺であるが、合口棺と思われるものも１基認められる。また、単棺のものには横位状態に置かれたものと立位状態に置かれたものがある。土坑は、長軸１ｍ～1.5ｍ、深さ0.3～0.5ｍのものと長軸２ｍ前後、深さ１ｍ前後のものに分けられる。また、ＳＫ848のように埋土に微細な焼土塊、炭化物塊、灰などを多量に含むものも多く認められる。これらの遺構はいくつかの集団を形成していると考えられる。つまり、土器棺と土坑が集中する区域と方形周溝墓が集中する区域である。さらにこれらの配置状況を詳細に検討すると、ＳＺ504を中心として、北西および南東方向に土器棺、土坑が集中する区域（墓域Ａ・Ｂ）が広がり、それらを囲むようにして方形周溝墓群が展開する区域（墓域Ｃ）が想定される。

土器棺に用いられた壷や遺構から出土した土器などは、概ね弥生時代中期の瓜郷式期に該当すると考えられる。

居住域の時期に確認された遺構は、竪穴住居82棟、若干の溝、土坑である。竪穴住居のなかには、炉跡が想定されるものが13棟検出された。昨年度の調査において、弥生時代中期の竪穴住居が多数確認されたが、今年度の調査で検出された竪穴住居は、その残りのものが確認されたと思われる。

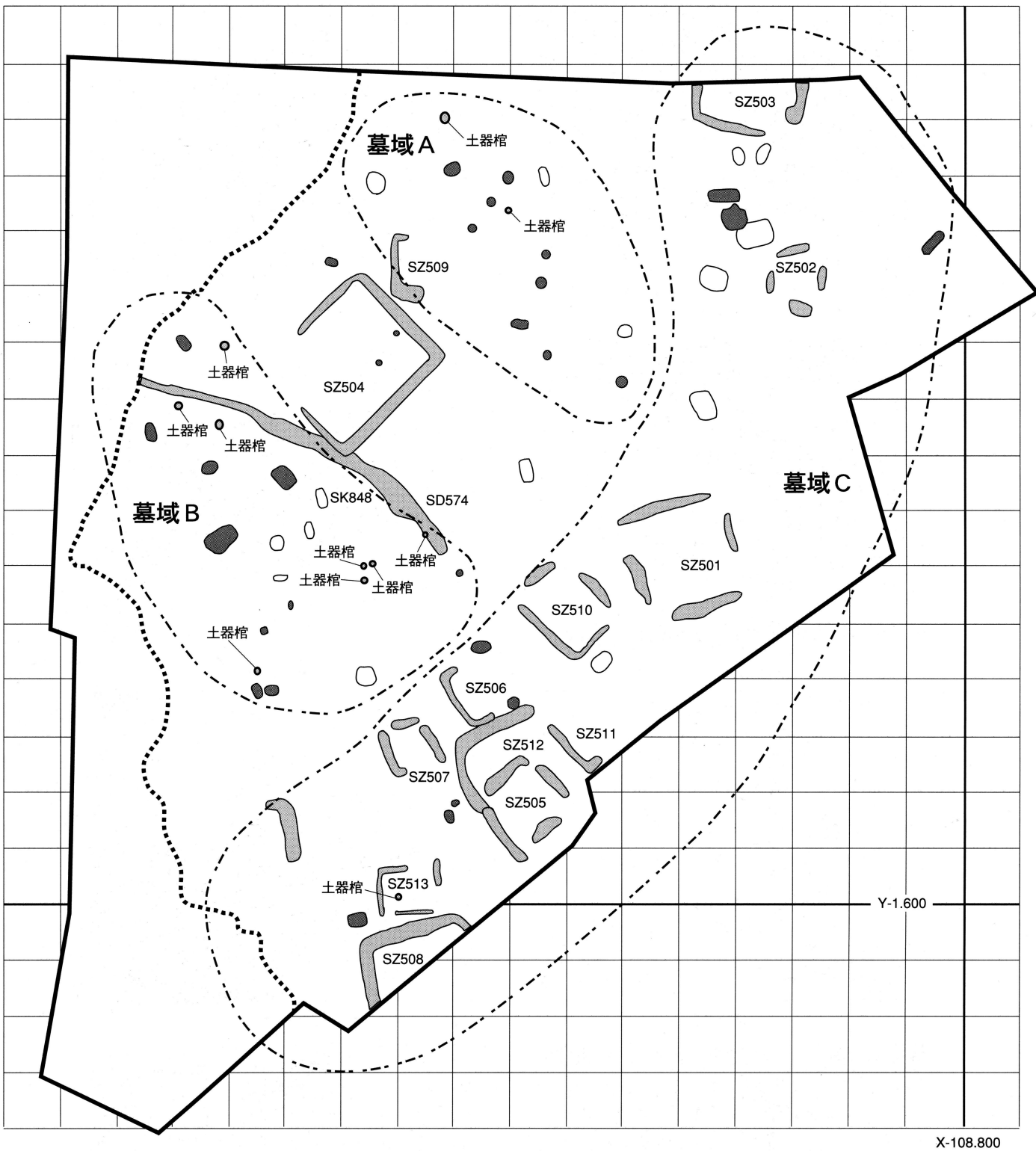
今年度も多くの土器や石器が出土した。土器は、壷や甕、高杯などであるが、竪穴住居から銅鐸形土製品も出土している。石器は、石鏃、磨製石斧などのほか、長さ25㎝を測る大型石包丁や環状石斧も出土している。

まとめ

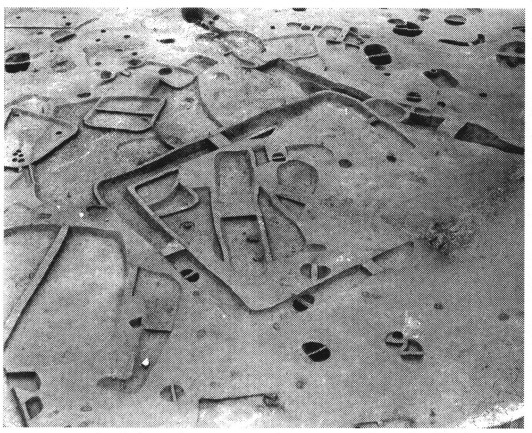
昨年度の調査において、縄文時代晩期後半に属する条痕文を施す深鉢形土器片や石匙、石棒（石剣？）など若干の石器が散見されたため、縄文時代晩期の遺構を想定して調査が行なわれたが、同時期の遺構は全く検出されなかった。しかし、弥生時代中期の墓域、および多くの竪穴住居が展開する居住域を確認した。このことから、Ｉ期は弥生中期に限定され、墓域の時期と居住域の時期の２時期に区分される。

なお、墓域の中核をなすと考えられるＳＺ504は、集団内の中心的存在の人物を埋葬した墓の可能性が想定されるが、祭場などの特殊空間の可能性も考えられるかもしれない。いずれにせよ、調査段階ではその性格を確定することができなかったため、今後の研究成果に期待したい。

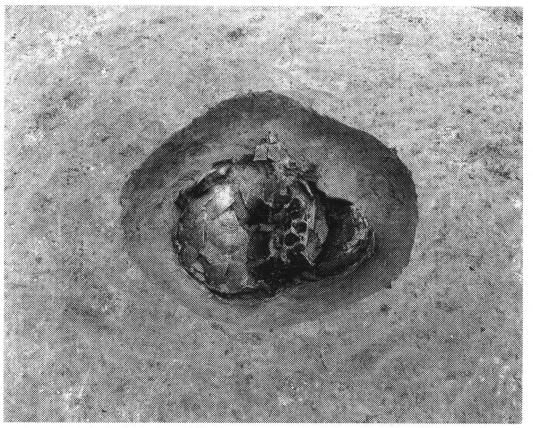
（中野良法）



第２図　川原遺跡98区Ⅰ期主要遺構配置図（１：500）



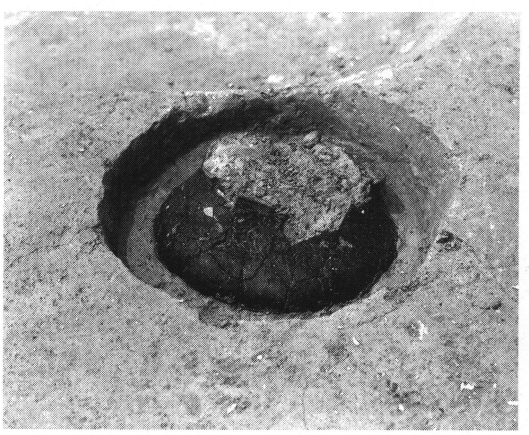
ＳＺ504



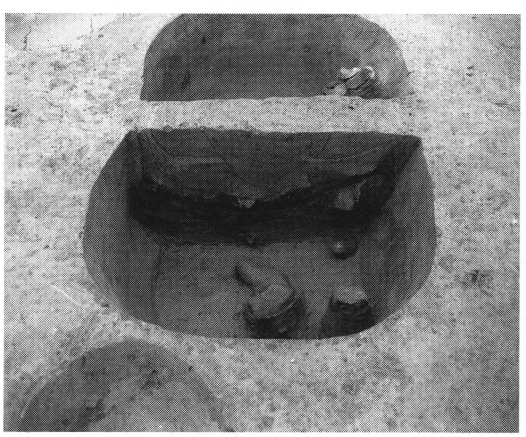
土器棺出土状況（合口）



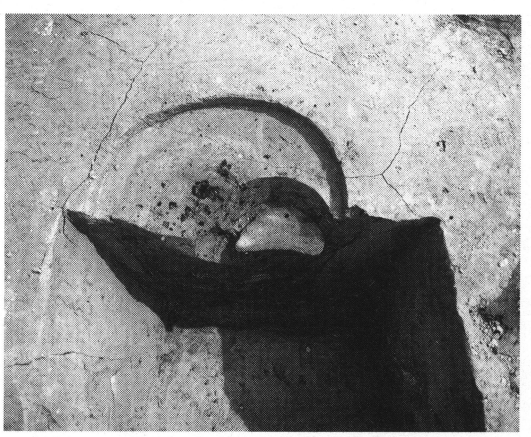
土器棺出土状況（横位）



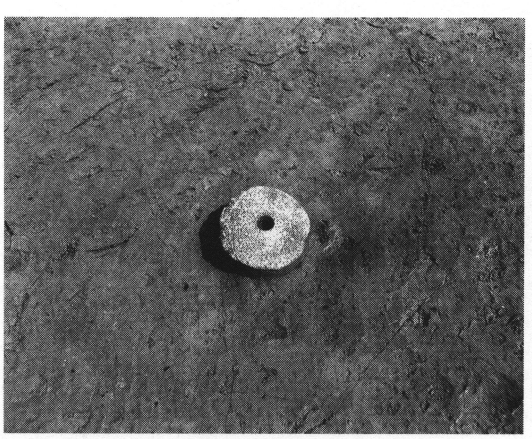
土器棺出土状況（立位）



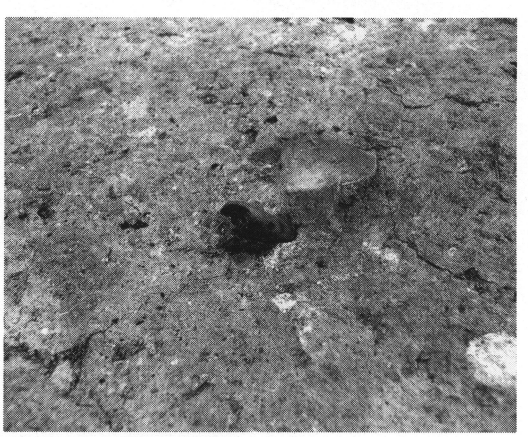
ＳＫ848土層断面



石包丁出土状況



環状石斧出土状況



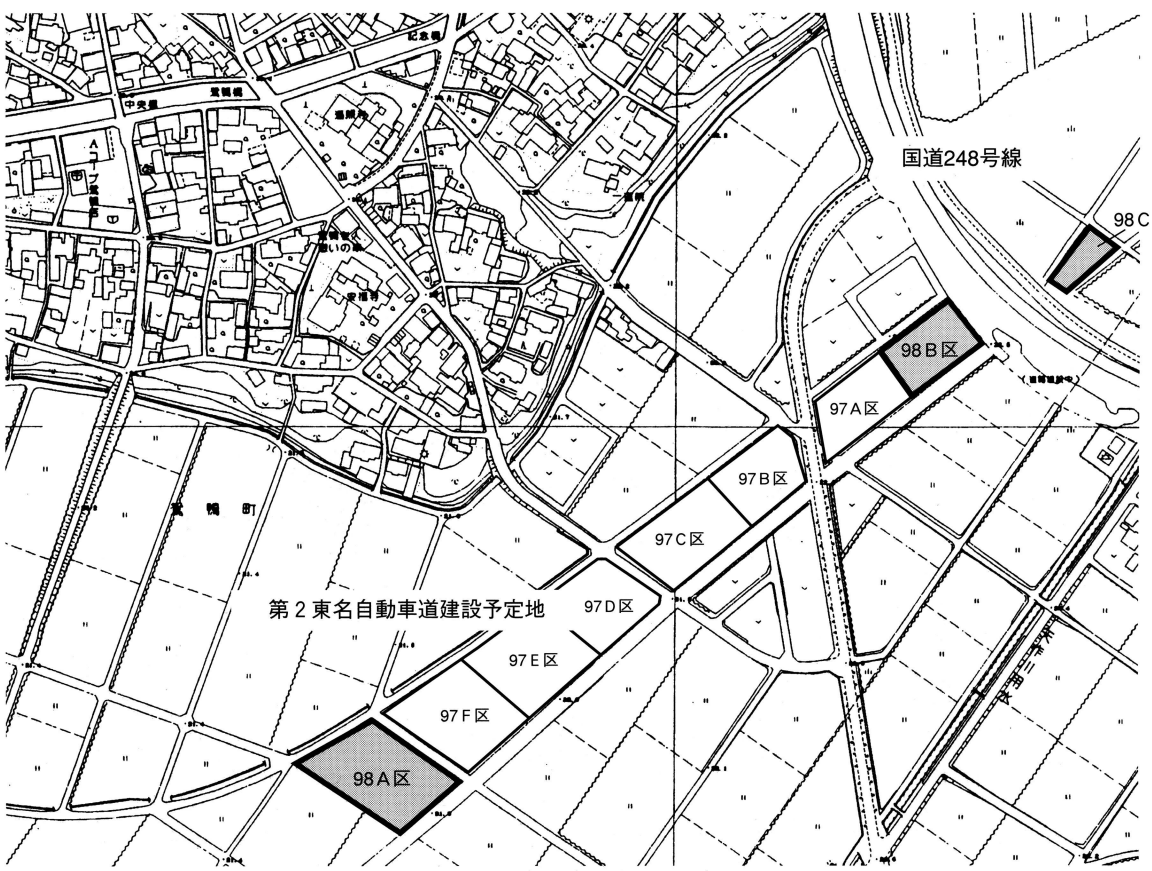
銅鐸形土製品出土状況

郷上（ごうがみ）遺跡

調査の経過　郷上遺跡は、豊田市鴛鴨町郷上に所在する。本遺跡は矢作川中流域右岸に位置し、矢作川の形成した沖積微高地上に立地する。周辺は平坦な地形で、整然とした水田が広がる環境である。標高は約21ｍを測る。遺跡の北西側は数十m離れて鴛鴨の集落が所在する洪積台地があり、この縁に平行する形で遺跡は北東から南西に広がる。南東側は沖積低地を隔てて南流する矢作川に臨む。

本調査は第二東海自動車道の建設に伴うもので、日本道路公団より愛知県教育委員会を通じた委託事業として実施した。平成８年度に試掘調査を行い、昨年度は97Ａから97Ｆ区までの６調査区を設定し、20,650㎡を調査した。今年度は昨年度調査区の南端の97Ｆ区の南側にＡ区（3,250㎡）、北端の97Ａ区の北側にＢ区（2,500㎡）Ｃ区（900㎡）を設定した。調査区の総面積は6,650㎡である。

これまでの調査で古墳時代から近世までの遺構遺物が検出されている。主な時期としてはⅠ:古墳時代～平安時代初頭、Ⅱ:中世、Ⅲ:戦国時代～江戸時代前半の３期がある。この中で中心となるのはⅠ期とⅢ期である。Ⅰ期については97Ａ区において古墳時代竪穴住居10棟、北東－南西方向の溝などが検出されており、今年度Ｂ区に遺構が広がることが確認された。また、Ⅲ期の遺構は調査区全体に展開しているが、その中で中心となるのが、97Ｃ区から97Ｆ区にかけてであり、Ａ区に集落が広がることが確認された。　（酒井俊彦）



第１図　調査区位置図（１：5,000　豊田市基本図「鴛鴨」より）

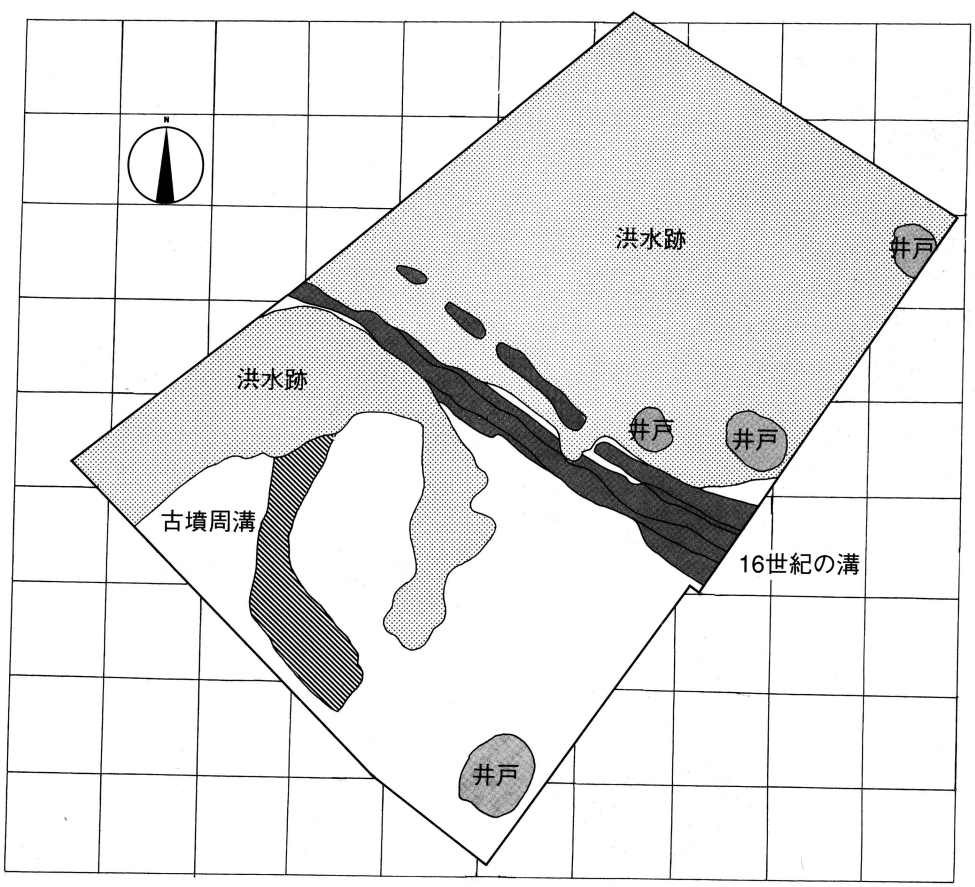
C区

C区では、耕作土下に流水もしくは地震による噴砂現象に起因するとみられる粗粒砂の堆積があり、本来遺構が確認できるはずの灰褐色砂質土層を調査区の大部分で破壊していた。その破壊部分の粗粒砂を除去すると、比較的粘質の強い遺構の埋土を中心とした残存部分があり、そこで5世紀代の古墳（周溝のみ）、16世紀代の溝・井戸が確認できた。なお、郷上遺跡北部でこれまで確認されてきた大溝は本調査区では確認されなかった。

古墳の周溝とみられる溝（SZ01）は、流水による破壊から免れたL字状に延びる一部分が残存していた。周溝は調査区の南端で途切れているが、これは当初からのもので、ここがブリッジになっていたとみられる。周溝内からの出土遺物は5世紀代の土師器・須恵器が若干ある。当該遺構を古墳周溝とみる根拠として、周溝内からではないが、流水砂中・16世紀代の溝内から円筒埴輪片・家形埴輪（鰹木の部分）が出土している点が挙げられる。なお、墳丘は完全に削平されているが、周溝の形状から推定すると一辺約15～20mの方墳であったとみられる。

16世紀代の溝は、調査区の中央を北西から南東方向に延びている。幅0.4m前後の小溝が幾度か掘り返しを受けている。出土遺物は当該期の陶磁器の他、拳大の礫が多く見られ、割られたものが多い点が特筆される。

井戸は4基確認でき、うち3基では下部構造が良好に残存していた。縦板と横桟を方形に組んでおり、井筒に曲物が使用されているのが確認された。　（永井邦仁）



第2図　C区主要遺構図（1：400）

B区

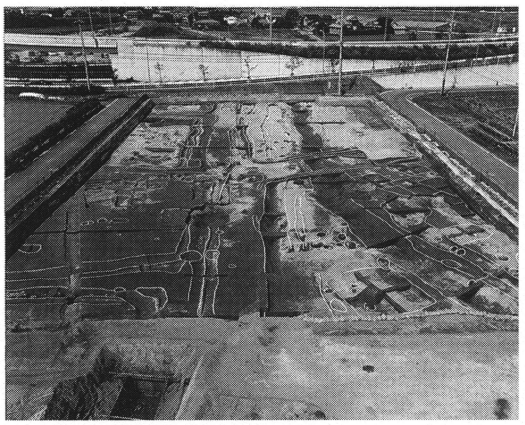
B区は、昨年度調査区97A区の北東側に連続する位置にある。97A区の調査は、上・下面2面の工程で調査を行い、上面で中世～近世、下面で古墳時代の遺構を検出した。隣接する今年度B区は、これと同じ調査工程を基本とした。しかし、97A区の上面がのっていた層は北東側およそ2/3が近年の水田造成によって削平されていたため上下面の遺構が同一面で検出され、南西側を除いて1面の調査となった。

B区の基本層序は、表土として30～40cmの厚さの近年の水田耕作土が最上層にあり、その下部に厚さ30cm前後の黄褐色シルト層がある。この上部で上面の遺構を検出し、その下層の基盤層でもある黄白色砂層あるいはシルト層との境界面で下面の遺構を検出した。

今年度B区で検出された遺構、遺物は古墳時代から近世にまで及ぶが、主な時期としてはⅠ期：古墳時代後半～奈良時代、Ⅱ期：中世～江戸時代の2期に分かれる。

Ⅰ期は、細かくは5世紀代、古墳時代末（7世紀）、奈良時代の3時期がある。5世紀の遺構としては竪穴住居1棟、調査区南東部を南西～北東方向に走る溝4条（SD23・24・25・31）が検出された。竪穴住居（SB01）は調査区南東部の壁際に北半が検出され、5世紀代の須恵器が少量出土した。SD24は、97A区で南隅で南から北東方向に直角に曲がってB区にはいり、若干東よりに方向を変えて調査区を縦断してぬける。検出面より深さ60cm、最大幅約2mである。SD31は、SD24に南西部は平行して走るが、SD24にきられる形で重複する。この二条の溝は比較的深く、埋土中からは5世紀代の土師器、須恵器が多量に出土した。SD23・25はSD24より古く、遺物は少量であった。7世紀代の遺構は、竪穴住居SB11のみが検出された。少量出土した遺物から7世紀中頃の時期と考えられる。奈良時代の遺構としては調査区南部に竪穴住居10棟、北西隅に97A、B、C区に続く大溝（SD39）が検出された。竪穴住居はいずれも掘りが浅く、遺存状況が悪いために竈、柱穴等を明確にしえない。出土遺物としては須恵器が少量出土した。大溝は、検出面で幅最大7m、深さ約1.2mを測る。昨年度の調査では古墳時代後半の遺構とされたが、今回の調査で確実に奈良時代の遺物が下層から出土し、この時期と確認された。上層から平安時代初頭の遺物が出土することから、平安時代には埋積して機能を失っていたことが推測される。大溝は、洪積台地側から延びてきてB区にはいり、97A、B区と調査区に沿う方向で走って97C区で台地側に方向を変える状況になる（第3図）。

Ⅱ期は、中世と戦国時代～江戸時代前半に分けられる。確実な中世の遺構としては14世紀代の井戸が2基のみが検出された。戦国時代以降の遺構では溝による方形の土地区画が5区画確認された。これらは97A区よりのびる南西－北東方向の中央溝群とこれに直交する方向の溝を各辺として形成される。中央溝群の中心部には当時の主要路が存在し、溝の遺物の出土状況から屋敷地がその両側に展開していたことが推測される。しかし、この時期の井戸は1基のみであり、土坑等の遺構の密度も昨年度の調査区と比較してかなり粗である。文献史料等から当時期の集落は昨年度の調査区の部分が中心であり、B区は周辺部にあたることが推定されている。遺構の状況はこのことと一致しており、屋敷地として利用されてはいるが、その期間は相対的に短いものと考えられる。　（酒井俊彦）



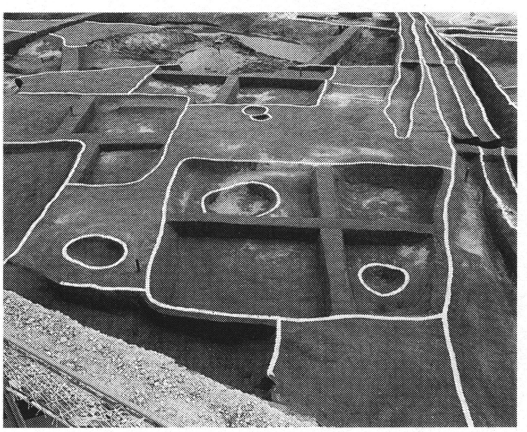
B区全景（南西より）



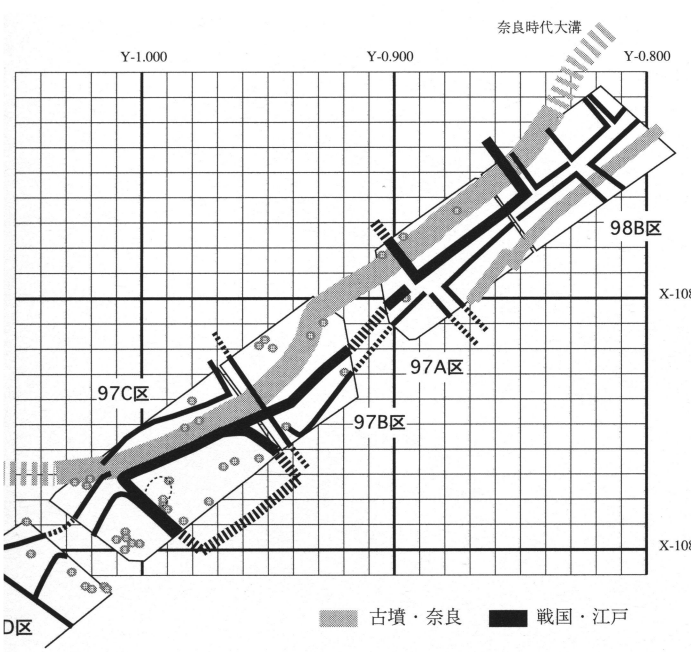
ＳＤ24・31（南西より）



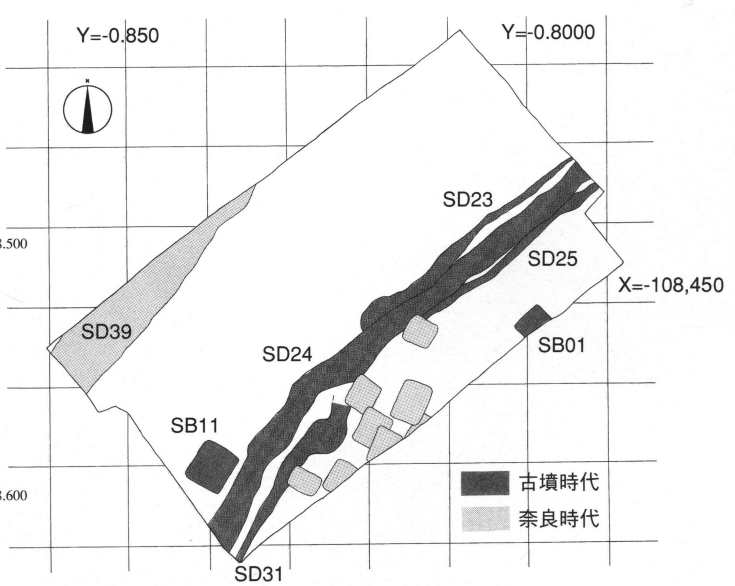
ＳＤ39（南西より）



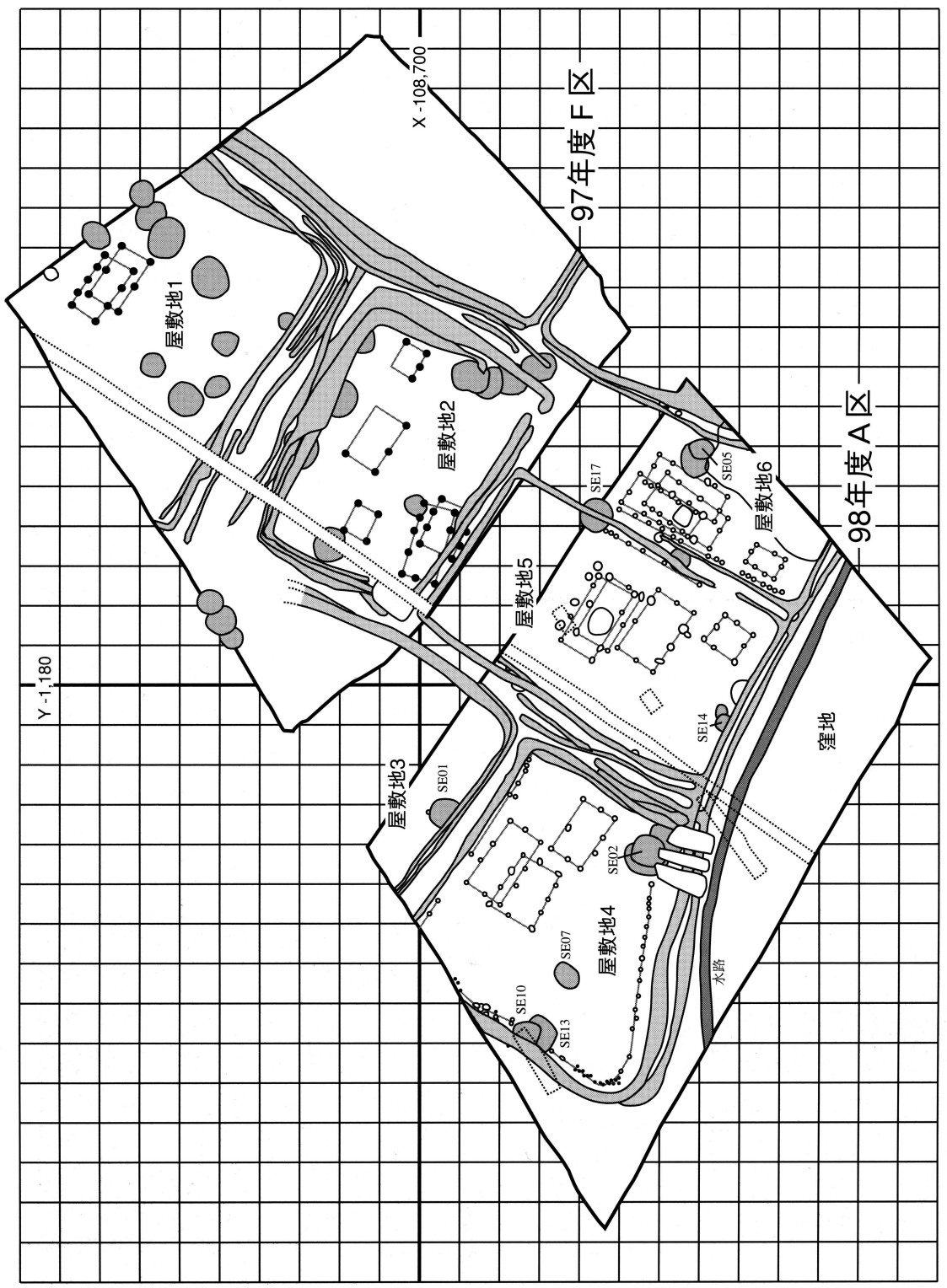
奈良時代竪穴住居



第３図　主要遺構図（１：3,000）



第４図　Ｂ区Ⅰ期主要遺構図（１：800）



第５図　戦国時代の遺構配置図（１：800）

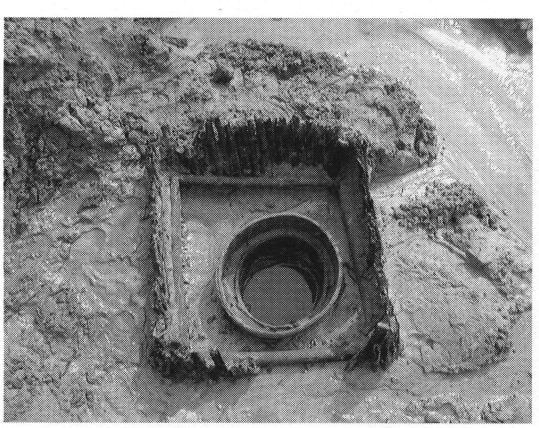
Ａ区の概要　98Ａ区は郷上遺跡の南端に位置し、97年度に調査されたＦ区の南側の調査区である。97Ｆ区では戦国期から近世にかけての屋敷地が確認されているが、今回の調査ではＦ区から続くと考えられる屋敷地を確認することができた。

今回確認できた屋敷地は４つで、幅２～３ｍの溝を巡らせた一辺が30～40ｍ程の規模のもので、その内部には掘立柱建物や井戸が配置されている。屋敷地４を例に見てみると、溝に囲まれた区画の北東部分で掘立柱建物が、その南側に井戸が配置されている。区画の南西部分にも多数のピットが展開しているが、出土する遺物は須恵器が中心で時期的に古い遺構が多い。また東側の屋敷地５でも、屋敷地内の南側部分では遺構、遺物ともほとんど確認できず、屋敷地４と同様な状況であると考えられる。このことから屋敷地内の空間利用の基本パターンとしては、北側部分に母屋と考えられる5ｍ×10ｍ規模の建物があり、その南に５ｍ×５ｍ程のやや小規模な建物や井戸が配置され、屋敷地の南側部分は作業場的な空間が広がっていたと考えられる。

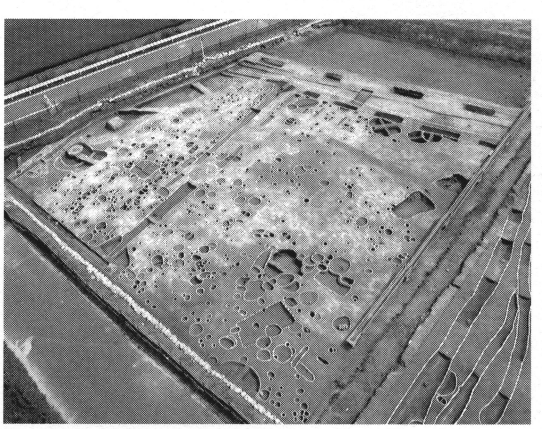
井戸は平面正方形の井戸枠内に曲物が入れられる構造のもの（ＳＥ01、02、04、17）と、桶組のもの（ＳＥ05、10、13）があるが、前者は井戸枠として竹材を併用するという特徴を持っている。

出土遺物としては羽付鍋や内耳鍋といった土師器煮炊具が大半を占め、若干の瀬戸美濃窯産陶器（古瀬戸後期末から大窯前半のものが主体）が出土しているといった状況で、全体的に遺物量は多くない。この他屋敷地６の掘立柱建物周辺からはフイゴの羽口や鉄滓が出土している。

今回確認できた屋敷地は、旧鴛鴨ムラの南西端に位置している。屋敷地４から６にかけて続く南側の溝はちょうど微高地の縁を巡るような形で続いており、この溝を境にして北側に屋敷地が、南側には湿地的な環境が広がっていたと考えられる。このように洪水の被害を受けやすい立地ゆえに、97Ｆ区に比べて早い段階で屋敷地として利用されなくなったものと考えられる。　（春日井　毅・伊藤太佳彦）



ＳＥ０１



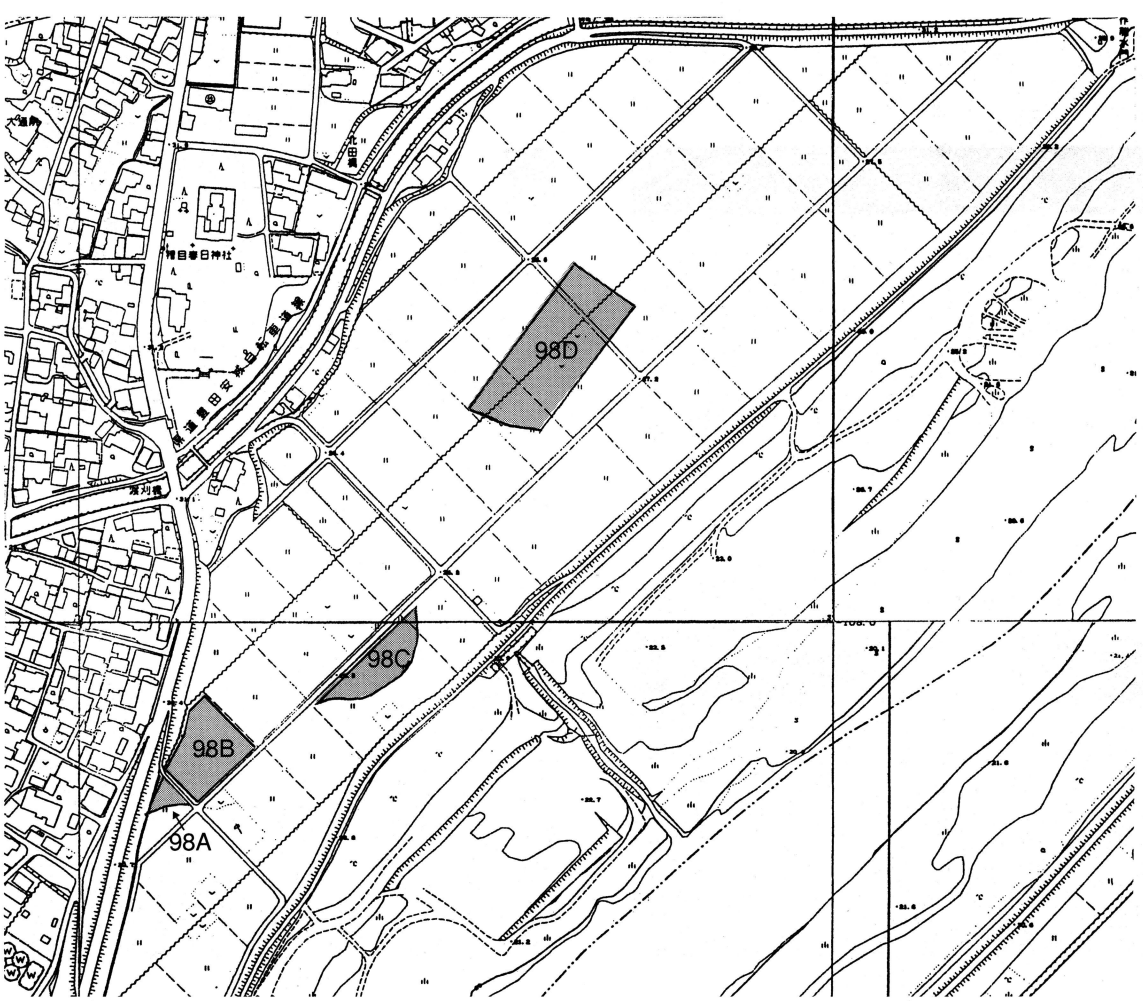
屋敷地５

水入（みずいり）遺跡

調査の経過　水入遺跡は、豊田市渡刈町水入地区（字下糟目及び大屋敷）に所在し、碧海台地端の明治用水堤防から矢作川中流域右岸堤防間の低地に位置する。なお、水入地区（15.3ヘクタール）は昭和34年に区画整理をうけている。発掘調査は第二東海自動車道の豊田東インターチェンジ建設予定地内の事前調査であり、日本道路公団から愛知県教育委員会を通じた委託事業として、平成10年7月から8月にかけて範囲確認調査を、平成10年9月から平成11年3月にかけて本調査を実施した。本年度の本調査面積は10,000㎡で、A～Dの4つの調査区に分けて調査を行った。

調査の概要　調査の結果、水入遺跡は古墳時代中期、奈良・平安時代前期、鎌倉時代、戦国時代、そして江戸時代の5期に大きく区分して考えることができる。近世以降では水田遺構を中心とし、中世以前では洪積段丘面（篭川面）に掘り込まれた住居跡群や土坑墓群に代表される遺跡である。また、矢作川により近い調査区（C区）では堤状遺構が確認されている。

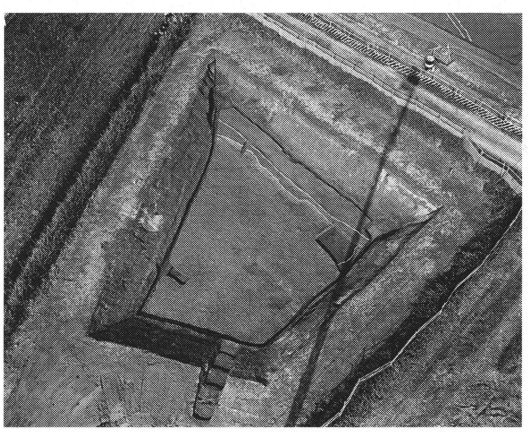
（木川正夫）



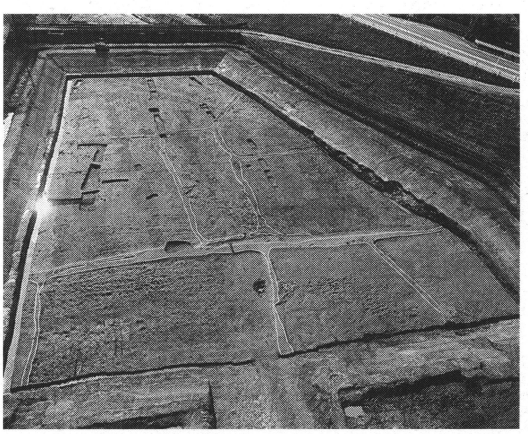
第1図　調査区配置図（1：5,000）

A・B・C区上面　A・B・C区上面では、A期、B期の2時期の水田跡が検出された。A期水田は中世以降、B期水田は江戸時代のものと推定される。畦畔は、高さ約5～15cm、幅約40～90cmで、畦畔による区画から割り出した一筆あたりの推定平均面積は、A期水田が約100㎡、B期水田が約150㎡であり、B区においては、A期水田面に平均約21cmの明瞭な足跡群が確認された。ちなみに、A・B・C区ともに、B期水田面の足跡群は確認されていない。また、C区においては、戦国時代のものと推定される堤状遺構の最先端部も検出された。堤状遺構は、中世に構築されたと思われる築堤土を核として、戦国時代に円礫を積み上げて再構築し、さらに、江戸時代初頭にその廻りに土盛しており、最低2回の拡築が確認できた。ただし、洪水や削平など、後世の破壊が著しく、その全貌をとらえることは困難であった。堤状遺構以後の遺構としては、江戸時代後半のものと推定される4条の溝と18基の土坑が検出され、いずれも耕作に関連するものと思われる。堤状遺構は、平成11年度調査区内へ延びていくと考えられ、今後の調査により全体像が明らかにされるであろう。

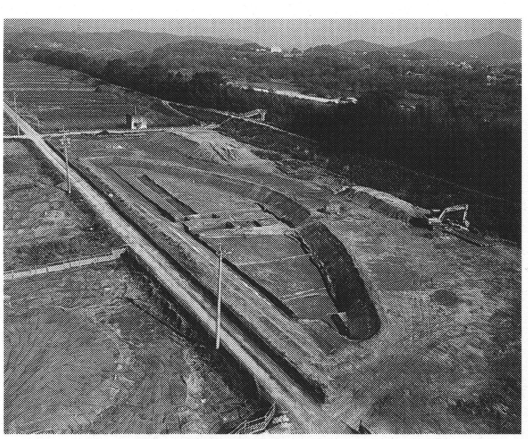
（鈴木達也）



A区全景



B区全景

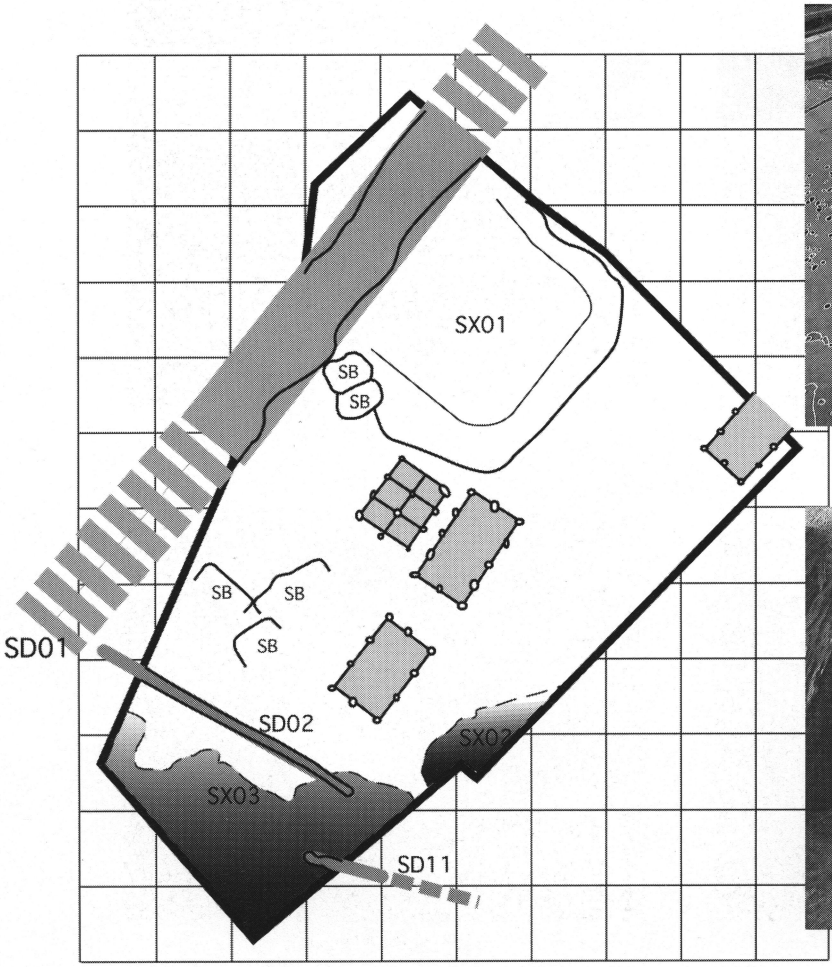


C区全景



C区堤状遺構

B区下面　B区下面では奈良・平安時代後期を中心とする集落が展開する。この集落は矢作川の低位段丘である篭川面に立地している。今回の調査区は水入遺跡に展開する集落の南端に相当すると思われ、集落の南を限る、内外の溝を異なる地点で途切れさせ鍵状の出入り口を設けた2条の溝（SD02,11）が掘削されていた。このことは、2条の溝より南側は遺構、遺物ともに稀薄となることからも推定できる。また本調査区の北西部では、集落の北西を限る大溝（SD01）が検出された。この大溝は幅3m、深さ2.5mをはかり、断面は箱薬研状を呈する。また、この溝は湧水層を掘り込んでおり、開口時にはかなりの水量があったことが推測される。掘削以降、幾度かの掘りなおしが行われており、出土遺物から掘削時期は5世紀後半、埋没時期は13世紀前半と考えられる。この大溝の性格は規模などから単なる屋敷地の区画溝とは考えにくく、水入遺跡に展開する集落全体を規制するような性格を想定することができる。加えてC区下面の遺構との関連から水運に関する施設の一部であることも考えられるが、詳細は今後の発掘調査の結果をまたなければならない。そして、これらの溝で区画される空間に掘立柱建物4棟（うち1棟は総柱建物＝倉庫？）、土坑・柱穴群が展開する。また、大溝に付随する施設としてSX01がある。この遺構は段丘面を掘削し、人為的に平坦面を作り出している。この平坦面に遺構はまったく検出されておらず、広場としての利用がなされていた可能性が高い。　（川井啓介）



第2図　B区下面遺構配置図（1：500）



B区SX01・SD01全景



B区SD01遺物出土状態

C区下面　沖積層下の低位段丘面は矢作川に向かって緩やかに下っていき、その上面で近世初頭までの遺構が確認される。そして本調査区では、往時の矢作川に面していたとみられる崖面が確認された。

崖面はほぼ直線的であり、北東から南西に向かって延びている。98B区ではこのような崖面は確認されていないが、調査区南端を最下点として傾斜しており、おそらく崖面は98B区南端をかすめるようにして天神前遺跡方面に続いていると推定される。現在明らかになっているだけで直線部分は約 80mをはかる。崖面から段丘側へ約5mまでの範囲は人頭大以下の円礫が露出した状態にあり、河原のような景観をつくっている。このような景観は、崖下の埋土の状況や礫間の出土遺物からみて中世まで続いていたと思われる。また、崖面に対する積極的な造作の痕跡は確認されなかった。

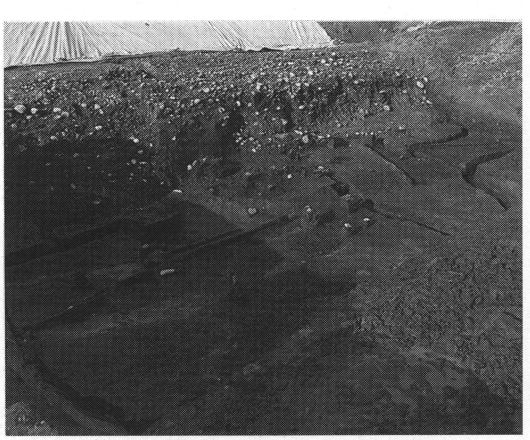
崖下の段丘面高より下の埋土は、奈良時代以降の遺物が含まれる層位は砂主体の水性堆積であるが、その下の古墳時代中期の土器がまとまって出土する層位はシルト主体で植物遺体・炭化物を多く含んでいる。当該期の土器は調査区の数カ所で集中する傾向がうかがわれ、小型壺・高杯が多いのが注目される。祭祀の可能性もさることながら、古墳時代の集落の存在を示唆するものでもある。　（永井邦仁）



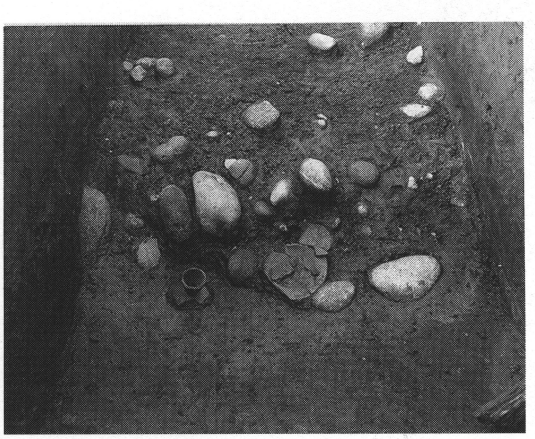
C区全景（北東から）



作業風景（東から）



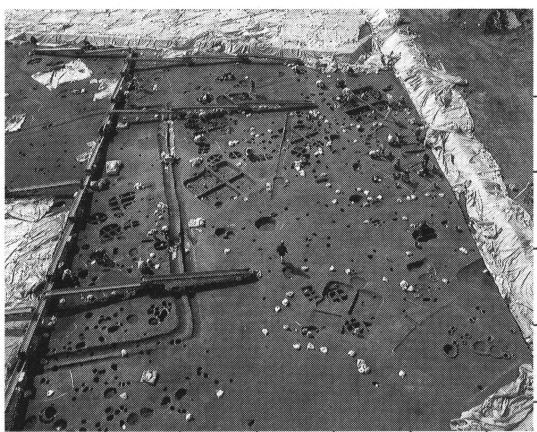
崖面検出状況（南東から）



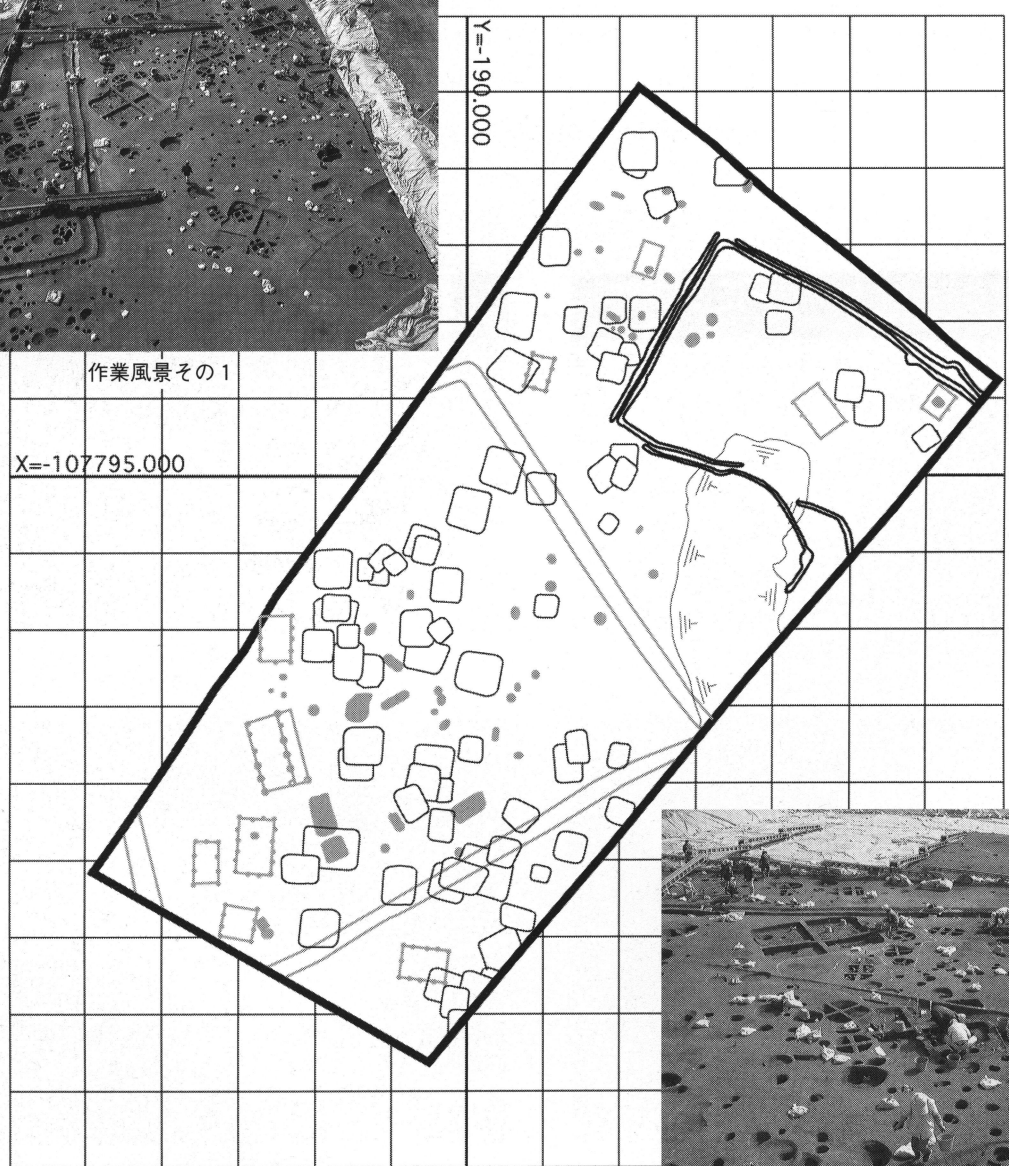
古墳時代遺物出土状況

D区　　D区で検出された遺構は奈良・平安時代後期、鎌倉時代、江戸時代の３時期に区分することができる。奈良・平安時代後期の遺構としては、調査区南東部の窪地状の落ち込みを取り巻くように竪穴住居が重複しながら展開している。竪穴住居の規模は一辺３～６m程度で、隅丸方形のプランを呈し、西・北壁にカマドが残存しているものも見られる。これ以外に、掘立柱建物や土坑等を確認した。鎌倉時代の遺構としては、方形区画を構成する溝とその内外に展開する掘立柱建物、土坑墓等を検出した。区画溝は幅２m、深さ１mを測り、断面は箱型を呈する。この方形区画は東西70m、南北55mの規模を有するが、区画内部には小区画を構成する溝や井戸などが検出されておらず、また、周囲には土坑墓群が展開することから、単純に居住域とは断定しがたく、特殊な空間であることも考えられる。江戸時代の遺構としては、調査区北東部において、溝数条、土坑等を検出した。

（川井啓介）



作業風景その１



第３図　D区遺構配置図（１：1,000）



作業風景その２

展望と課題　今年度の調査で、水入地区には低位段丘面が存在し、その上に古墳時代から中世後半までの集落が展開していることが判明した。気づいた点を挙げまとめにかえたい。

古墳時代中期における大溝の開削は、近隣の郷上遺跡でも確認されている。付近一帯で当該期に大規模な開発がおこなわれたことを示すものである。また、中位段丘上に展開する神明遺跡においても古墳時代中期が集落の最盛期とされており、ひとつの画期としてとらえられる。水入遺跡では古墳時代の居住域は未確認であるが、中央部の小谷より南側の一帯が想定される。来年度の調査に期待されるところである。

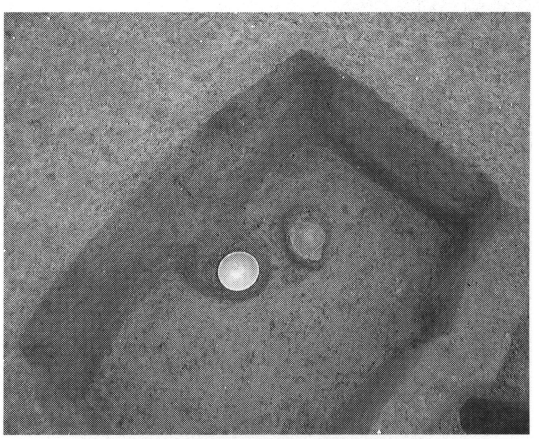
遺跡の立地が矢作川に接していることからして、当然ながら河川交通に関わる位置づけが考えられる。現在のところ98Ｂ区の大溝とＳＸ01が運河と船着き場的機能をもっていたと推定される程度である。その点で遺跡中央の小谷は重要になってこよう。

中世に限ると、土坑墓群と方形区画溝との関わりが注目される。土坑墓群は数基程度のものではなくて、ある程度まとまった数になるとみられる。そのような「墓域」の形成に区画溝とその内側がどのように関わっていたのだろうか。また、98Ｃ区から北西に延びる戦国期構築の堤状遺構はどのような目的があったのだろうか。

「埋もれたムラ」の解明は始まったばかりである。　（永井邦仁）



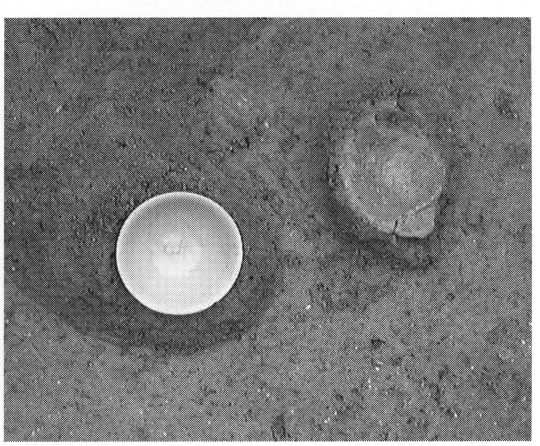
Ｄ区作業風景



Ｄ区土坑墓その１



作業風景その３

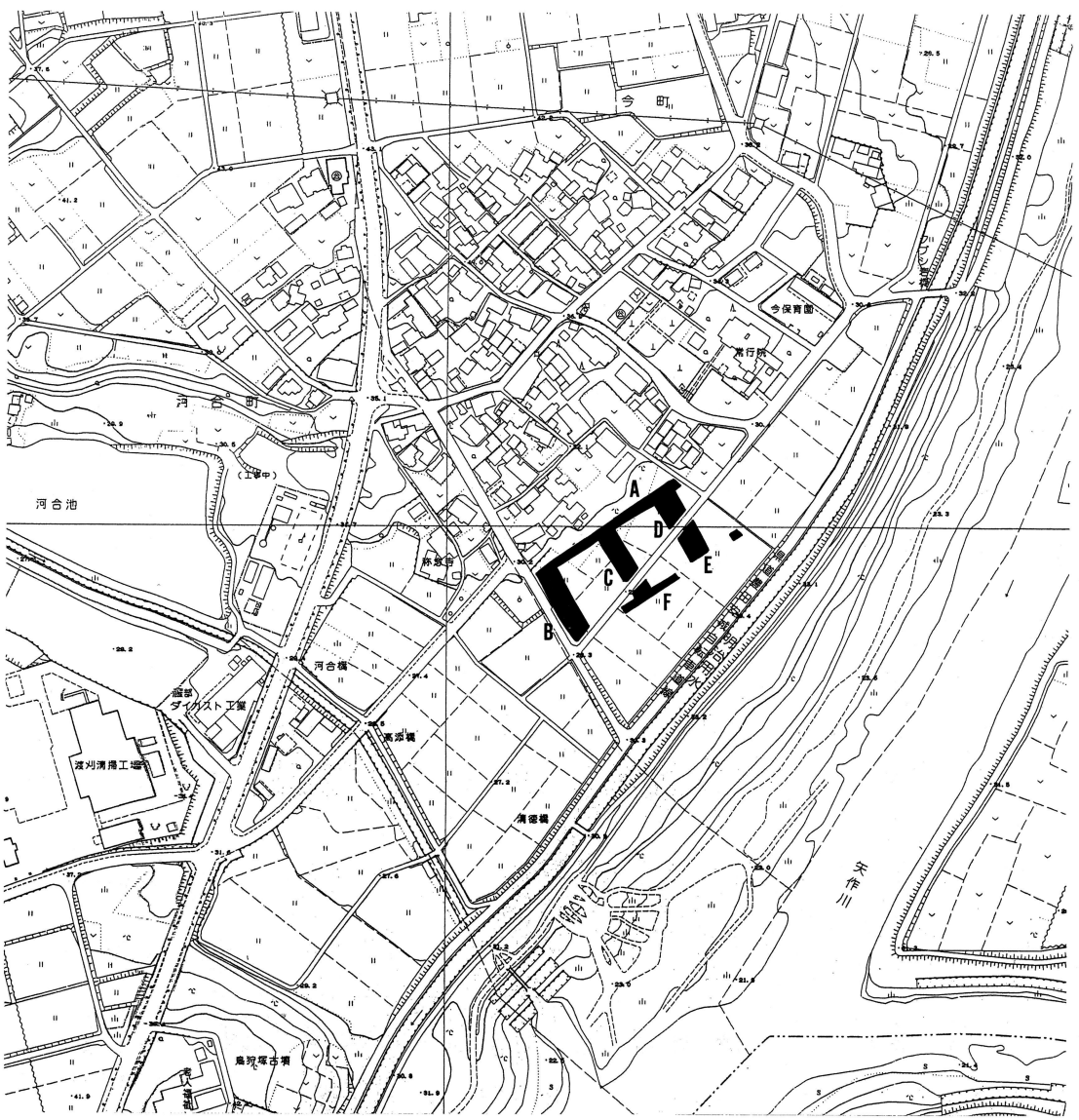


Ｄ区土坑墓その２

今町（いまちょう）遺跡

調査の経過　今町遺跡は豊田市今町元屋敷に所在する縄文時代から江戸時代までの複合遺跡である。矢作川右岸の碧海台地上に立地し、標高は27～28ｍを測る。調査は第二東海自動車道建設に伴う事前調査として、アジア航測株式会社に発掘調査作業を委託して行った。本年度は平成10年９月から平成11年２月まで4,400㎡を調査対象とし、便宜上Ａ～Ｆ区の６調査区にわけて実施した。

調査の概要　調査の結果、2,500基を超える遺構とコンテナ数50箱以上の遺物が確認された。これらはＡ期（縄文時代中期後半～後期前葉）、Ｂ期（奈良時代）、Ｃ期（鎌倉時代～室町時代）、Ｄ期（戦国時代～江戸時代初頭）、Ｅ期（江戸時代）の大きく５期に分けて考えることができる。このうち、Ｄ期とＥ期においては調査区のほぼ全域に遺構が分布することから、この時期が今町遺跡の主体であると考えられる。

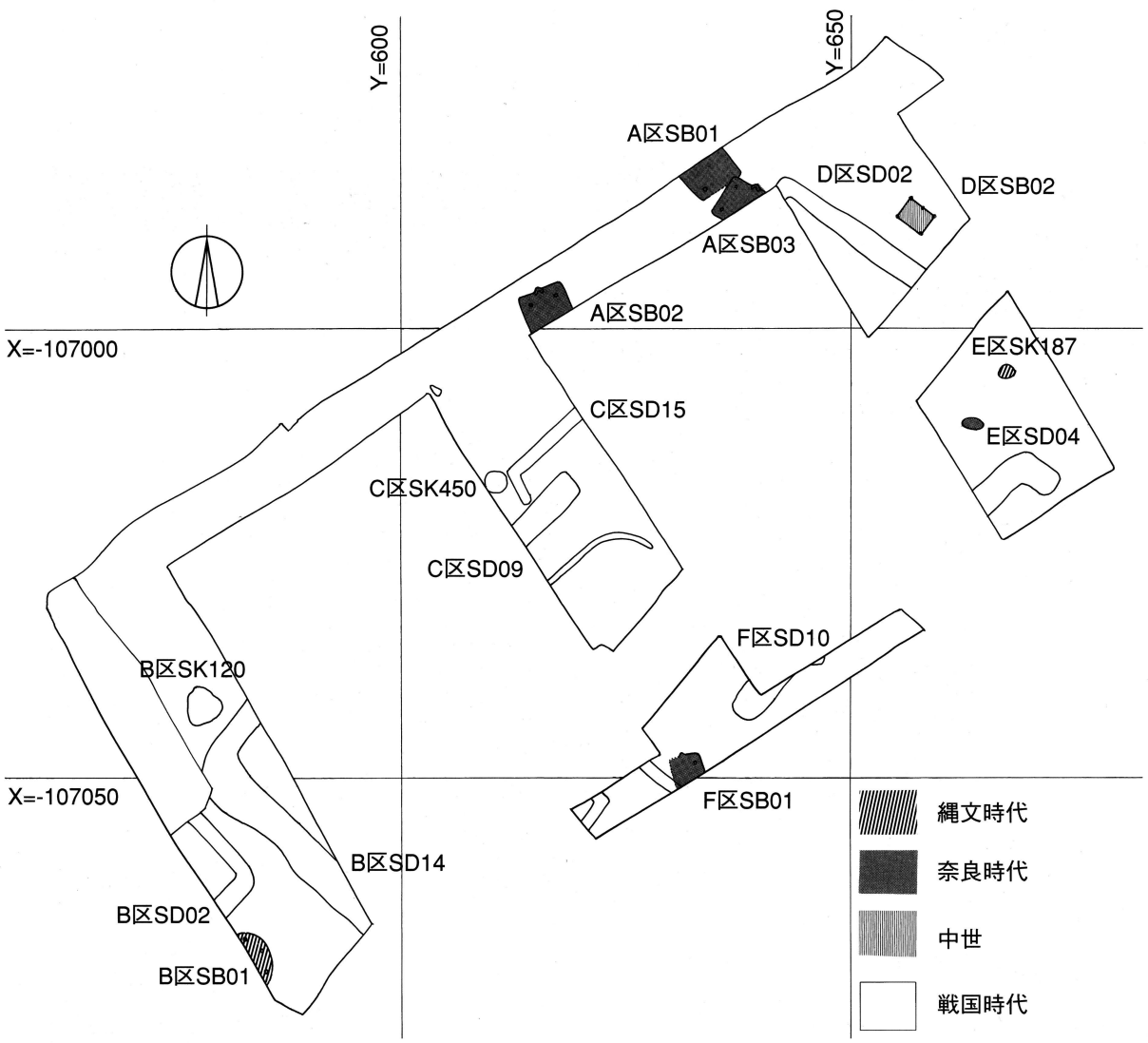


第１図　調査区位置図（１：5,000）

A　期　　A期に属する遺構には、竪穴住居１棟と土坑がある。Ｂ区ＳＢ01は直径が約６ｍの円形
(縄文時代) プランと推定される竪穴住居で、ここから縄文時代後期前葉と位置付けられる土器が数点出土した。また、赤褐色粘質土を埋土とする深さ１ｍ前後の土坑が数基検出されており、そのうちＥ区ＳＫ187から縄文時代中期後半と思われる土器が出土した。

B　期　　B期の遺構には、竪穴住居４棟などが存在する。これらはいずれも方形プランを呈する
(奈良時代) と考えられ、カマドが残存していたのが３棟認められた。Ａ区ＳＢ01は一辺が5.6ｍの規模を持つもので、主柱穴の一つから８世紀中頃の須恵器杯身が出土した。 また、Ａ区ＳＢ02は一辺が5.3ｍの規模を持つ竪穴住居である。

C　期　　C期の遺構として多数のピットなどが確認されており、掘立柱建物が数棟存在したと考
(中世)　えられる。Ｄ区ＳＢ02は１間×２間の掘立柱建物で、このうち１基の柱穴から13世紀前半の灰釉系陶器椀が出土した。この他に、Ｅ区でＣ期に属する遺物が出土する柱穴が多数検出されており、該期の遺構は調査区東半からさらに東へ展開したものと想定される。



第２図　縄文～戦国時代遺構図（１：800）

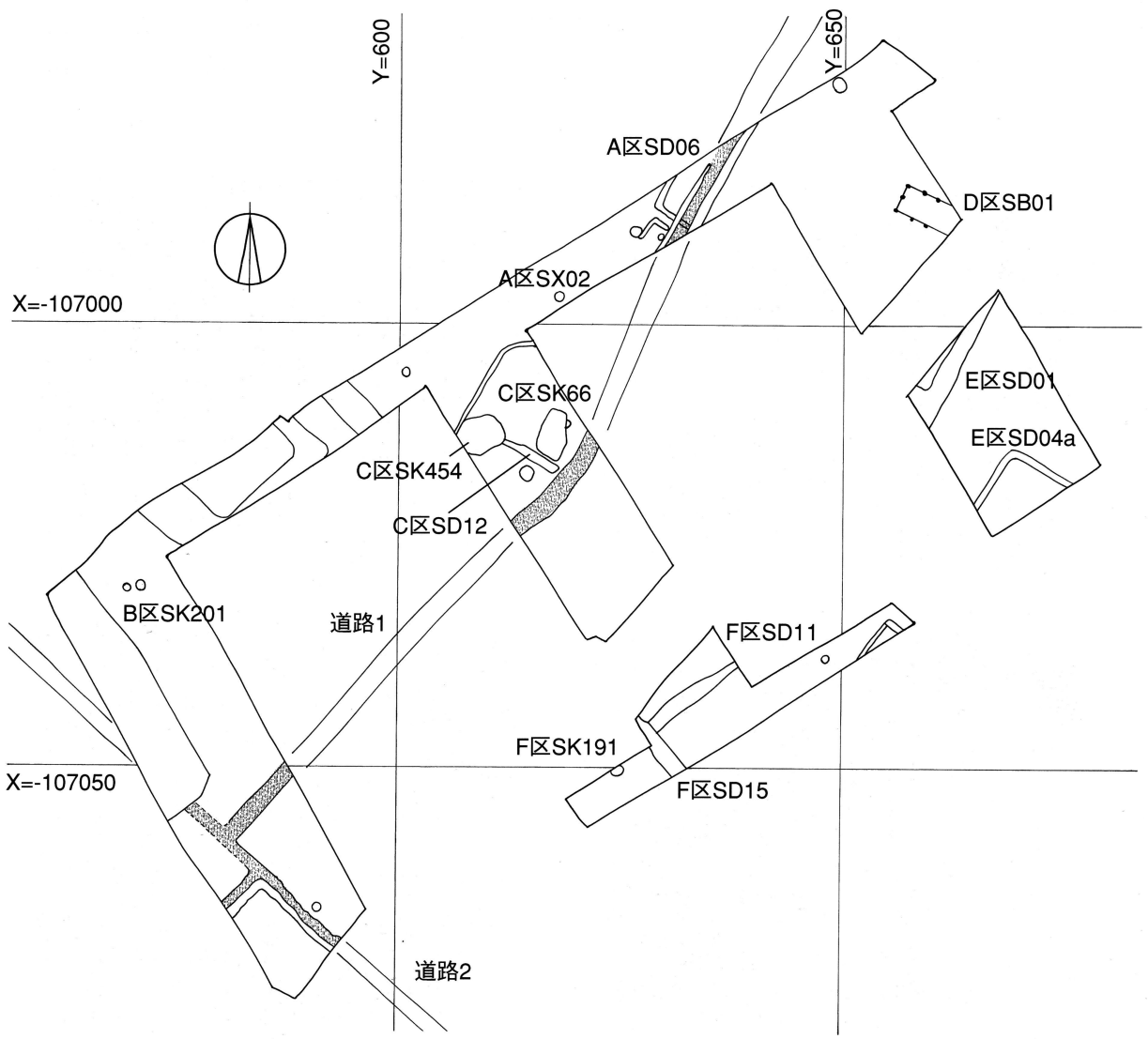
D　期
(戦国時代～江戸時代前期)

D期に属する遺構には堀、井戸、掘立柱建物などがある。

B区SD02・SD14、C区SD09、D区SD02、E区SD04、F区SD10は幅3m前後の堀で、大半が16世紀中葉～17世紀前半に位置付けられる。これらがどのように関連して存在したかについては調査区の制約のため明らかにし得ないが、一辺が約100mの規模を持つ屋敷地の存在が想定される。また、C区SD09とL字に屈曲する箱堀C区SD15で「桝形」を形成していたと考えることも可能である。

C区南半部とE区などでは該期のピットが多数検出されており、屋敷地内に複数の掘立柱建物が存在したことが予想される。また、B区SK120とC区SK450は素掘りの井戸で、E期の井戸に比べ堀肩が大きく、上層は礫で埋め立てられていた。

D期の屋敷地の性格は、堀で囲まれ「桝形」を有する防御を意識した構造を持つこと、調査地点及び周囲に「元屋敷」、「北垣内」、「前田」といった城館に関連する地名が存在することなどから、城館跡であった可能性が考えられる。



第3図　江戸時代遺構図（1：800）

E　期
(江戸時代)

江戸時代の遺構には道路、溝、井戸、埋甕、石敷遺構、掘立柱建物など多様なものがある。これらの遺構は大きく江戸時代前半と後半に区分することができるが、ここでは江戸時代後半の遺構を中心に記述する。

まず、道路は大きく２条（Ｂ区ＳＦ01、Ｃ区ＳＦ01、Ａ区ＳＦ01を結ぶ道路１とＢ区ＳＦ02の道路２）が検出され、Ｂ区でＴ字に交差している。Ｂ区ＳＦ01とＳＦ02、Ｃ区ＳＦ01は路肩が石列で護岸されており、Ａ区ＳＦ01は側溝が設けられていた。道路１の両側に屋敷地が展開したと考えられ、Ｃ区ＳＤ12、Ｅ区ＳＤ01・ＳＤ05、Ｆ区ＳＤ15は屋敷境を区画する溝と思われる。

Ｃ区ＳＤ１２は両肩を河原石で４段程度積み重ねた石組溝であるが、その周辺では水周りに関連する遺構が確認されている。Ｃ区ＳＤ12に接続する形で池状遺構Ｃ区ＳＫ454が、北東部に石敷遺構Ｃ区ＳＫ66が、南部には井戸Ｃ区ＳＫ428などが検出されている。Ａ区～Ｄ区では根石や柱痕が残存する柱穴が多数認められ、この部分に掘立柱建物が存在したようである。Ｄ区ＳＢ01は２間×３間以上の掘立柱建物であった。

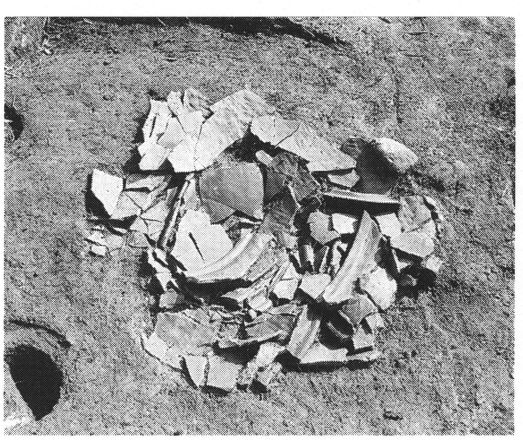
まとめ

以上、今町遺跡は戦国時代の城館跡？と江戸時代の道路に面した屋敷群が遺跡の主体となっているといえよう。付近に所在する天文12（1543）年に創始された常行院との関連が注目されるところである。

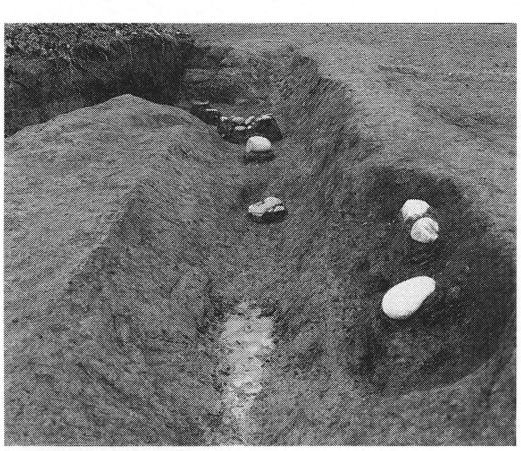
（鈴木正貴）



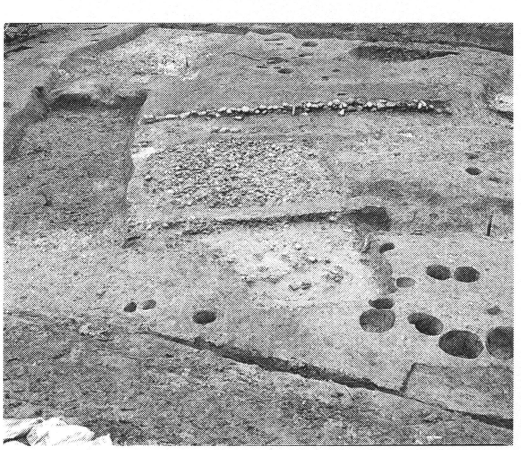
Ａ区ＳＢ02



Ａ区ＳＸ01埋甕



Ｄ区ＳＤ02



Ｃ区ＳＫ66とＳＤ12

天神前（てんじんまえ）遺跡

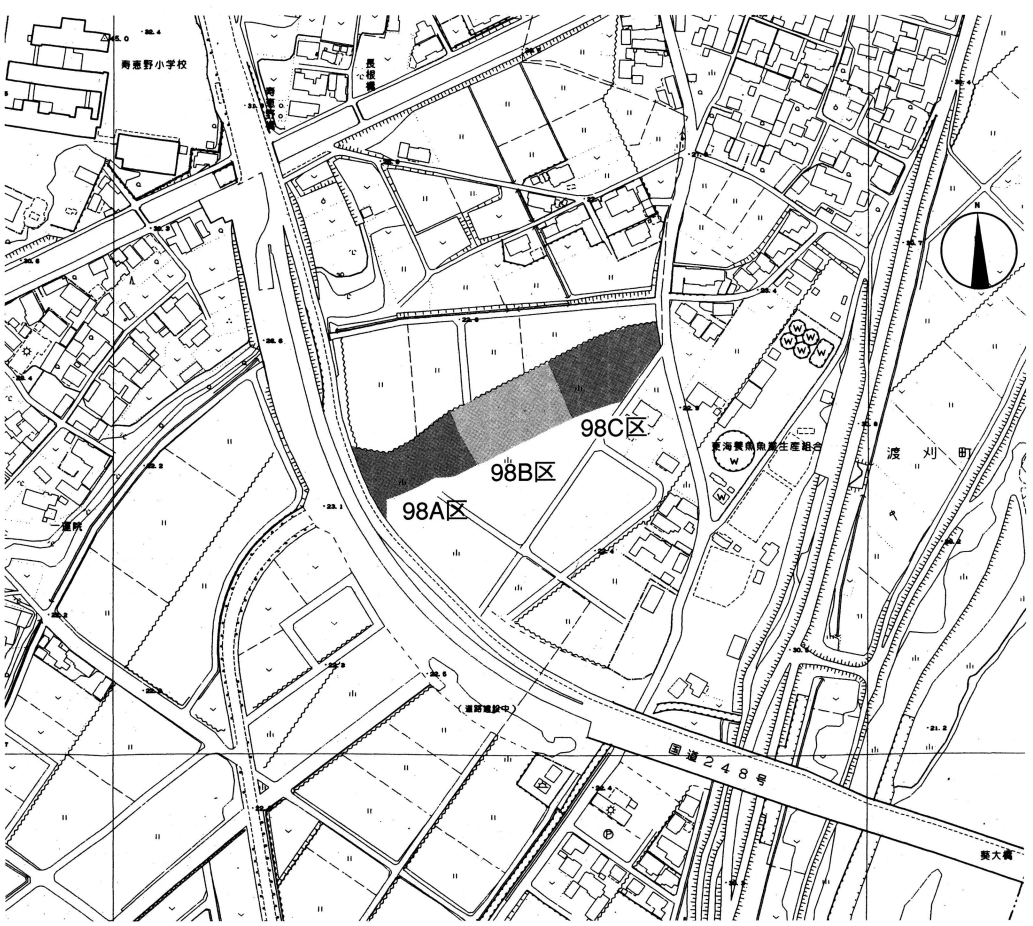
調査の経過　天神前遺跡は、豊田市鴛鴨町天神前に所在し、古墳時代から戦国時代までの複合遺跡である。遺跡は、碧海台地の段丘面より一段下がった、矢作川の中流域の沖積平野に所在する。南西部には郷上遺跡が、北東部には水入遺跡が隣接する。標高は21～22mを測る。

発掘調査は、国道248号線延伸工事の事前調査として、愛知県土木部より愛知県教育委員会を通じた委託事業として実施した。本年度は8,000㎡をＡＢＣの３調査区に分け平成10年４月より平成11年３月まで調査した。

調査の概要　調査の結果、天神前遺跡は５期に分けられる。上面の遺構は標高海抜21.5m前後に存在し、奈良時代、平安時代、鎌倉時代、戦国時代の４時期の遺構が検出された。下面の遺構は標高海抜21m前後に存在し、古墳時代の遺構が検出された。

以下時代順に調査結果の概要を報告する。

古墳時代　この時期の遺構には水田跡（？）と竪穴状遺構（Ｂ区ＳＢ501）がある。Ｂ区遺跡中央部で北東・南西方向に走る水路（Ｂ区　ＳＤ504）と、Ｂ区中央部南側で南東部にかけての落ち込み（Ｂ区ＮＲ501）があり、２つ遺構の間の高まりに水田跡（？）が存在した。畦畔は



第１図　調査区位置図（１：5,000）

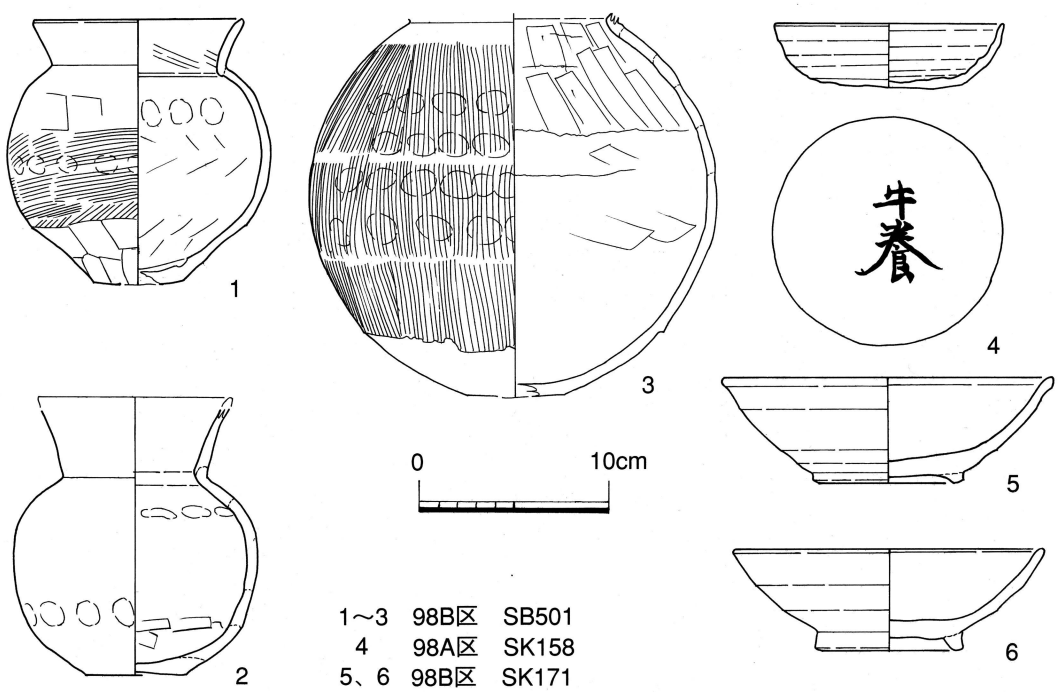
ＳＤ504に規定される形で検出され、水田区画の規模は４㎡～10㎡を計る。小畦の残存高は最大で10㎝を測る。Ｂ区南側には地床炉を伴った竪穴状遺構があり、ここでは松河戸Ⅱ式併行期の土師器壺（１・２）、甕（３）高杯などが出土した。中でも、床面直上から出土した土師器のうち、２つの直口壺は、入子状に重なって出土した（１・２）。

奈良時代　Ａ区ＳＫ158より「牛養」と墨書された須恵器（４）が出土した。時期は８世紀中葉。「牛養」についてはいろいろな意味が考えられるが、人名とするのが一番妥当であろうか。

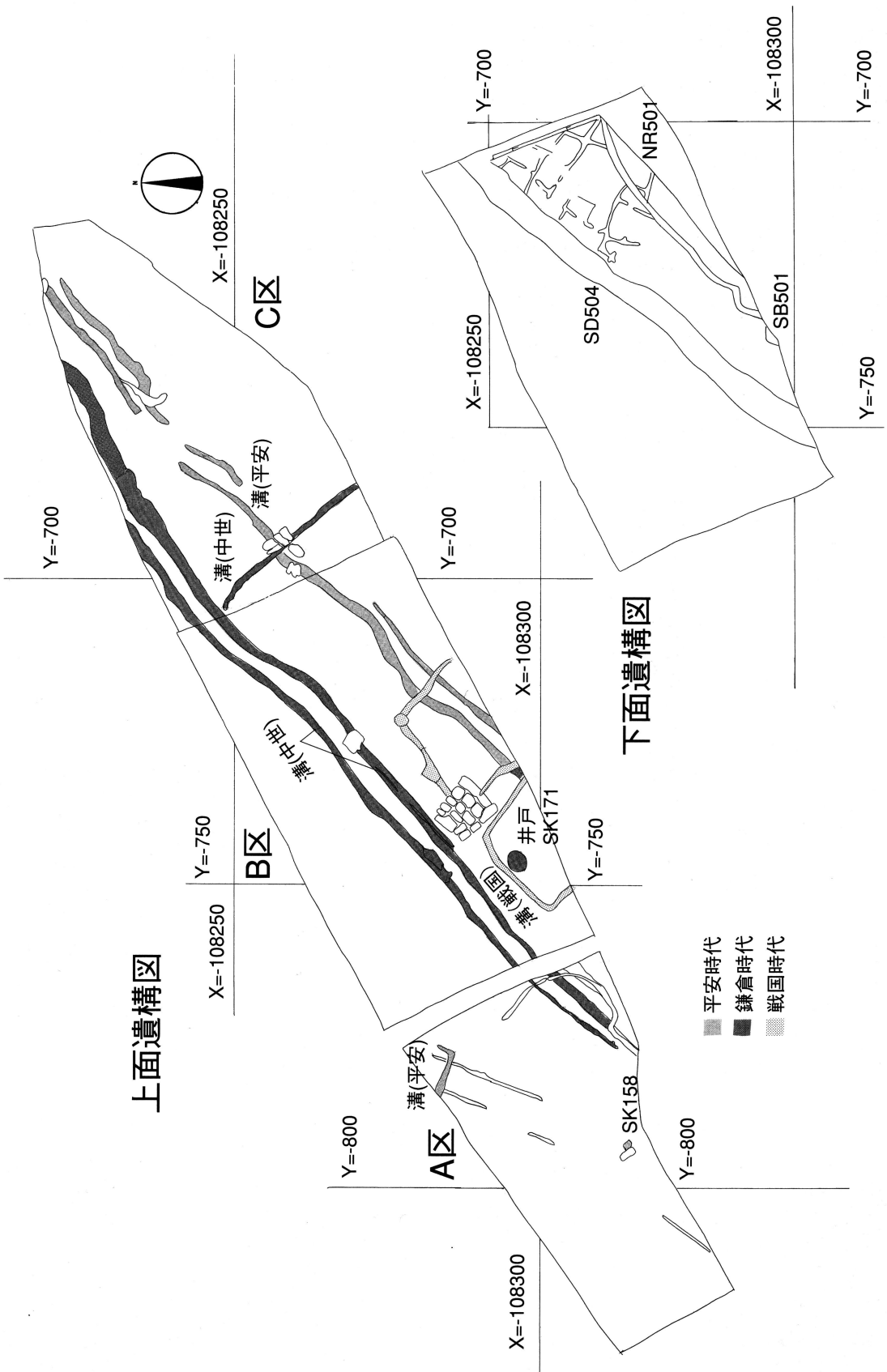
平安時代　主要な遺構として、Ｂ区中央部とＣ区北東部との間を平行して走る２条の溝とＡ区北東部で検出されたＬ字形の区画溝１条がある。いずれの遺構からも灰釉陶器が出土した。２本の平行した溝は左右に少し振れながらも約２ｍ間隔で続くので、道と考えられる。

鎌倉時代　上面の遺構の中心の時代である。主な遺構としてＡ区からＣ区まで貫く２本の平行した溝、およびＣ区でこの溝に直角に交わる溝、Ｂ区の井戸があり、その他多くの溝、土坑を検出した。２本の平行した溝は約３～４ｍ間隔で続き、これも道と考えられる。時期は12～13世紀。井戸（Ｂ区ＳＫ171）はＢ区南西部で検出された。ＳＫ171は井戸側に曲物を４段に積み重ねた形式の井戸である。時期は12世紀後半。廃絶したときに捨てられたであろう板材が横に置いてあり、その上から灰釉系陶器（５・６）などが出土した。

戦国時代　Ｂ区南側より、コの字形の区画溝２本が検出された。区画は１辺が約15mあり、区画内にピット群があることから、屋敷地と考えられる。また、Ｂ区北西側の落ち込み部分の埋土中より、内耳鍋など戦国時代の遺物や、永楽銭、陶丸などが出土した。　（後藤英史）



第２図　出土遺物実測図（１：４）



第３図　調査区主要遺構図（１：1,000）

まとめ　　今回の調査成果を要約すると、以下の通りである。

1　古墳時代中期の竪穴状遺構と水田跡と思われる遺構群を確認した。水田跡は旧流路に挟まれた微高地上に展開するが、畦畔は部分的に検出されるに留まったこと、水田耕作土などからプラントオパールが確認されなかったことなどから、なお慎重に検討を要する遺構群である。また、竪穴状遺構は規模が小さいことと遺物出土状態が特徴的であることから、農耕祭祀に伴う遺構であると想像できる。これらの状況からみて、古墳時代の本遺跡は隣接する郷上遺跡の古墳時代集落に付随する生産遺跡の可能性が考えられよう。

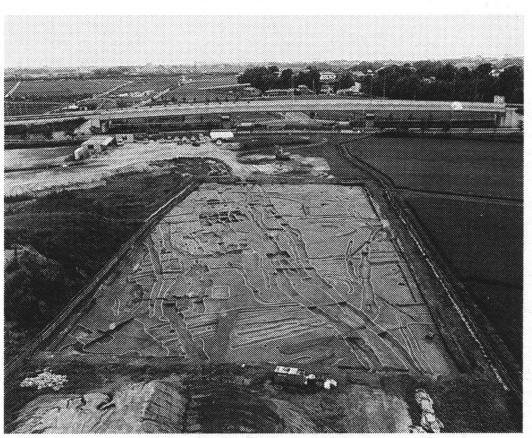
2　平安、鎌倉時代の中心的な遺構として、ほぼ調査区全体を貫く形で北東から南西に向けて走る道路が2条検出された。道路以外の主要な遺構としては区画溝と井戸がわずかに存在する程度である。該期の遺物が僅少であること、平行する非常に浅い溝が多数認められたことなどから、本遺跡が居住域であったとは考えにくく、畑などの耕作地か荒蕪地の中に道路が走っているという光景が想定される。

3　戦国時代の状況も鎌倉時代とほぼ同様であるが、道路の南側に一辺が15m前後の方形区画が2つ出現する。16世紀代の比較的短い期間に営まれた居住域の可能性が考えられ、隣接する郷上遺跡の集落縁辺部に相当すると推定できる。

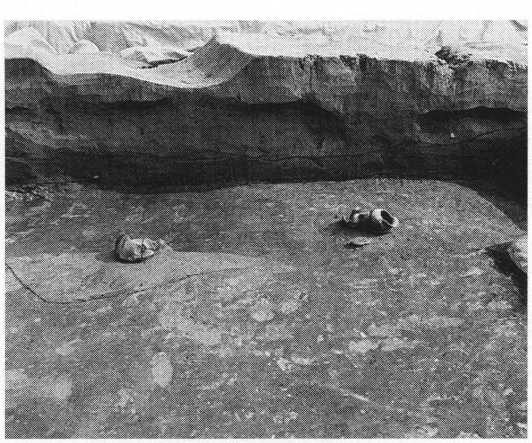
このように、本遺跡を考えるためには各時期の集落跡となっている郷上遺跡との関連を中心に検討していく必要があるだろう。　　（鈴木正貴）



A区上面全景（南西から）



B区上面全景（北東から）



B区下面ＳＢ501遺物出土状況



B区下面全景（北東から）

水入（みずいり）遺跡範囲確認調査

調査の経過　水入遺跡は豊田市渡刈町字下糟目および大屋敷地内に存在し、碧海台地端から矢作川にかけて広がる遺跡である。調査は第二東海自動車道建設予定地内で実施した。調査方法は、16箇所の確認調査ラインを設定し、その周辺に確認試掘坑（T.T.）を設置した。断面観察と並行して各層位単位の遺構検出作業を行い、遺構の検出と出土状況を精査し、遺跡の性格とその範囲を確認することに主眼においた。なお、調査面積は1,600㎡である。

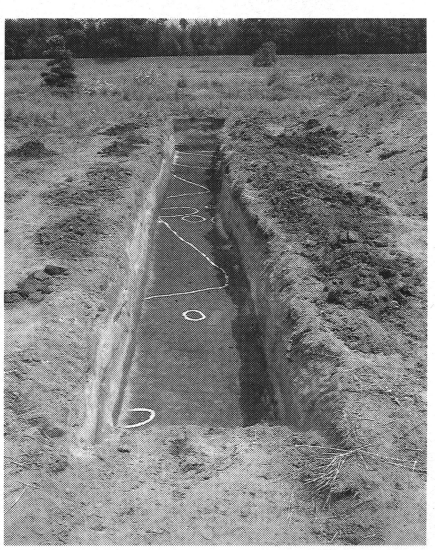
調査の結果　調査の結果から水入遺跡の範囲と性格を想定する。まずその範囲であるが、T.T.9-4は耕作土直下で礫層が露出し、区画整理の時点で遺物包含層および遺構面が削平されたと考えられる。また T.T.-16ライン周辺では、砂層が調査可能な深さ（現地表面から深さ4.0m程度）以上に堆積しており、このことから常にある程度の流水がある沼沢地のような環境であったことが考えられ、河川の影響を強く受けていたと思われる。この範囲以外は、①台地および台地端部には遺物包含層が残存しており、遺構が調査範囲全面に展開する可能性が高いこと、②沼沢地においても T.T.3-3や T.T. 14-2では護岸施設の可能性が考えられる遺構が確認されたこと、③その他の沼沢地においても堆積層から遺物が出土すること、からほぼ調査範囲全域が遺跡であると考えられる。

次に水入遺跡の性格については、出土した遺物の時期が古代・中世・戦国の3期に区分されることから、遺跡の中心となる時期も同様に3時期に区分される。その広がりは、古代・中世に属する遺物が調査範囲全域で出土することから、遺跡全域に当該期の遺構が展開することが想定される。特に調査範囲中央部の T. T. 5・8・10のラインにおいて良好な遺物包含層とともに遺構が確認されていることから、この周辺が水入遺跡の中心部であると考えられる。これに対し、戦国時代の遺物は大屋敷地区を中心として展開していると思われる。また、字下糟目と字大屋敷の字界周辺には小規模な谷地形が存在し、この場所で台地の落ち込みが確認されており、入り江状の地形を形成していることが考えられる。現状では規模、時期等の特定は困難であるが、矢作川との関連から、利水・治水に関連する遺構の存在も推定される。

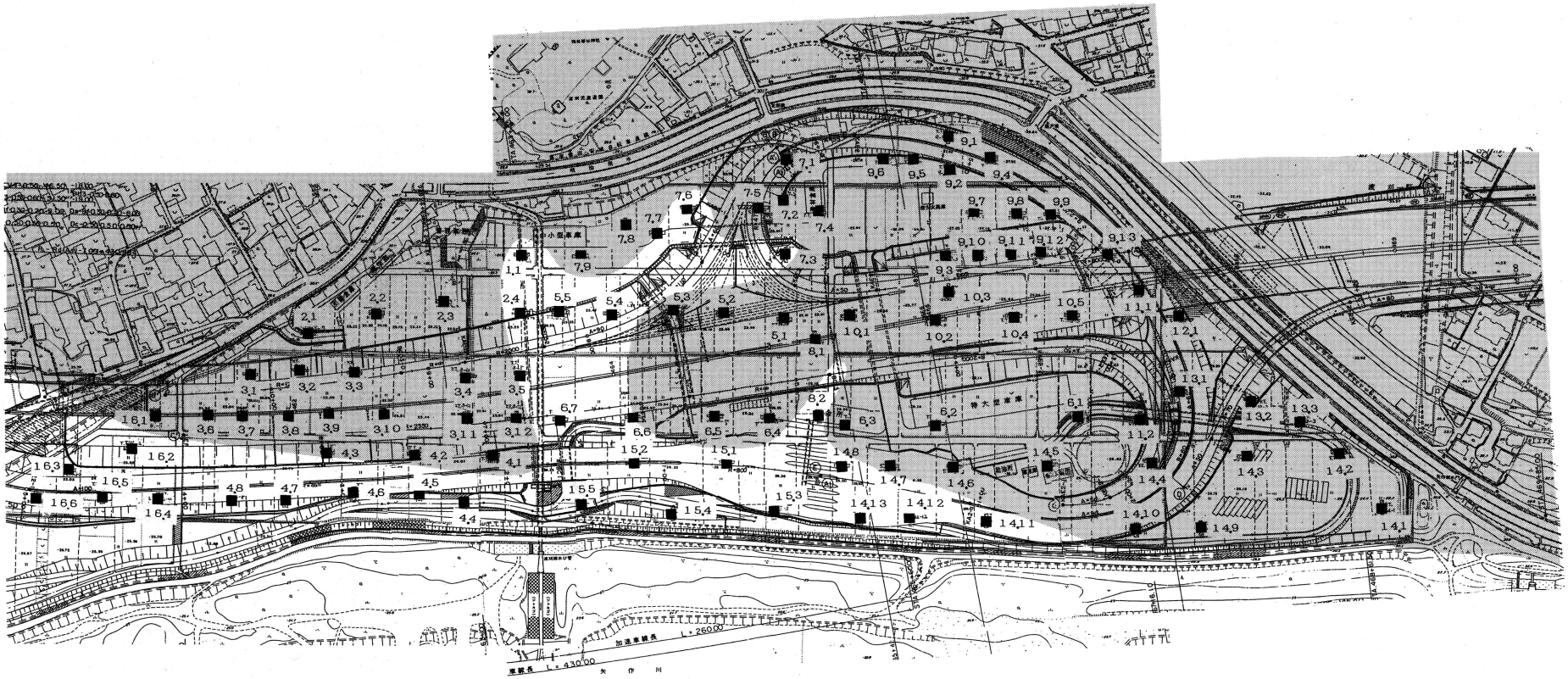
（川井啓介）



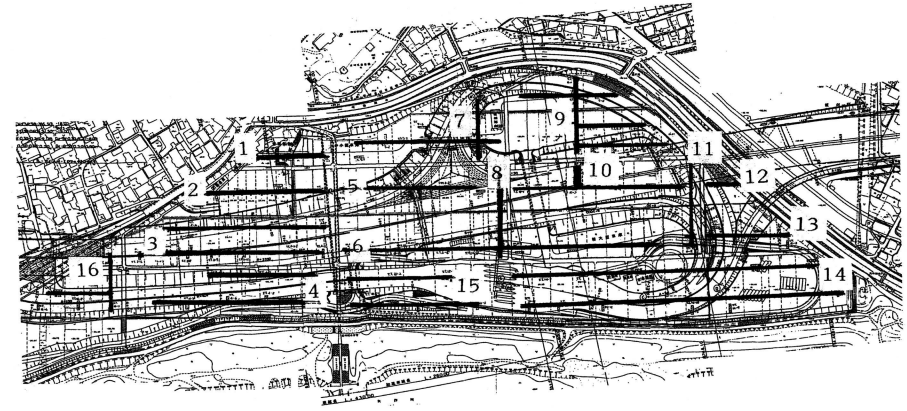
範囲確認調査作業風景



範囲確認調査T.T.8-1



第１図　範囲確認調査 調査トレンチ位置図（１：4,000）　アミ部分は台地



第２図　調査トレンチ認定ライン位置図

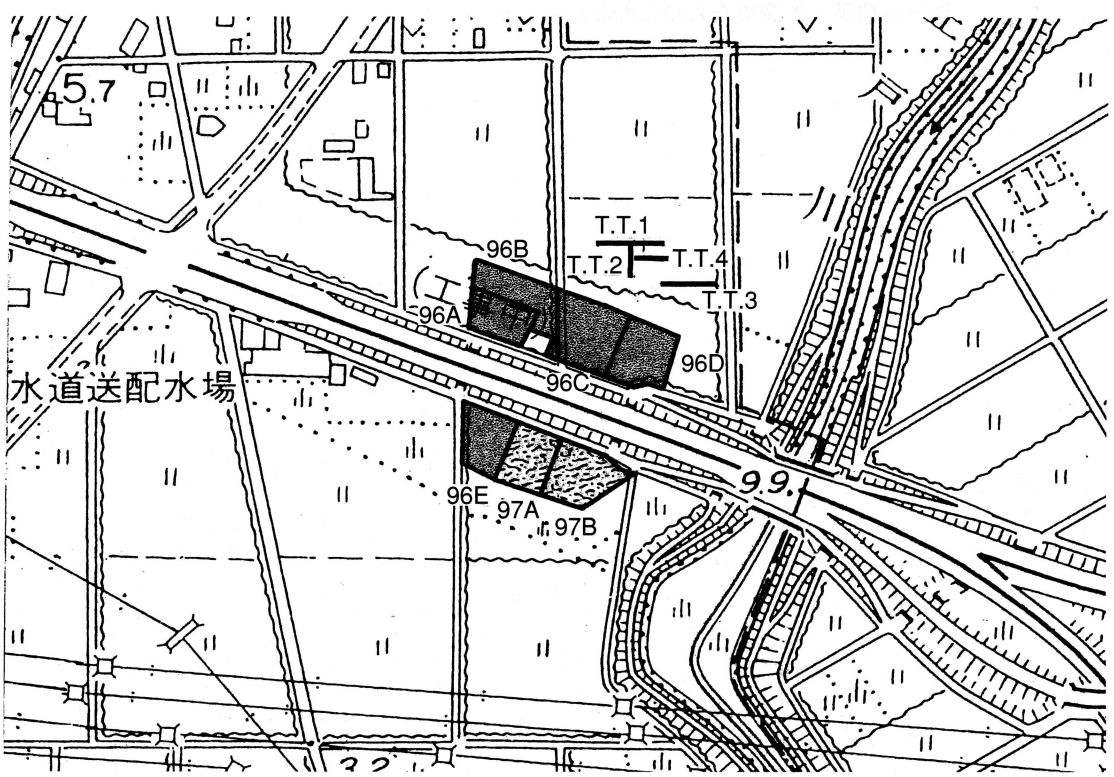
大脇城（おおわきじょう）遺跡範囲確認調査

調査の経過　大脇城遺跡は豊明市栄町梶田および元屋敷内に所在し、境川の支流である正戸川右岸の沖積地に立地する。1996・97年度に実施した発掘調査で、16～17世紀の城館跡を中心とする遺跡であることが判明している。

今回の調査は、第二東海自動車道関連施設予定地内にテストトレンチ（T.T.１～T.T.４）を設定し、層序断面観察と遺構・遺物の検出作業を行い、遺構の有無、遺物の出土状況等から遺跡範囲の確認を目的として実施した。調査面積は250㎡である。

調査の結果　調査の結果、全てのテストトレンチとも、耕作土（表土）直下で地山に達し、その上面が遺構検出面となっており、T.T.１とT.T.３およびT.T.４において溝６条を検出したが、遺物が皆無であるため、遺構の厳密な時期決定には至らなかった。ただ、これらの遺構については、規模や断面形状に差異があるものの、埋土がほぼ同一と認められるので、同時期に存在した可能性が考えられる。また、隣接地における過年度調査結果に依拠すれば、埋土の状況や軸線方向等がよく符合し、これらの遺構は戦国期から近世にかけての「大脇城跡」の一部を構成するものと考えられる。以上のことから、今回の調査対象地内においては、これらの溝群が展開するT.T.２よりも東側の部分が遺跡範囲と考えられる。

（福岡晃彦）



調査区位置図（１：5,000）

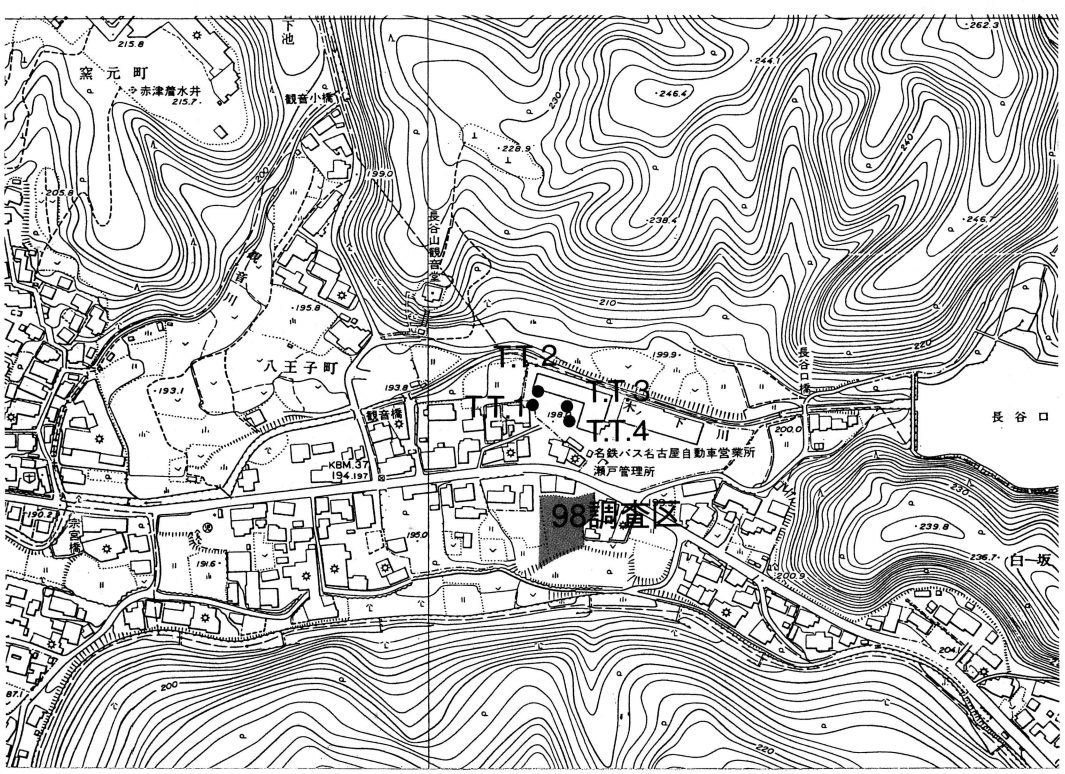
八王子（はちおうじ）遺跡範囲確認調査

調査の経過　八王子遺跡は瀬戸市八王子町地内に所在する遺跡で、赤津川と木下川に挟まれた開析谷に形成された狭小な沖積地に立地する。発掘調査は、東海環状自動車道建設に伴うもので、昨年度は範囲確認調査を計100㎡行った。その結果、縄文時代早期（粕畑式）および中世の遺構・遺物包含層の存在が確認された。本年度は、昨年度の調査成果をふまえ、本調査と昨年範囲確認を実施できなかった木下川左岸の一部の調査を実施した。本稿では、この内範囲確認調査の結果を報告する。調査期間は平成11年1月12日から1月19日にかけて、調査面積は20㎡である。

調査の結果　4箇所にトレンチを設定し、バックホウによる掘削を行った後、土層の断面観察及び各層単位の調査を行い、遺構・遺物の有無を確認した。

客土の除去から開始し掘削を進めていくと、T.T.1では、地表下約1.6mから層厚約15㎝程の中粒砂を含んだ黒褐色粘質シルト層が堆積する。この層から石匙・縄文土器が出土し、包含層と確認された。T.T.2もT.T.1と同様の様相であった。T.T.3では、地表下約1.3mから層厚約20㎝の床土層を含む暗褐色砂質シルト層が堆積する。この層から灰釉系陶器が出土し、中世の包含層と確認された。T.T.4もT.T.3とほぼ同様の様相であった。4トレンチとも包含層の存在は確認できたが、遺構は確認できなかった。

以上の結果と本調査ならびに昨年度の範囲確認調査の成果等により、本遺跡は赤津川から木下川の間に連続して展開するものと推測することができる。　（黒田哲生・武部真木）



八王子遺跡範囲確認調査地点（1：5,000）

ＮＡ311窯跡範囲確認調査

調査の経過　ＮＡ311号窯跡は名古屋市緑区大高町平部高根に存在する遺跡で、東海層群が侵蝕・開析された低丘陵地の緩斜面に立地する。調査は国道302号建設予定地内で実施し、ＮＡ311号窯跡が所在すると思われる地点を中心に、７本の範囲確認トレンチを設定した。窯体の残存基数と遺物包含層（物原）の範囲を確認するために、断面観察、遺構検出および包含層掘削を行い、遺構の有無や遺物の出土状況などを調査した。調査面積は100㎡である。

調査の結果　北東斜面に設定したT-4およびT-5のトレンチで、窯体の一部が３基分検出された。このうち２基は天井の一部が遺存していることが確認され、窯体の残存状態は比較的良好であると考えられる。また、T-4とT-7を除く各トレンチで遺物包含層となる盛土が確認され、T-2では黒色土層（灰原）も検出された。遺物包含層は1ｍ以上堆積している部分もあり、ここからは多くの灰釉系陶器椀・皿、焼台などが出土した。この遺物包含層は２基の窯体上部にも堆積していることから、この他にも窯体の存在が予想される。出土遺物から見て、これらは12世紀後半から13世紀前半に属する窯跡と思われる。なお、南部の東斜面では遺構、遺物を確認するには至らなかった。　（鈴木正貴）



ＮＡ311号窯範囲確認調査地点（１：5,000）